
かみ・つき

B-POP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみ・つき

【Zコード】

N7035X

【作者名】

B-POP

【あらすじ】

「青春、したくはないかね？」

意味不明の勧誘文句で千古修太郎は、同じクラスの天王寺美緒が部長を務める「超科学部」なる謎の部に入部させられた。科学を超えて、魔法を実践する部活ということだが、もちろん魔法なんて信じていない修太郎。しかし、それを嘲笑うように召喚魔法の実験は成功。『自称神様』のカナメを召喚してしまう。

忍者のように足音を忍ばせ、暗殺者のように存在を消して廊下を歩く。

「ねえ？ なんでこそこそするのよう？」

「つづせ、黙つてろ。カーチャンにばれたらぶつ殺される」

リビングからテレビの音が聞こえているが、これが消えるとゲームオーバーだ。

「なんでもえ？」

「何でじゃねえ。あの女は鬼だ」

決して大げさなんかじゃない。あの女のパンチをまともに食らう勇気なんか、十六になつた今でもこれっぽっちも湧いては来ない。こんな時間に外をほつつき歩いていたことなんかがばれた日には、死刑確定だ。

部屋までの残り数歩を風のよつに駆け抜け、廊下のきしむ音に心臓まできしませて、ノブに手をかける。最後の最後まで気を緩めるな、そう言い聞かせながら扉を開ける。

ぎりぎりセーフ。

部屋に戻ってきたところで緊張の糸が切れた。後ろ手に閉めた扉の音が、今だけはホールのファンファーレのように聞こえる、とうのも決して大げさじゃない。

ため息を吐き出すと、一緒に体を支える力まで垂れ流しているようで、その場にべつたりと尻もちをついてしまつた。梅雨も近づく五月の末ともなれば、フローリングの冷たさが尻に心地よい。

そこで初めて電気をつけていないことに思い至つて、俺は手を伸ばして電気のスイッチを探る。が、どうにも高さが足りないらしく、指先はむなしく壁をなでるだけだ。

「これえ？」

不意に頭上から降つてきた声とともに、六畳の部屋に蛍光灯の安

っぽい光が充満する。

目を瞑つてもベッドに倒れこめるほどに見知った部屋なのに、吸い込む空気は他人行儀だ。微かに混入した甘い香りは、思春期男子からしてはならない。したら気持ち悪い。

「ああ、ありがと……つて、はあ？」

声よりも匂いに反応したのは別に匂いフェチだからでもなんでもない。間違つても、ああい匂いだできれば鼻を近づけて全力でかぎ続けたい、なんて思つてない。断じて。

「はい？」

目の前にはきょとんと見開かれた大きな瞳が一つ、じねんらを見下ろしている。いや、それはいい。目を見て話すのは「ミロニケーシヨン」の基本だ。ただ問題なのは、ここが俺の部屋で時刻はすでに十一時少し前で、俺が思春期男子だということだ。

つまりどういうことかといふと、

「何で、ついてきてんだよ！」

目の前にいるのが美少女だということだ。

「ん。だつてえ、あなたはもう、あたしの下僕なんだよう」

そう言やそんなやり取りをした氣もするが、混乱しそぎて記憶を呼び出せない。

距離が近すぎて全体像は見えないが、真ん丸い目や人懐っこそうに垂れた眉毛は美少女の要素としては十分だ。しかも、瞳は見たこともないほどに透き通つた、きれいなガラス細工がそこにはめ込まれているようで、見れば見るほどに吸い込まれそうになる。

自信なさそうに垂れた目じりと尖らせた唇に、何をしたわけでもないのにこちらが悪いことをした気になつてしまつ。それでも顔立ちは思わず見とれてしまつほどだ。わずかにピンク色を帯びた肌は、つつかなくてもふにふにるのが想像できる。

そういえば廊下を歩いてるときにもずっと声がしていたな、気配を殺すのに夢中だったからすっかり気がつかなかつたけど。

「なあ、聞いていいか？」

「ん？」

「廊下でもすっと、いつやつてお話してたよな」

「うん」

「声も殺さず」

「話してたよう。普通に」

「つてことは、リビングまで聞こえててもおつかしくねえよな、たぶん、おそれく、想像もしたくはないが」

「たぶん、じやないかなあ？」

脂汗が音を立ててうなじを流れている。やけに部屋が暑く感じるのは、自分の体温が下がっているからだ。雪山で凍死する理屈つてこれだよな。

「いい度胸だな」

「は、はひい！」

考えるよりも早く体が動いた。直立不動、絶対服従。これが生き残るために最善の術であることを、本能が知っている。いや、実際何をやっても死ぬんだけど、せめて死ぬなら最低限の苦痛がいいだろ？ 無駄な抵抗は苦痛を増やすだけだ。

「夜遊びの上女連れ込むって、どういう了見だ？ しかもお前、とうとう口口口に」

「い、これには、事情ございまして」

ゆっくり、上半身を動かさずに振り返ると、何よりもまず怒りのオーラが見えた。そんなものが見えるはずがないと思つてゐるのなら思えばいい、俺には見えたのだ。真紅に燃え盛る怒りの炎が。

「子の不始末は親の不始末。きつちりケジメつけさせてやんよ」

「い、いえ、これ、これこれ、こ」

掌が振り上げられ、顔面に炸裂するまでの一瞬の映像が、やけにスローモーションに見えたのだが、だからといってアイアンクローの威力までスローになるはずもない。

こめかみにめり込む圧を感じながら、俺は少しだけ記憶のねじを巻き戻してみる。今見ているものが走馬灯ではないと信じながら、

少しだけ過去に思いをはせる
どうしてこうなった？

神がこの世にいるのなら、なぜ俺にだけこんな仕打ちを……いや、
違うな。

神がいるせいでこうなったんだった。畜生。

「シユータロー、今日暇だろ？ 放課後付き合いたまえ」

六時間目終了のチャイムも鳴らないうちからワイシャツの襟首をひつ捕まえてこんなことを言うのは、クラスに一人しかいないや、クラスどころか学校中でも一人だけだ。全国でも片手の指で足りると思いたい。

振り返つても共犯にされるだけなので、あえて無視。後ろの席だからというよしみでお話してやるのは休み時間だけだ。

「シユータロー、聞こえているのだろう？ やばいのだよ。近日中にどうにかしなければならん問題があるのだ」

大仰な物言いに惑わされてはいけない。無視。

「シユータロー、先週の木曜にコンビニでこっそり買つていたあの本、なんと言つたかな？ たしか『ガチベッピン』とか」

「何だー天王寺、水臭いぞ！ 用があるならあるとそういうてくれれば！」

なぜ知つている、完璧な隠密行動だつたはずだ。何のためにチャリで片道一時間もの道のりを走破したと思っている。

「だから用があると言つてはいる。そんなやましい本なら買わなければよいものを」

言いながら、天王寺美緒は自慢の胸を両腕で挟み込むようにして、机の上で悩ましげなポーズを取つてはいる。どうしてブラウスの襟がこいつだけターランチェックで、スカートにスリットが入つていて安全ピンで留められているのか。すべては天王寺美緒だからだ。こんな改造制服、ほかの人間なら絶対に許されない。いや、こいつとて許されているわけではないはずなのに、何故か生活指導につかま

つているのを見たことがない。

本については、買わずに済むものではないから。呑、買わねばならぬ本だからこそだ。と思いながら、おぐびにも出でやすに冷静に対処する。必要なのは冷静さだ。

「で、何のようだよ」

「青春、したくはないかね？」

「何言つてんだ、いきなり？ そりや、したいかしたくないかって言われると」

ちらりと、俺の視線が無意識にそちらを向いてしまう。

一つ前二つ左の席。ショートカットにセルフレームの眼鏡がトレーデマークの、クラス委員。真剣に授業を聞く横顔は、こちらに気づく様子など微塵もない。

「君は想像以上に素直だね」

「うつせえな。そもそも何だよ、その「青春する」って。そんな動詞ねえよ」

ねえが、心惹かれるかと言われると……じゃない！ 何をばかなことを。

ほんのわずかでも美緒の言葉に耳を貸してしまった自分が、猛烈に恨めしい。そこまで自分が思い詰めていたのだとすると、末期症状だ。何の末期かは知らないが。

「青春、してみないかね？」

「意味わかんねー」

どうやら俺の後ろの席は、日本語の通じない異次元に通じているらしい。何だよ、いきなり声かけて「青春」って。宗教かつての。「とろけるほどに甘くつて、ちょっとぴりほり苦い」。プリンのような青春だよ

「青春だよ」

「とろけるほどに……ほろ苦い……」

そんな青春が俺にも訪れる。そつ黙つて、いくつと一回では飲み干しきれない生睡が湧きまくる。興味はないわけじゃないけど。「こやいやいや、ないないない。ましてや美緒の誘いで」

「今日の放課後、科学部の部室に来たまえ。そこで話す」

人の話は最後まで聞けよ。そういえばこいつ科学部だつたか。あまりに傍若無人に好き放題するものだから、先輩部員がもてあましているのをこの一学期前半だけでも何度となく見たのを思い出す。可愛そうに、晴れて新入部員（しかも女子）が入つたと思つたら歩く爆弾だもんな。同情を禁じえないが助け舟は決して出さない。二次被害をこうむるのは目に見えている。

「なんか嫌な予感しかしながら」

「ノープロブレムだ。私が君に迷惑をかけたことがかつてあつたかね？」

「この一ヶ月弱の思い出アルバムはそれ一色だ」

授業中に話しかけてはへんてこな会話に巻き込み、休み時間によくわからん独自理論を語られ、何だかわからん活動を手伝わされたこともあつた。迷惑百分だ。

「というわけだ」

「どーいうわけだよ！」

「ん、うん！」

ひときわ大きな咳払いが会話を断ち切る。六時間目の地理担当、海老沢が気の毒な生き物を見る目でこちらを睨み付けていた。

「あんな、そういうのは普通チャイムが鳴つてから」

別名ヘビ沢。絡みつくようなねちっこい説教が得意技といつ、敵にも味方にもしたくない男だ。だから三十五歳独身なのだと語りつと説教が倍になるという噂は本当だろうか。

と、そこにタイミングを計つたようにスピーカーがノイズをこぼし、本日の授業終了のチャイムを盛大に吐き出す。このチャイムが一番心地よく聞こえるのは俺だけじゃないはずだが、今日だけはわけが違う。

「すまん、俺には一秒たりとも無駄にできる時間はない。話なら後

「ああ！ シュータロー、ビニール！」「いや、話はまだ

日」

ヘビ沢の粘着質な声と、美緒のあまり焦りを感じない声が背中を引っ張るが、そんなもの振り切るようにダッシュする。帰宅準備は六時間目が始まった時には完了していた。

「悪いな天王寺、俺は今日も帰つて店の手伝いさせられるんだ。サボつたら殺される」

母親の営む小さな喫茶店を手伝う。響きだけは穏やかで良好な親子関係を想像させるが、その実そうではない。主人と奴隸の契約をそう呼ぶ人間がいれば話は別だが。

「驚きだよ」

背後からの声に「何が?」と半笑いで聞き返したところで、手首に激痛が走つた。

そして、

「私から逃げられると本氣で思つてゐるが、だよ」
天地がひっくり返つた。床がとんでもない速度で頭上を通過し、蛍光灯がつま先を掠めるように高速で流れる。脳みそが偏つて、血液が体の末端に音を立てて集まつた。

そして次の瞬間には、スリッパの底が廊下を捉えて元いた位置に立つてゐるが、三半規管はすっかりバカになつてゐる。まっすぐ歩けずによれよれと壁側に曲がつてゆく。

手首だけが、しつかりと美緒にホールドされたまま。

うかつだつた。完璧な脱出計画だつたというのに、美緒の身体能力を計算に入れ忘れていた。人間離れした体力と、常識と理性の欠落した知力、これを兼ね備えた危険人物。それが天王寺美緒だ。普通に走つて敵うはずがない。

「失敗だ。殺される」

「どの道逃げ切つていれば私が呪い殺していたよ
こいつの場合は本当にやりそだから笑えない」

「さあ、遠慮はいらない。我が城にご招待だよ、期待のホープ君」
するすると引き摺られる姿に視線が大集合だが、そのどれもが哀れみと好奇心を絹い交ぜにして、好奇心だけ特盛にしたような目で

俺を見てやがる。そりゃ そうだろう、美緒の奇人変人っぷりを知らない人間は、この満貫寺高校はあるか、一色市を隈なく探しもないはずだ。いたらもぐりかスパイだ。

「いや、スパイなら真っ先に知ってるか

「何を言つてるんだい？　さあ、ここが今日からの君と私の愛の巣だ」

「おい、お前の辞書に愛なんて言葉あんのか？」

あつたとしたら間違いなく誤植だ、とはあえて言わなかつたが、美緒は満面の笑みで自慢のブロンドをばさりと揺らす。もちろん純粋な日本人である美緒のそれは染めているものだが、艶やかさは地毛だといわれても信じられるレベルだ。ストレスがない人間というのは、髪まで健康だとはなんとも皮肉だ。禿でお悩みの全国のお父さんに謝れ、といいたくなる。

「きちんと存在しているよ、失敬な。愛ほど有効な駆け引きの材料はないよ」

予想通り『愛』の文字が欠落した辞書を持っているようで、安心した。

「で、この……何だこの部屋！　カオスみたいになつてるぞ。これ、本当に科学準備室か？　かき混ぜたら日本列島ができるぞ、これ」「君はしょーもないところで博学だな。まあ、だから面白いんだが」到着した科学部部室は、日中は科学準備室として使われているはずの部屋だったのだが、どう見てもその機能は失われているとしか思えない。少なくとも、科学準備室に曼荼羅や謎の巻物や何やら怪しげな像があつてはいけないと思つ。

「帰る」

直感でいろいろと感じ取つた上で、見なかつたことに対するのが最も懸命だと即決する。今帰つたところですでに母親の愛のお仕置き（人間サンドバックの刑）は決定しているのだが、これはさらにやばいにおいがする。何というか、神ならぬ人の身で踏み込んでいけない領域というやつだ。

はつきり言うと、俺の健全で安全な高校生活を著しく害する何かだ。まあ、最初からそんなもんはないけどな。喫茶店で奴隸のように働く人生なんだ。

「何を言つ

どうやら手遅れだつたらしい。

両肩に万力のような締め付けを感じたが、体は全力で逃走を推奨する。心はすでに逃げ出していて、この場所にはない。

「ようこそ、科学部へ。部活に青春してみようじゃないか、シュー タローー」

目の前に一枚の紙を取り出されたので、うかつにもその内容を読み取つてしまい、がっくりと全身から力が抜けた。部活で青春なんて意外と普通だとかそういうことではない。そんな程度で脱力するような鍛えられ方はしていない。悲しいかな。

その紙は公式な書類で、タイトルは『入部届』といつた。記入日は本日、記入者は俺。ご丁寧に押印まで押してあるが、アレは間違いない本物だ。見なくてもそう思えるのは、紙を持っていたのが天王寺美緒だからだ。

「というわけだ。ようこそ、科学部へ」

偽造の匂いがふんふんする入部届けに判子を押した顧問には、末代まで子孫が禿げる呪いをかけることを決意した。今の顧問は禿げているので、効果はなさそうだが。

「何で俺が入部すんだよ？ ってか、急ぎの問題があるとか何とか言つてなかつたか？」

「ああ、そんなことも言つていたな」

ぶつ飛ばすぞ、と思いながら眉間に皺を寄せて目を閉じる。ゆつくり深呼吸をして、冷静になれと心の中で三回呴えてから口を開く。そうしないと罵詈雑言しか出てこない。

「そのために呼ばれたのに、なんで入部なんだよ？」

「突然一年生が退部届けを出してしまってね。部員不足で科学部がなくなりかけているのだよ。緊急事態だ」

「そりゃ」

朗報だ。このままなくなってしまえば先ほどの失態も帳消しになるどころか俺の高校生活は安泰だ。できれば俺はこの『緊急事態』とやらをバックアップしたくなる。

「ん？ 今何か、『朗報だ。このままなくなってしまえば先ほどの失態も帳消しになるどころか俺の高校生活は安泰だ。できれば俺はこの『緊急事態』とやらをバックアップしたくなる』みたいな顔をしなかつたか？」

「わあい、ここまで心が読まれると自分がサトーラレになつた気分だぜ」

田の前にいる悪魔が、人の心を読む妖怪『サトリ』であるぐらいうら、俺が妖怪『サトーラレ』であることを認めるほりが百倍世界のためだ。

「何を言つてゐるのかわからないが、あと一人必要なのだよ。部を存続させるには最低三人の部員が必要になる」

「で、俺が入部させられたつてわけか。迷惑な話だが良かつたな、俺みたいな鴨がいて。これで廃部を免れたじやないか。クソ、これじや俺は青春ボツシユートじゃねえか」

まあでも、これで不足分を補つたといつことだし、幽霊部員でもかまわないというのなら名前を貸して恩を売つておくのも悪くない。『何を言つてゐるんだシユータロー？ だから緊急事態だといつてゐるだろ？』

「わかつてゐよ。だから名前ぐらい貸してやるつて言つてんだる。つてか、もう入部したことになつてんだし、かんけいな」

「だから言つてるだろ？ あと一人必要なのだと」

脳みそが軋む音を初めて聞いた。

確かに頭がいいほうではないが、それなりに十六年生きてきた自信はある。なのに、田の前の展開が全くわからない。田隠しで歩く迷路のようだ。

「ん？ だつて、一年がやめたんだろ？」

「そうだよ」

「で、部員が足りなくて廃部の危機なんだろ？ 少なくとも、三人必要で」

「そう言つたつもりだが？」

「で、俺が入つただろ？」

「だから言つたじやないか、あと一人、と」

空恐ろしい想像が頭の中を駆け巡り、それを否定するための要素を必死になつて書き集めてみるがどうにもうまくいかない。妙に鼓動が早くなつているのと、足元がおぼつかないのとでふわふわと浮いていいるようだ。

「さあ、一緒に新入部員を確保する方法を考えようじやないか、我が科学部、いや」

あえてそこで一拍おいた美緒は、にやりとほくそ笑んだ。吊り上げられた唇と、細められた切れ長な目が妙に妖艶で、科学者というよりは魔女といった風体だ。部屋の力オスつプリと呑わせて雰囲気は完璧だ。何も知らない思春期男子なら、その美貌と驚くべきプロポーションに、一秒で恋に落ちるだろう。

「超科学部に」

そして、瞬き一回の間にその恋は冷めるだろう。

「つまり、科学部でめえ一人になつたつてことじやねえか！」

「超科学部だ」

「どつちでもいいわ！ んなことより、それだつたら先にもう一人探ってきて、それから俺を誘えよな。そしたら名前ぐらいは貸してやつたぞ」

「何を言つてるんだ？ 君はもつ科学部、おつと、超科学部員なんだ。ともに人類の最先端である科学を超越し、魔術の域にまで高めるために人生をささげるのだよ」

信じられないが、これを言つている美緒の顔は百パーセントの本気だ。どこか途中に笑いどころが挟まつているのだろうと愛想笑いを作りかけたが、思いのほか厳しい視線で心を貫かれた。

本気だからこそそのやばさに、今更ながら一度でも首を縦に振つたことを激しく後悔する。もし人生で一度だけタイムマシンが使えるなら、あの瞬間に戻つて、ハリウッドアクションばりに窓を突き破つて逃げ出すようにアドバイスをすること請け合いだ。

「それに、部員確保は多少なりとも手伝えるとしても、本格的な部活となると難しいぞ」

全力で後悔してしほんだ気持ちの向こうで、冷静に事態を考える自分がそう言つた。

「と、言つと？」

「俺んちが喫茶店やつてんのは前に言つたと思つけど、放課後はそつちの手伝いしなきやだから、本格的な部活となるとちよつと時間が

が」

「この時ばかりは、帰宅と同時に始まる奴隸のような労働タイムがありがたかった。これを口実に、超科学部なるよくわからん活動に巻き込まれずに済む、という寸法だ。

「さうか。では、君の母親に許可を取らねばならないということだね」

「そういつこつた」

まあ、百歩譲つて部への所属を許しても、あの女がみすみす奴隸を手放すはずがない。というわけで、この駆け引きはおれの勝ちだ。悪いな、天王寺。

「すまんな、俺も部活動そのものはやぶさかでは」

ポケットから出てきた一枚目の紙切れは書類でも何でもなく、ただのA4コピー用紙だったが、破壊力は先ほどの比ではない。そこにはまだ一言、こう書かれていた。

『やつていい』

「あんのばばあ！」

筆跡はまぎれもなく、毎日店のお品書きで見る字だ。紙の右下には、大好きなうさぎの絵が本人の鬼具合とは不釣り合いな、凄まじいかわいらしさで描かれている。ちなみに、『やつていい』の上に

失敗したのを「こまかす」ように塗りつぶしている個所があるが、「殺」と書きかけて誤魔化した跡が透けて見えている。

「そんなもん、しかし俺にだつて部活選ぶ権利が」

『くちごたえすんな』

一枚目の紙を突き付け、勝ち誇ったように天王寺が口元と胸もとを釣り上げる。第二ボタンのあいだブラウスから飛び出す、グラン・ドキヤニオンの様な谷間に目を奪われる。

「というわけだ。ともに頑張ろうではないか、シユータローー」

差し出した手が、しばらくは握手を求めているものだと気付けて呆けていたが、心の整理がついたところでようやくその手を握り返すことができた。

簡単な話だ。新しい奴隸契約で、主人が変わっただけだ。
鬼から、魔女に。

こうやって、甘つたるいほどに甘くちょっとびる苦い、その上ちょっと黄ばんだ大事件の幕が上がったわけだ。上げるんじゃなかつた、とタイムマシンがあればそんな感想も伝えに行けるけど、ないのでどうしようもない

こうして俺は、青春から最もかけ離れた場所に引きずり込まれたわけだ。ちくしょつ。

「というわけでだ」

「お前の「というわけ」は前後の文章が全くつながらん」

青春没収残酷ショーの翌日。俺はまた脱出しに失敗して何らかの攻撃を食らって意識を失い、気がつけば教室の床の上に転がされていた。記憶に連續性がないことがこんなに恐ろしいとは思わなかつた。純粹に、生きていることに感動したのは貴重な経験だ。

「俺に何をした？ どんな攻撃を食らつた？ 記憶では下駄箱にいたはずだぞ」

思いついたのは、時間が何度もループする世界でどうやっても教室に引き戻されるというシユールな設定。決して学校から脱出できない主人公。イヤすぎる。

「さておき、新入部員確保作戦を考えなければならない。何かいい案はないかね？」

大仰なもの言いだが、演技っぽさがないのがすごい。外見はもつと高飛車というか高慢ちきといつか、そんな喋り方をしそうなのに、口を開けばどこかの研究者が博士の様な口調。しかも、それで違和感がないのだから変な奴だ

「いい案もへつたれも、そもそも俺は部に入るなんて一言も」

『くち』たえすんな

「くつ」

田の前に突き出されたコピー用紙の破壊力に本能が屈する。

「つても、マジでなんも思いつかんぞ。そもそも俺、この部が何やつてるかもわからんのに、こんな五月も終わろうつかつて時期に新入部員確保なんて、難易度高すぎだ」

実際問題、この部が何をやつていても、ほとんどの一年生が部活をするのか帰宅部として日陰に生きるのかの選択を終えてい

るはずだ。となれば、今更帰宅部の覚悟を決めたものを部活に誘う難易度はかなりのものだし、ほかの部からのヘッドハンティングなどもってのほかだ。好んで天王寺に関わろうなんていう奇特な奴は、この満貫寺にはいない。これは自信を持つて言える。

「あの」

「言つたではないか、科学の域を超えて、魔術にまで至ることが目標……と、誰だね？」

床に芋虫のように転がる俺と、机に腰掛けて女王様のように足を組む美緒が、同時に声のした方を振り向く。と言つても、俺の場合はほぼ体の自由がないので、からうじて視界の隅にスカートが見えた程度だけ。美緒とは対照的な、無改造な膝下のスカート。

「鍵、閉めたいから、そろそろいい、かな？」

うつかりすると外の喧騒にも負けてしまいそうなささやかな声。

「何だ、委員長君じゃないか」

クラス委員の吹水杏子。眼鏡をかけたおとなしそうな外見に、ついたあだ名が委員長。ベタな命名だが、似合つているとも思つ。

「話してるとこ、」めん。鍵、閉めたいから

教室の施錠のためにわざわざ待つていてくれたのだろうか。だとしたら、たとえ主犯は美緒だとしても悪いことをした。

（この時間にここにいるつて、部活とかしてないのか？）

「ああ、すまないことをしたね。では行こうか、シユータロー。続
きは部室でだ」

「おい、痛い痛い！ 紐付けて引っ張んな。行く、行くからほどけ
歩かせろー！」

「ごめんね、大事な、話なのに。部活？」

「かまわないよ。どのみち部室には行くつもりだったからね。それより君は部活動に興味はないかね？ たとえば魔法とか。何なら魔王でも魔人でも呪術でも」

「え？」

この魔女は、目につくものすべてを巻き込んで災厄を振りまくつ

もりか。さすがにそれは防がなければならない。ましてや相手は、あの気の弱い吹水だ。

「おい美緒！ 委員長巻き込むなよ。気にすんな、この部は早々に廃部になつた方が人類のためだつたたた、痛い！」

縄の締め付けが引つ張るほどに強くなり、問答無用で食い込む。むちやくちや痛い。

「部員、募集してるの？」

「ああ。よんじこらない事情により人材不足でね。廃部回避のために東奔西走中だよ。あと一人、有用な人材がいれば紹介してくれないかい？」

「何がよんじこらない、だ。ほとんど自爆みたいなもんがあいだだだだつだ」

くそう、絶妙な力で食い込む縄が、的確に痛覚を刺激しやがる。「委員長も、今の話なんて真に受けなくていいからな。世迷言だよ、世迷言。春だから」

「言つてくれるね、シユータロー。ならば君の委員長君を見つめるその瞳も年中春真つ盛りといつことで」

「やあつかましい！ ほら、部室行くんだろ部室！」

「このボケ、どこでそんな下らん情報を。そりや、かわいいと思つし、何つうか、おとなしそうな感じとかもなんかほつとけないつていうか。でも、それだけだ、断じてそれだけだ。それだけなんだよ！」

「美緒、すごいね。いつも、たのしそうで……いいな」

「どこをどう見てるんだ？ こいつはこいつで独特的の感性してるのかもしれないな。

にしても、美緒のモデルばりの笑顔つてのもすごいと思うが、吹水のは何とも柔らかいといふか、見ていてこちらも自然と笑顔になるような、

「それは君の主觀が多分に含まれているよ、シユータロー」

「何故心が読める。読むな」

これが、あながち冗談として笑つて切り捨てられないのが、こい

つの恐いところだ。

「では、我々はこれにて失礼するよ。もしも部活動に興味がわいたなら、いつでも来てくれたまえ。科学準備室はいつでも有力な人材ならウエルカムだ」

まあ、来るんなら、ウエルカムだけどな。嬉しくないこともない。「素直ではないことはなはだしいね、君も」

「声に出していいことに返事をするなつってんだろ、だから」なんとも奇妙な表情で見送られながら、俺たちは教室を後にした。できればこのまま学校もあとにしたかつたが、どうせそれは叶わないんだろうな。縛られて両腕の自由を奪われたまま歩くさまた、囚人か犯罪者逮捕の瞬間かという感じだ。市中引廻しですら馬に乗せてもらえるというのに。

なんてわが身の不遇を呪つていると、これまたデジヤヴのよう俺の前に現れた科学準備室。残念ながら到着してしまったようだ。扉の上につけられた札は、既に『超科学部』だ。にしても、きつたねえ字だな。

「君の趣味がああいつタイプの、おとなしい女性だとはね」「意外だつたかよ。いいだろ、俺がどんな青春を所望しようが」天王寺美緒に関わる限り、いくら望んでも手に入らないけどな。「意外ではないが、君が女性をリードするタイプには見えなかつたのでね。くつついた時にどうなるのか、興味は尽きない。それに言つたはずだが、君の青春はここにある」

あるわけねえ。

それと、さらっとドキドキするようなことを言つた。話題転換話題転換、と。

「んで、具体性ゼロでわからんのだが、なんだよその『魔術に至る』つて。科学部のくせに魔法使いにでもなる気かよ？」

ようやくロープから解放された俺は、手首についた縄の跡をさりながら美緒に問いかける。縄の跡つて、こんなもん人に見られたら変態認定されかねない。それだけは絶対に避けるべきだ。

「君はなかなか物事の本質をつかむのが得意とみた。期待していた以上の逸材かもな」

どんな期待をされていたのかなんて聞きたくもないが、ポイントを上げずに、役立たずの烙印とともに放流される日を夢見る俺としては大失態だ。株が上がつてしまつた。

「わけわからんわ。それ、科学じやねえだろ」

「かのシェークスピアは言つた、よく発達した科学は魔法と変わらない、とね。つまり科学は魔法への入り口足りつるというわけだ。科学部が魔法を目指すのはものの道理ということだよ」

驚きだ。しかももう一度言つが、美緒はあくまでも真面目なのだから始末に負えない。

謎の攻撃と繩によるダメージのせいでもまだふらふらする頭を抱えて起き上がり、俺はできるだけ情けない顔を作つて口を開いた。

「あんな、魔法なんぞこの世にあるわきやねえだろ。あるんだつたら、それこそこの世の科学者全員、明日から篠持つて黒猫抱えて月に向かつて吠え始めるわ」

さらに言つ。

「つてかよ、魔法があるんだつたらその魔法で新入部員を創り出すなり呼び出すなりすりやいいだろ。RPGの召喚魔法みたいに、『い』でよ新入部いーん』つてよ

言いつつ、ドヤ顔で美緒を見て、はつとなる。

先ほどまで意気揚々と超科学部について語つていた美緒の肩がフルフルと震え、俯いて唇を噛みしめている。前髪のせいで目元はわからぬ。

言いつつ。

先ほどの表情や何かで美緒が真剣なのはわかつていたはずなのに、さすがにこれはまずかつたようだ。まじめに努力する奴に向かつて言つ言葉じゃない。

「あ、あの、悪い。言つすぎたつていうかあわあ！」

「君は天才だな！」

いきなり弾けるように顔を上げると、華が咲いたような満面の笑みでがくがくと肩を揺さぶってくる。どうということだ？ 意味がわからんぞ？

「さすがはシユータローだ。いや、さすがの私もそのことには気がつかなかつたよ。はは、素晴らしい、これでわが超科学部の基盤は盤石だ！」

手近にあつた謎の像（どう見ても呪いの像とか邪神像といった感じだ）を振り回して、カオスの様な有様の部室を駆け回っているんだから、よっぽど嬉しいんだろうが、はつきり言つてマジでわからぬ。

「シユータロー！」

「お、おう！」

邪神像を放り投げた勢いで跳躍した美緒が、両手を広げて抱きついてくる。

同じぐらいの身長の美緒に抱きつかると、ちよつと肩口に当たる柔らかいくせに張りのある幸せな一つの物体に、意識の九割が持つていかかる。このまま死ぬのも男子の本懐かと本気で考えてしまつた。

「やはり私の目に狂いはなかつたよ。まあ、忙しくなるぞ…」

そう言つと、子供のようにとび跳ねながら部室の中を駆け回つては、何やら様々な書籍をかき集め、いくつかの汚い巻物やら落書きのよつた紙切れを一か所にまとめた。おかげで、その他諸々のカオスを構成していた物体は準備室を追い出されて、科学実験室に飛び出して行つてしまつたのだが、駄目だろとは言えない。そのぐらい嬉しそうだ。

かくして始まつた天王寺の謎の行動はその後一時間以上ノンストップで続き、下校を促す校内放送が流れるこには、科学準備室に書籍の皆の様なものが出来上がつた。

時計を見ると既に六時を回つており、いつの間にかグラウンドから喧騒もふつつりと途絶えていた。窓からこぼれるオレンジ色の

夕田に、夏がそう遠くないことを感じる。

「君は意外とロマンチストなんだな」

「何だよいきなり」

本の壁の向こうから聞こえる声は少々くぐもっているが、決して勢いを損なってはいない。むしろ今日一番のはつらつとした聲音に、驚きを通り越して感心してしまつ。

「夕焼けを見て季節を感じる、これをロマンチストと言わざしてどうするね？」

「じゃあ、本氣で魔法なんかを追っかけてるお前のほうがはるかにロマンチストだろ。つつか今何してんだよ？ 僕、帰つてもいいか？」

さすがにこんなところで一時間近くもボケつと座つていると退屈極まりない。だから、窓の外の景色なんかに見とれるような心の余裕ができたと言えなくもないが。

「そのあたりの本でも読んでいてくれたまえ。もう少し？」

「残念ながら何が書いてあるのかさっぱりだ」

手近な本を手に取つて開いてみたのだが、専門用語の様な言葉や見たこともない記号の様な文字が羅列してある書籍は、僕にとっては絵を見ているのと同じだ。

「そうか。しかし、もう少しなので待つていてくれないか？ できれば今日中にこの実験は終わらせてしまいたいのだよ。明日が部員募集の締め切りだからな」

「なんでそんなギリギリで行動してんだよ」

「お願いだ」

「わーったよ。つか、お願いすんならその紙出すな」

『くちごたえするな』が終始俺の目の前をちらちらと横移動している。どうにも、あの母親に刷り込まれた本能的な恐怖にあらがうことはできない。鉄は熱いうちに打てというが、まさにこのことだ。幼少期に刻まれた恐怖は今でもしつかり俺を縛つている。

「ありがたい。持つべきものは部員だな」

「部員じゃねえって、だから」

「と、くつちやべつてる間に完成だ。つむ、我ながらなかなかの出来だな」

本の要塞の向こうに立ちあがつた美緒は、何やら一枚の紙切れを取り出す。思わず母親の書いた一枚のうがひぢらかではないかと警戒して、体がこわばつてしまつ。

しかし、どうやらそではなかつたらしく、天王寺が差し出してきたのはアレよりも規格の大きいA2サイズの「コピー用紙で、びつしりと文字や数字が書き込まれていた。

「部室の前の札もそうだけよ、字いへつたくそだな」

「それだけは言わないでくれたまえ。唯一の欠点なのだよ」

唯一であるはずがないが、無駄な議論ほど無駄なものはないと熟知している俺は、美緒の差し出した謎の「コピー用紙を一通り矯めつ眇めつしてから一言、いつ言った。

「何これ？」

ひねりのない一言だが仕方がない。どれだけ見ても、何なのか全くわからなかつた。

ある場所には化学式のようなものが書かれているかと思えば、その隣にはどこの国のものかすらわからない文字が書かれ、その頭の上ではとんでもなく長い数式が円を描いている。さらに反対側を見てみるとヒエログリフとナスカの地上絵を足して一で割つたような図柄が記されていて、一見すると抽象画か何かの様だ。

「魔法陣だよ。これはその計算式といつが、設計図だ」

これが？と思わず首をかしげて見るが、横にしても抽象画は抽象画のままだつた。むしろ、横にしたせいで謎の度合いを深め、この角度からではこれを描いた画家は発狂していたのではないかとう推測まで出来てしまうほどだ。

「魔法というのはファンタジックで直観的なものに思われがちだが、その実、緻密な計算と纖細な力の制御を必要とする、一種のアートの様なものなのだよ」

「一種のアートの様なもの」の部分にだけ同意したのだが、美緒はそれを理解と受け取つたらしく、説明を続けられた。

「その計算に時間がかかつたが、もう大丈夫だ。この魔法陣があれば」

ぐるりと紙裏返すと、なるほど納得だ。そこには「魔法陣」の言葉にふさわしい図柄が記されていた。

A2用紙を最大限に使つた真円を最外郭として、その内側にはいくつかの幾何学模様が一定の秩序をもつて並べられ、その周囲を謎の文字らしき記号らしきものがぐるりと取り囲んでいる。アニメなんかで見る、魔法が使われるときに空中に描かれる光の文様に近いものだ。これなら魔法陣と認定してやってもいい。

「新入部員は確保したも同然だ。名付けて、『新入部員力モン魔法』だ」

「うわ、ネーミングセンスが神懸かってんな」

もちろん皮肉意外の何でもない発言だつたのに、美緒は得意そうに目を細め、唇の端を片方だけ釣り上げる。そして一言、「だろう?」

とだけ言つて、両腕で胸の谷間を強調する。やつぱりこの女はわからん。

魔法？ 実験

微調整を加えることさらに数時間。美緒の言ひ「魔法陣」とやらが完成したのはよかつたのだが、問題はそれをどうやって発動させるか、にあるらしい。

もちろん俺はそんなもの真に受けではない。じゃあななぜこんな実験に付き合うのかといふと決まっている。魔法とやらが発動しないことを見届けるためだ。

「うーん、部員一人を召喚するとなるとそれなりの広さが必要だから、科学実験室では無理だ。机が動かせない。となると」

既に日も落ちた廊下は、怪談やら七不思議やらを信じていない俺でも不気味だというのに、美緒は何の気後れもない足取りでずんずん進んでいく。消火栓の赤と非常口の緑ぐらいしか明かりのない校舎を傲然と歩くマッドサイエンティスト。そんな光景は、B級ホラー映画のように見えなくもない。あ、サイエンティストじゃなくて魔女か。

『マッド・ウイッチ』なんて言葉あるのか？

「いま私の悪口を言わなかつたかい？」

「言つてねえよ。それよかどすんだよ。もつ八時前だし、先生とかに見つかると厄介だろ。とくにお前の場合」

別に俺は大丈夫というわけではないが、こいついう場合は有名人であればある程旗色が悪くなるのが定番だ。そういう意味で、美緒はこの学校で最も有名といえる。悪名だが。

「うーん、条件を満たす場所が限られるだけに惜しい。できれば魔法行使の際に魔力の補助となる力、たとえば電力や気の力が確保できるに越したことはないのだが、それを考えるとかなり限られてしまってね。設備も超科学部のものだけでは心もとない。全く、科学部だというのに以前の部員は一体何をしていたというのだ」

むしろちゃんと科学部してたからこそ、お前が困るんだろ？

「じゃあ、技術室なんかどうだよ？ あそこならなんなりと機材あるだろ」「し、確か教室の後ろにスペースあつただろ」

助け船を出してみる。どうせ途中で抜けて帰れないのなら、さつさと終わらせてとつとと帰るほうがましといつものだ。

「名案だな。うん、あそこなら大丈夫だわ。さすがはショータローダ」

人差し指をぴんと立て、窓から差し込む月明かりに頬を照らされた美緒の姿を、迂闊にもきれいだと思つてしまつたが、そんな思いも長続きはない。

相変わらず暗い廊下をしばらく歩くと、廊下の突き当たりに目的の技術室が現れる。

木工や機械工作を目的としている特殊教室で、その性質から防音や遮光性にも優れているうえに工作機械には事欠かない。悪ガキじやなくとも子供心をくすぐられる場所だ。

その扉を前に、俺と美緒は立ち尽くす。

「ま、普通はそうだよな」

扉に手をかけて引つ張ると、がこんっ、という重い音がしてそれつきり扉は動かなくなる。当然だが、鍵がかかっているのだ。

「ちゅうこつて、本日の部活はここまで。惜しかったな、せっかくここまで来たのに」

まあ、魔法陣の実験というのにも興味がなかつたと言えばうそになる。魔法なんものが実在すると考へるほど夢見がちではないにせよ、あの美緒ならもしかしたら、なんていう妄想に近い期待も全くなかつたわけでは

ぱきんっ

踵を返して帰りかけた俺の耳に飛び込んできたのは、鈍い金属音。まあ、この時点で何パターーン化の想像はついていたのだが、その中に一つもハッピーハンドにつながるものはなかつた、とだけ言つておこう。というか、すべてバッドエンドルートだ。

そしてもちろん、俺の隣にいる最狂にして最凶にして最強最悪の

魔女は、何の躊躇もなくその中で最悪のチョイスをしてくれた。

「さ、中に入ろうか」

「まで！ お前、何持つてんだよ。ってか、何した？」

何した、って聞くのもおかしいが、それでも聞いてしまうのが人のサガ、情つてもんだろう。いくら目の前で扉のノブが無残にもぶつ壊され、いくら魔女の手にバールが握っていても、聞くのが人の道だと信じたい。

「扉を開けただけだが、何をそんなに」

「驚くわ！ ってか、何やつてんだ、これじゃ俺たち完璧に犯罪者だぞ。なんでバールなんか持つてんだ！」

「ちがうよ、バールノヨウナモノだ。そう報道しないと、バール業界からマスコミに対するクレームが」

「そんな業界はいい！ バールでもようなものでもどっちでもいいわ！ とにかく」

「大きな声を出すと、警備員が来る」

あわてて口をふさいで背後を振り返る。幸い誰かが来ている気配もなかつたが、あらためて自分のコソ泥行為が後ろめたい。

「じゃなくて、んあ～畜生。俺は無関係だからな」

「あはは、君はジョークのセンスもあるのだな」

バールを肩にかけ、悠々と技術室に踏み込んだ美緒の背中はなぜか誇らしげで、こちらが間違っているのではないかという錯覚を引き起こされそうになる。

そこからの三十分は、とにかく速かった。

いつ見回りの教師（そんなものがこの学校にいるのかどうかは知らないが）が来るかもしれないという思いと、さつさと終わらせないと次はどんな事件に巻き込まれるかも知れんという焦りが、俺の身体能力を何割増しにもしたのだろう。

気づけば、床には美緒が設計した通りの魔法陣が直径三メートルほどのサイズで描かれ、電源につながれたバッテリーとそこにつながる一対の電極が用意されていた。

時計を見ると午後八時を少し回ったところ。三十分ちょっとでこれまでの作業を終わらせたのには、さすがに驚いた。

「うん、上出来だ。これなら絶対に成功する」

「成功したらどうなるのかはあんまり想像したくないが、まあちやつちやとやつてくれ」

実際に軽くそう言ったのは魔法なんてこれっぽっちも信じていなかつたからなのだ。当然、結果なんて見なくとも分かっているつもりだった。

「そうだな、もたもたしていて邪魔が入るなどもってのほかだ。始める」としようか」

言いながら、美緒は電極の片方を俺に押し付け、自分はもう片方を手に魔法陣を挟んでちょうど反対側に移動する。

「私の合図とともに電極を指定した場所に押し当ててくれたまえ。成功すれば陣に通電し、その電力を触媒として魔法が発動、新入部員が召喚されるというわけだ」

「わかったから、合図しろよ」

見回りの目を警戒して蛍光灯も付けられていない室内には、窓から差し込む月明かりと、電極につながるコンデンサの動作を知らせるLEDランプのわずかな明かりだけ。あとは夜を切り取つてきてそのまま詰め込んだような闇が、静かに沈殿している。

そのせいで、対面にいる美緒の表情はわからない。うつすら輪郭がわかる程度だ。

ある種の静謐さを感じさせる空氣に、まさかとは思いながら息をのみ、はつとなる。

何か期待してたつていうのか、俺。あほらしい。こんな実験ごっこはとつと終わらせて家に帰る、それだけだ。魔法も発動しなければ新入部員も来ない。俺も晴れて自由の身、万事解決だ。それが俺の予想であり、望みだ。

「では、召・喚!」

「へいへい」

勢いよく宣言した美緒に対して、俺は投げやり気味に電極の先つ
ちょを、床に描かれた魔法陣に接触させる。本来は対極の端子を接
触させて放電、通電する持ち運び用のコンデンサなのだが、それは
もちろん間に電気を通す物体ないし電力を消費する抵抗あつてのこ
とだ。電気を通さないものにくつづけても何も起るはずが、
パシッ！

端子の先に、火花が上がる。

弾けるような音とともに、端子の先端が光に包まれたかと思うと、
その光はあつという間に床一面に広がつて教室全体を光で包みこむ。

「違う、光つてるのは、魔法陣？」

「おお！ 成功だよシユータロー。はは、超科学の、魔法の夜明け
だよ」

美緒の声も耳に届かない俺は、茫然と目の前の事態を眺めるだけ
だ。

もう電極を触れさせていないのに光を放つ描線は、魔法陣そのも
のを宙に浮かびあがらせているように見えた。それだけではなく、
魔法陣の裏側からも光が放たれていよう、その光が雲間に差し
た陽光のようにこちら側を照らしている。

光の帯が、教室に滞留した闇を切り取つてゆく。

その様はまるで、この魔法陣を境にして別のどこかにつながつて
いるようで、

「マジで、召喚、するのか」

その声が聞こえたのか否かは定かではないが、美緒が高々とバー
ルを掲げて宣言した。

「いですよ、新入ぶいん！」

「いですよ」の部分が子供向け魔法少女の様で縁起つぽいアクセントなのに、抑揚がいつもの美緒なのは違和感を禁じえない。が、そんなものは一瞬で吹き飛んだ。

田の前の魔法陣がひときわまばゆく光を放ち、一本一本の線を識別できないほどの光の塊になつたところで、一気に教室中にはじけ飛んだ。

「うわっ、まつぶっしー！」

とつさに田を覆つたがタツチの差で間に合はず、田を閉じた瞼の裏には、フラッシュの焼き付けのような赤い染みがじわじわと動き回つている。

「やつた、成功だよ。見たまえシュー タロー、新入部員だ！」

喜んでいるのはよくわかるのだが、それでもなお声の抑揚にこねじりといふので、声しか聞こえない俺には一瞬どつちなのか判断がつかない。めんべくさいやつだ。

「成功？ なんも見えねえんだが、マジで魔法なんてあんのかよ。そつちのが驚きだわ」

瞼を開いてもまだぼやけて自分の掌も見えない有様だが、とりあえずあの一瞬に教室を満たした強烈な光はなくなつたようだ。明暗のギャップで、今は先ほどよりもずっと教室内が深い闇に閉ざされている。真つ暗闇だ。

「んあ～、なんも見えねえ！ おい美緒、ほんとに成功したのかよ？」

確かに魔法とやらは発動したようだが、はたしてそれが召喚魔法だったのかどうか、そして成功したのかどうかとなると、どうしても半信半疑になつてしまつ。確かめようにもこの視界では何を見ることもできない。仕方なしに、先ほどまで美緒の立つていた方を声だけを頼りに特定して、足を進める。

両手を前に突き出して探し探しのゆっくりな足取りの中、徐々に光が戻り始める。数歩向こうで「王立ちをする美緒らしき人物のシルエットが薄らと浮かび上がる。

「おい、成功したって」

見えたことが油断につながった、とは何ともお粗末な話だ。

うつかりそれまでよりも雑に一步を踏み出し、そのつま先が見事に何かに引っかかる。「うおわっ！」

慌てて体制を立て直そうとするが、完全に次の一步を踏み出すつもりだった体はいとも簡単に重力に惹かれて崩れ落ち、

「わきやあ」

床との激突を覚悟していた俺の顔面を襲つたのは、何やらぼくによつとした感触だつた。

「ぼによつ？ んだこれ、何も見えん」

倒れたのは間違いなく倒れているのだが、床ではなくビビやら何かを下敷きにしているらしい。柔らかくてふかふかしていて、クッションや布団のような気もしたが、それにしても程よい暖かさや質感もある。

布とこつよリは生き物の上にいるような感じだ。そう思つてゐる

と。

「うう、お、おもいよ～う

呻き声が何やらもじもじと訴えかけてくる。

「ん、喋つた？」

頭上からの声に目を向けると、うつすらとした輪郭とその中に納まる一つの光が見えた。それが顔の輪郭と瞳だと気づくのには、さほど時間はかからなかつた。

俺の下に、人間がいた。さつまではいなかつた、よな？

「だれ？」

「うう、いいから退いてよお。お、重い。つぶれちゃうよ」

蚊の鳴くような声に、あらためて自分が誰かを下敷きにしていることを実感して、慌てて飛びのいた。このころになるとようやく元

通りの視界が戻ってきて、正面で誇らしげに立ちはじめる美緒の表情ぐらいなら読み取れた。

が、今問題なのはそちらではない。

「なんでいきなり下敷きなのよ。うへ、腰打つたよ」

そもそも足元で動いているのは、小さな女の子だつた。

つややかな黒髪は夜の闇よりも深い黒なのに、月明かりを受けてきらきらと輝いている。顔立ちこそしかめつ面なのでわからないが、小さな口やほつそりとしたあごのラインは人形のようだ。

素直に、かわいらしいと思つた。

「ひどい田にあつたよう、もう。いたたたたた……ん？」

田があつた。

透き通つた水晶のような田は、じつと見ていると吸い込まれそうだ。本当に人形さんのガラスの田玉のように艶やかだが、妙に愛嬌があるくりつとした瞳が特徴的だ。

「えーっと、これは、えつと、えつと……」

こちらの存在を認めると、それまでぐずぐずとへたり込んでいたのから一変してキリッと立ち上がり、たすき掛けにしてぶら下げられたポシェットから取り出したメモ帳を読みふけつてている。

まったく意味不明な行動にこちらがきょとんとしていると、お田当てのページを見つけたらしい女の子はふんふんと頷き、釣り上げられた口角をそのままに大きく口を開け、

「はっふ」

「うう」おー

噛むな！ 首筋をかむな。痛い、むちやくちや痛い、かなり全力で噛まれている。

「いだだだだだ！ 痛い、いだい、何すんだ、この、いでええええ！」

力ずくで引っ張がそつとするが、相当な力で噛みついているようで、引っ張つてもむしろ歯が体に食い込むだけだ。痛い、とにかく痛い。

このまま首の肉を持つていかれて俺の命は終わるんだ。やっぱりこんな口クでもない部活の口クでもない実験につきあつたのが運につきだつたのだ。美緒が召喚したのは新入部員なんかではなく、吸血鬼や悪魔の類で、俺はその生贊としてまんまと連れてこられただけだったのだ。悔しいが、そう考えるとすべてのつじつまが合つ。くそ、自分の軽率さが今になつて悔やまる。遅いけど。

軽率さの代償が命といつ、何とも割の悪い取引を半ば強引に自分に認めさせ、最後にせめて美緒に呪いでもかけてやるうとありつけの怨念をかき集めたところで、

「ふはあ」

首筋から少女の口が離れる。「ああー、なんか鎖骨のあたりがジンジン熱い。

「うん。で、この次は、えと……」

再びノートに視線を落として読みふける。何だこれ？ つていうか、首痛い。

「あ……ああ！ しまつた、間違えちゃつたよう。」わあどうしょ、どうしょ~

一人で大慌てして、キヨロキヨロしたりメモのページをめくつてみたりと忙しそうだつた少女は、俺と目が合つたらとおびえたように体を縮こまらせた。そう言えど、なんか間違えたとか言つてたけど、それと関係あるのか？ まあ、間違いじゃなくても首筋を噛むのは解せんが。

「どうしよう、願い事なんて聞いたことなかつたから、やばい~」
全体的に幼い顔立ちも手伝つてゐるのだろうが、慌てる様が何やらコミカルだ。ただし、顔のつくりは驚くほど端正で、何度も言つがよくできた人形のようだ。

「さつきから何言つてんだ？ てが、こんなところで何やつてんだ？」

ほんの少しの沈黙だが、慌てる姿もどこかほほえましい。

そんな混乱を見かねたのか、それとも単にグダグダ感に耐えかねたのか（おそらく後者だろうけど）美緒が少女に近づいて名乗りを

上げる。

「ここは満貫寺高校。我々は超科学部の部員だ。ちなみに私が部長の天王寺美緒だ」

お前、部長だつたのか、つてそりや 一人しか部員がいなきや必然的に部長だわな。

「そつちが我が部のホープにして奴隸、千古修太郎だ」「おい。

「あ、あ、うん。よろしくう」

あれ？ 意外にもあつさりと会話してるぞ？ つてか、これは召喚魔法成功つてこと？ 頭の中で一人会議を開催していると、美緒が何やら少女をたぶらかし始めた。

「ようこそ超科学部へ。君が何者かはさっぱり分からないうが、君はもう立派な部員だ。我々とともにめぐるめぐ青春の日々を謳歌しようではないか」

高らかに、自信満々に宣言しているが言わんこつちやない。いきなりのテンションについてこられない少女はきょとんとしてしまっているぞ。そもそも、呼び出していきなりお前は部員だなんて、百人中百人がそんな説明わかるはず

「わかつたあ

「わかんのかよ…」

しかもなぜか、意を決したように小さく拳を握つて、頷いたりしている。

「君はいちいち突つ込みの細かい男だな」

「そりや突つ込むわ。つてか、まずその子誰だ？ なんで俺いきなり噛まれてんだ？」

回答を求める視線を少女に投げかけてみると、視線を避けるように見事なスウェー動作を見せる。いや、避けられても困るんだが。

「ふむ、確かに何者かぐらいは聞いておいても不便ないか」「つてか、名前ぐらい聞けよ。なあ力ナメ」「ん？ 俺、今なんつった？

「えと、その、もう知ってるんだから……いいじゃん」

自信なさそうに俯いて唇を尖がらせている。何かに似ていると思つたら、うちの店に来る親子連れの、子供がすねている姿にそつくりだ。

「いや、いくら神様だからっていきなりそんな不条理が通るわけがん? ん? なに? 神様? なんだそりや。

「シユータロー、いきなり何を? というか、彼女はカナメ君というのか?」

待て待て待て、俺に聞くな。俺だって初対面だって言つのにカナメが神様だなんてこと知つてるわけが、って何だ、なんでこんなことが俺の頭の中にわいてくるんだ。

「ちょ、え? 何? 何だこれ、なんで俺がお前のこと知つてんだ?」

言つまでもないが、田の前でしょぼくれている少女とは初対面だ。それは間違いない。なのに、考えるまでもなく名前や、この子が神様であることがすらすらと出てくる。デジヤヴとも違う、奇妙な感覚に錯乱状態に陥りながらも、何とか冷静に、冷静にと自分に言い聞かせる。もちろん、冷静になんてなれるわけがない。

「わ、わたしは、神様だよう。呼び出しておいてひどいよう……いきなり踏んづけられるし。おかげで、間違えてこいつを下僕にしちゃつたよう」

自信なさげに右に左に泳ぐ視線に、こちらまで不安になつてしまふ。それでも、カナメと名乗った自称神様はおもむろに上田づかいに俺を見つめ、勿体ぶつて呟いた。

「へえ……それで、間違えて、なんておっしゃったわけだ。で、俺、下僕?」

「そうだよう。願い事を、叶えてあげようとしたのに……」

「へえ、願い事を……かなえようとしてくれた、んだ」

「惜しいことをしたね、シユータロー」

召喚魔法に、神様に、下僕? もう、何が何やら勝手にしてくれ

つて感じだ。俺の理解の許容量は大幅にオーバー。器は爆散して跡形もない始末だ。願い事つて、んなこと今更言われても、つて感じだ。でもこいつが嘘を言つてないことは、頭の中でしつかりと裏付けられている。裏付けのないものに、だけどな。

とりあえず俺は、がくりと肩を落としてうなだれておいた。いや、そうしないと体と心のバランスを保つことができなさそうだったから。やるかたない。

「どうわけござります」

必殺のアイアンクローにひとしきり悶絶して床を転がったのち、『えられた弁明の時間をフルに活用して事の顛末を説明し終えた俺は、目の前の悪鬼、もとい、おかんの反応をつかがう。コーヒーカップを傾ける無表情に、一秒毎に命を削られる思いだ。

「ですので、その、俗に言う不純異性交遊や、ましてやいががわしい幼児性愛趣味などを持ち合わせているわけでは」

「カナメちゃん、つつたつけ？」

「は、はい？」

おい、もつと平身低頭、相手の出方を伺え。ワンミスで俺の命がなくなる局面だぞ。

「あんた、神様なんだって？」

「うん。そういうことに、なつてるよう。でもお、何ていうかそんな感じい」

どこまでも自信のなさそうな口ぶりは本当に神様なのかどうか疑わしいが、俺の頭の中ではそれが事実として定着している。リングがリングであるように、カナメは神様なのだ、俺の中ではな。

「ふうん……神様、ねえ。そつか、神様なんだ」

「な、なによう？」

「そのへんの真偽はさておいて、こいつが魔法陣から出てきたのは

間違いないわけで」

「あんたにや聞いてないよ

「御意」

視線の圧力だけで心をへし折ると、再びおかんの鋭い視線がカナメを捉える。

「なんだかよくわかんないけど、魔法で呼び出されて、手違いでこんな役にも立たないのを下僕に従えちゃって、家までついてきちゃつたわけだ」

「うん。そういうこと、なるかな。本当は、呼び出されたら願い事をかなえてあげなきゃいけなかつたんだけど、その……間違えて、違うページを見ちゃって」

そういうえば出てきて早々にメモ帳見たり、間違えたとか何だとか言つてたな。本当に大丈夫か、この神様？

「で、あんた行くあてとかあるの？」

「ううん、これから探さなきや。ここは多分人の世界、人界なんだろうなつていうのはわかるんだけど、こっちに来るのは初めてだから、焦つて様式も間違えちゃって……」

困つたように俺を見る。タヌキのポシェットをいじる姿は、小学生程度にしか見えない。お、おい！ 俺を見ながら目をつむつむさせるな泣くな！

「シユウのお願い事をかなえないと、帰れないし……」

そんなルールなんだ。あ、いや、そういうわれればその情報も頭の中にあるな。どうなつてんだ俺の頭？

「おい、シユウ」

「はいっ！」

全ての思考をサスペンド。軍隊顔負けの素早さで返事をする。もちろん背筋はピンと伸ばし、体の真ん中を貫く鉄の芯を想像する。直立不動の基本姿勢だ。家の中なのに。

「この子呼び出したの、お前なんだろ？」

「まあ、正確には美緒……天王寺のやつだけど

「おじてやる」

「は？」

「だから、この家においてやるって言つてんの。文句あるの?」

「滅相もございません!」

あつたところで自動的に却下された上に一度と逆らつ『氣』が起きない体にされるだけだ。

もうそんな体に仕上がるけどな。

「ま、実際あたしも話を全部鵜呑みにして信じたわけじゃないけどさ。かといって嘘だからって追い出すわけにもいかんだろう、こんな時間に。女の子一人」

時計を見ると、日付変更まであといいくらもない。たしかに、神様であるないに閑わらず、女の子が一人でうるつく時間ではない。

「つてわけだから、泊つてきな。え~っと、あんた名前は?」

「カナメ」

「カナメちゃん。あたしはこのバカの母親で、華美。よろしくね」
差し出されたおかんの手を、おぼつかない手つきで握り返した力ナメだが、それでもその瞬間ちょっとだけほつとしたように見えた。

「なんでお前がここにいる？」

「それはこちらのセリフだと思つたが。授業はどうしたね？」
まつたくもつてお互さまなので、あえて突つ込まずに手近な椅子に腰かける。

科学準備室。

相変わらずのカオス空間を見渡すと、何やら魔法陣の試し書きのような紙がそこらじゅうに散乱していて、新人画家のアトリエの様相も加味されている。まさか、昨日あれから帰つてないのかこいつ？
「美緒、お前授業ちよくちよく学校休むと思つたら、こんなことしてたのかよ」

「そのことに關しては訂正しておこう。授業など私にとつては余興でしかない。ちなみに、学校に来ているかどうか、という意味では私は皆勤賞だよ。土日も」

しかもこの女、出席しても教室ではいつも授業に關係のない本を読んでいたり寝ていたりするくせに、この間の中間テストの成績は学年上位という、教師からすれば何とも鼻つまみな存在だ。まじめに出席してノートを取っている俺が真ん中あたりをうろうろして、うつかりすると下位グループというのは解せない。世の中間違つていい。

「まあそれはさておき、連れてきたのかね？」

美緒が指差したのはおれの隣、所在なさげにおどおどと立つているカナメだ。

俺はカナメを学校に連れてきた。いや、正確には、連れてこじれるを得なかつたため、教室に直行できなかつたのだ。

「仕方ねえだろ、離れられねえんだからよ」

「ほう、これはまた朝からお熱いことだね。たつたの一晩でそこまでの関係になるとは、愛の力というのには偉大なものと」

「違う。そういう甘ったるい意味じゃない。本当に離れることがで
きない、距離をとることができないんだ。物理的に、空間的に「
変な誤解が生まれる前にその芽を摘んでおく。とくにこういった
問題は早期発見早期対処が基本だ。が、さすがの天王寺美緒をして
も俺の言っていることは俄かには信じられないらしい。そりやそつ
だろう。俺だつたら間違いなくそいつの脳を疑つて憐れむ。
「ま、口で言つてもわかんねえと思うから、見てろ」

「ん？ うん、見ろというのなら見るが？」

美緒の返事を待たずに俺は回れ右をすると、全力で床を蹴つて廊
下に飛び出した。準備室を飛び出してすぐに『廊下を走るな』の張
り紙があつたが当然無視。朝日の中差し込む授業中の廊下は、現実か
ら切り離されたように静まり返つていて。

その中を俺は走りぬけた。そこそこに本気の疾走で。

生物実験室を通り過ぎた所でちょっと減速、角を曲がつて隣の特
殊教室棟への渡り廊下に差し掛かつた。窓から差し込む光を目指し
て再び加速し……と、そこで視界がぐにゃりと歪み、

「というわけだ」

「ほう……これはすごい。確かに、離れられない関係、だな」

俺は再び科学準備室にいた。

もちろん、走つて戻つてきた過程を省略しているわけではない。
ちゃんと角は曲がつたし、渡り廊下に向けて走つた。なのに、次の
瞬間の俺の視界には、科学準備室としての機能をほぼ失いかけてい
る力オスな空間が広がつていて、というわけだ。

駒落としの映像で次の絵を間違えたような、とでも言えば分かり
やすいかもしない。

「いきなり現れたように見えたが

「多分それでいいと思うぞ。俺はつこさつこまで渡り廊下んところ
いたからな」

「ワープだな、まるで」

そう、これが俺がカナメから離れられないといった理由。

「どうやら、一定距離以上カナメから離れられないらしい。今朝もそれで大慌てだつた」

今朝は本当にびっくりした。なにせ、学校に行こうと家を出て、しばらく歩いているところなり家の中に戻っていたのだから。しかも土足で。オカンに意識が飛ぶほどブツ飛ばされたのはいつまでもない。が、さらに問題だつたのは、カナメの説明だ。

「わ、私はシユウを下僕にしたから、そのう、勝手に離れたりできないようになつていて、だから、逃げ出そうとしても戻ってくるようになつてるんだよう」

「つてことらしい。しかも、カナメは自分ではこの状態を解除できんらしい」

「メモ、し忘れてたみたいなんだよう」

「何ともお熱い関係だね、君たちは」

「お前、今の話聞いてたか？」

ほくそ笑みながらマジマジと俺とカナメの二人を見つめ、美緒は何やり考えているようだが、どうせ口クでもないことだらうから、俺は話を進める。

「で、ここに来たわけだ。学校サボつたらかーちゃんにぶつ殺されるし、でも教室にメイド服着た女の子なんか連れてけねえだろ」

カナメはなぜかメイド服を着ていた。というのも、我が家には女の子用の服というのが皆無で、唯一タンスの奥に眠つていた、店の開店イベントで使つたメイド服が唯一カナメの着られる服だつた、というわけだ。ちなみにカナメが最初に着ていた着物のような不思議な服は、今朝がたおかんが思いつきり洗濯機にぶち込んでたが、大丈夫なのか？

もちろん正門を通りて堂々と登校もできないので、校舎裏にあるフェンスの裂け目を潜り抜けるという裏ワザで学校に侵入している。

「説明としてはわかつたのだが、それでなぜここに？」

「いやいや、どう考へてもこうなつたのは昨日の魔法実験が原因なんだから、解決しようと思つてここに来るのは普通の考え方だろ」

「解決？ 何か問題があるのかね？ 特にそういうものは認められないと思うが」

さりとてのける表情は、本気でそう思つてゐるよつだ。それどころか、なぜおれがそんなことを考へてゐるのが疑問だと言わんばかりの疑いに目を向けてくる。頼むから、首をかしげてアホな子供を見るような表情をするのはやめてくれ。

「大ありだろ！ お前、どんな思考回路してんだよ。どう考へても不便だろ！」

「そうかい？ 美少女メイドが四六時中べつたりと付き添つてくれ生活など、思春期真っ盛りリビデーーいっぱい夢いっぱいの男子にとつては、むしろ願つたりかなつたりの環境ではないのかね？ そもそも、デメリットは何だね？」

たしかにその物言いだけを聞いていれば、これほどハーレムで男心をくすぐる設定もない。が、それはあくまでも言葉のマジックでしかないことも、実体験済みだ。

「あんな、どこに行くのも絶対一緒つて、既にデメリットだろ」
この呪いの場合、中心はあくまでもカナメであり、俺はその付随物、おまけなのだ。先ほどのように俺が遠ざかれば強制的にカナメのところに戻されるが、カナメのほうから離れて行つた場合でも、俺はそこに強制的に呼び寄せられてしまうのだ。

「しかし、その瞬間移動はどちらなんだろうな」

「どつちつて、何がだよ？」

「大別して、瞬間移動というのは一種類あるといわれている。空間移動方式と、空間置換方式だ。個人としては後者のほうが現実的だと思つてゐるのだが、カナメ君は神だから何があつてもおかしくないだろ？ というわけで、実験を」

「やらねえよ！ どつちでもいいわ。それよか美緒、さつさとこの呪いをといてくれ」

「呪いだなんて、ひどいよ」

ギュウッと両手を握つたカナメが、半泣きの目で訴えかけている。

なんでお前がここで必死になつてんだ？ 多少の驚きとともに見つめていると、カナメは急激に顔を真つ赤にしてしぶんでしまつた。頃や耳まで真つ赤にしてしょぼくれる神様つてのも滑稽だ。

「お前の魔法なら何とかできるだろ？」「

「無理だね」

即答かよ。

「そもそも、魔法というのも万能ではない上に、私に使えるのは召喚魔法のみだ。今はまだ。まあ、因果律から神の力から何でもかんでも断ち斬るインチキのような剣でも呼び出してくれといふのならやってみないでも」

「やめておこう。世界の終末が田に見えるようだ。にしても、なんだこの不便さは」

「あ、あああ、怒らないでよ。私だつていきなり呼び出されちゃつて、びっくりしたんだもん。願い事のために呼び出されたのなんて初めてで、だから、その……」

唇を尖らせて、こちらの様子をうかがつている。くそう、無駄に仕草が可愛いぞ。

「まあ大丈夫だ。実害はないのだから、のんびり構えてキャッキヤうふふしていれば」

「見つけましたよ、誘拐犯」

勢いよく扉が引き開けられる音とともに放たれた一言は、見事にその場のグダグダな空気に張りを与える。ツヤは与えてくれないが。そして、そんな空気が一瞬にして凍りつく。そりやそうだ。扉を開けたのが鳩時計だつたら、誰だつてそうなる。

「時計から、足がはえとるな」

時計といつても多種多様だが、目の前にあるのは人間一人がすっぽり入るサイズの巨大な鳩時計だ。そこから生えていく手足がすらりと長くて細い。その部分「だけ」を見ればモデルも真つ青だが、ほかの部分を見れば違う理由でモデル以外も真つ青だ。

ぱつぽー、ぱつぽー

「もう九時か。今日は一時間田は諦めたほうがいいようだね、シュー
タロー」

「だな」

「見つけましたよ、誘拐犯」

鳩時計のてっぺん、ハトが飛び出す扉が開くたびに、そこから顔
が見える。どうやらそこがのぞき穴になつていてるようだが、それだ
と一時間に一回しか外が見えなくて不便だろ？、と突っ込んだりは
しない。こんなことを突っ込んだら、鳩時計コスプレそのものを認
めてしまつくなる。許されざる非常事態だ。というか、非常識
事態だ。

「でだな、俺としてはさすがに教室にまでカナメを連れていくわけ
にもいかんだろ」

「無視をなさらないでください。意外と傷ついてしまいます」

「自分で鳩の扉開けにやまともに顔も出せないようなやつ、相手に
するわきやねえだろ」

しまった、相手をしてしまった。もろに鳩時計の中のやつと田が
あつてしまつたが、それもすぐに扉が閉まって見えなくなる。

「じそ、じそと手が動いて、何とももどかしく宙をつかんでは同じと
ころを行つたり来たりしている。何がしたいのかわからん。

「もしかして扉を開けたいのではないか？ 手伝つてやりたまえ」

「まじかよ？ 相手したくなー」

と言いつつも、さすがに一回突っ込んでしまつてるので無視す
るもの忍びない。俺は親切にも鳩時計に近寄り、ハトが出てくると
この扉を開けてやる。あ、ちゃんと木製だ。凝つてるな。

「見つけましたよ、誘拐犯は
パタン。

「何をなさいます？ 開けておいていただかないと会話が成り立ち
ません」

「やかましい。いきなり現れて何が誘拐犯だ。つてか、鳩時計に誘
拐犯呼ばわりされる覚えはない。通報されたくなかったらとつと去

れ

「盗人猛々しいとはまさにあなた様のことですございますね。私とい
たしましては一刻も早く貴方様に制裁を加えたのちに。と、それよ
りも力ナメ様、力ナメ様はいざこに？」

いきなり何かに気づいたようにきょろきょろとし始める鳩時計だ
が、そのでかい団体で動き回るな。ただでさえサイズがでかいのに、
動くと装飾やらなんやらが引っ掛けりそうになつて危ない。

「目の前にいる！ 動くと力ナメを轢いちまうぞ。つて、あんた力
ナメの関係者か？」

今更ながら、俺の知り合いに鳩時計を着るような女はいない。美
緒ならこういう知り合いの一人や二人いてもおかしくはなさそうだ
が、先ほどの反応は他人のそれだ。となると、必然的にこの気ぐる
み女は力ナメの知り合いということになる。

「ナイアガラは力ナメ様の付き人であり保護者であり身元引受人も
買って出ております。わかりやすく申しますなら、恋人でございま
す」

「ち、違うもん！ こ、こい、びとなんかじや。ね、違うんだから
ね！」

「いや、俺に向かつて力説せんでも。そもそもどっちでもいい
「ふええ～。ひどいよう」

「で、その辺はいいとして、あんたが」

「ナイアガラ、でございます。人界の方が軽々しく声をかけてよい
ナイアガラではございませんが、それだと会話が進みませんので親
切にも返事をして差し上げます。ああ懐の深いナイアガラ。それで、
なんでございましょう？」

めんどくさいやつだが、とりあえず今は我慢だ。冷静になれ、必
要なのは冷静さだ。

「ナイアガラさんは、力ナメを連れ戻しに来た、つてことでいいの
か？」

「ふえ？」

力ナメが素つ頓狂な声を上げる。いや、そこはお前が疑問に思つなよ。

「左様に『ござ』います。本来ならば、人界のものが軽々しく声をかけてよいナイアガラで」

「そのくだりはわかつたから」

「情緒を解さないのでござりますね、人界の方は。と珍しく非難がましいことを考えたことは内に秘めたままお答えいたします。半分正解といったところ『ござ』いましょうか」

「半分?」

澄まし顔でナイアガラはすっと目を閉じるが、いかんせん鳩時計を着ていてはどんな演出も効果を發揮しない。というか、ずっと扉を開けているのはそろそろめんどくさい。

「ええ。残り半分はあなたでござりますよ、誘拐犯」
びしひ、と指つされたので、思わず扉から手を離してしまつ。パン。

「ちょっと、何をなさいます。卑怯でござりますよ」

落ち着いた声音とは裏腹に、慌てて扉を開けようとしているようだが、先ほど同様にうまく開けられずに手があおあおと宙を泳いでいる。

もちろん、そんな光景を見た俺が導き出す答えは一つだ。

「さーつて、一時間目までたっぷりあるし、食堂にジユース買いに行くかな」

「私はカルピスだ」

「似合わねーもん飲んでんじゃねえよ。つか、さらつとパシらせんな」

「あ、あたしは、おしるこがいいんだよ」

控えめに手を挙げて、人差し指をくわえた力ナメが申し訳なさそうに要求する。だから俺は優しい笑顔を作つて頭をなでてやる。

「おめーは来るんだよ。さもないと俺は食堂にたどりつけん」

「あつ」という顔をした直後に、失敗に顔を真つ赤にして俯いて

しまう。どうやら本当に気づいていなかつたようだ。

「やれやれだぜ」

ため息がこぼれたが、とりあえず今だけは逃避しておく。

背後で何やら文句を言いながらドタバタと動き回る鳩時計という、非常識に彩られた非現実から。こんなもん、誰が現実だつて認めてやるか。

食堂の自販機で俺はカルピスとおしるこ、そして自分の缶コーヒーを購入し、その場でコーヒーの缶を開ける。おしるこはカナメに渡してやつたが、熱々の缶を両手で持てあましているようで、落としてしまわなかつ心配だ。

ただ、そつちに気をまわしてやれないのつづきならない事情もある。

「つつか、付いてくんなよな」

「どこまでも付いてまいります。私には大事な使命がござりますゆえ」

食堂のテーブルに腰を下ろした俺の向かいには、鳩時計を着たままのナイアガラが堂々と立ちはだかっている。サイズがでかすぎて食堂用の丸椅子には座れないらしい。

「俺が誘拐犯つてどういうことだよ？」

缶コーヒー独特的の、ちょっと酸味の強い味が口いっぱいに広がる。「どうもこいつもございません。あなたには、カナメ様の、つまり神様誘拐の容疑がかかつてござります。というわけで、私はあなた様を確保せねばなりません。おわかりいただけますか？」

「いただけねえな」

「では、おとなしく私とともにおりでください。貴方様には黙秘権も弁護士を依頼する権利もございませんのであしから」

「までまで、いただけねえつづつてんだる。人の話聞けよ」

まったく、どうして俺の周りには人の話を聞かない奴しか寄つてこないのかね？

「何が」「理解いただけませんでした？」黙秘権についてで「ござる」ですか？」

「違う。その前、俺が誘拐犯だつてどこがそもそもいただけねえの」「これはまた異なことをおっしゃいますね。カナメ様の姿が突然搔き消え、人界に強制的に呼び出されたかと思うと一向にお戻りになられません。これを誘拐と申さずして、なんと申しましょう?」

たしかに、そのくだりだけを聞けば文句の一つも言えない気がする。だがそれでも、

「俺は誘拐なんかしてねえし、下僕だかしもべだかにされたのも勝手にやつたことだ。俺はむしろ被害者だ」

「なんと……いや、騙されません。そのような戯言で私を謀りつと zwaruなど、言語道断でござります。願い事を叶え終わつたらすぐこそ神界に戻るはずでござります」

「しんかい？ ああ、神界ね。はいはい」

神界。俺たちの住む人間界とは別に存在する神様の世界つてことらしいけど、知らない間にかこついう知識が刷り込まれてるのは、なんだかむずがゆい。

「嘘じやねえし。なあ、カナメからもなんか言つてやつてくれよ、このままじゃ俺、誘拐犯扱いだ」

よつやくフルタブを開けることができたカナメは、ホクホク顔で中身をすすつている。あんまりにもうれしそうだったので、「ちゃんと缶振つたのか?」とは聞けなくなる。

「修太郎は、誘拐なんかしてないよ。あたしが手違いで下僕に、しちやつた、から」

「マジでござりますか?」

「マジ、なの……突然のこと飛びくらして、その、手順間違えちやつてえ……」

もじもじと申し訳なさそうにつむきながらも、おじるこを躊躇のはやめない。よっぽど甘いものが好きなんだろう。ただし、空いた方の手で、ポショットから取り出した例のメモ帳を差し出していく

る。開かれたページに視線を落としたナイアガラのこめかみが、びっくりするほど痙攣している。血管はじけ飛びそうだぞ。

「なんという軽率なことをなさったのですか。カナメ様は神様でいらっしゃるのですから、もつと『自身の御役目』というものに責任をお持ちになつてくださいませ。たつたの一晩でもあなた様がいらっしゃらなかつたおかげで神界はそりやあもう芋の子を洗うような大騒ぎでござりましたのに」

「たぶん日本語間違つとるや」

「それは、わかつてるよう。でもでも、あ、あたしだつて予想外つて言つたか」

神様の世界でも大騒ぎになるのか。俺には全く想像もつかない話なので、とりあえずは傍観を決め込む。おかげで缶コーヒーはあつとこつ間に空っぽになつてしまつ。こんなことならサイズのでかいお茶や『一ラ』にでもすればよかつた。

「そのよつなご無体を……しかし、問題なのは何よりもかよくな下賤のものが、カナメ様から離れなくなつてしまつたという由々しき事態の方でござりますね。むしろ私とそういう関係に……」「いにょご」によ

「なん」と言われたつて、俺だつて離れられんなら今すぐ離れるつーの」

「ええー、シユウひどいよう」

「やかましい。誰が好き好んで」

「でもでも、だつて、あたしだつて、その……」

「と、お話はここまでござります」

鳩時計がクルリと回れ右をし、カナメを背中にかくまつように両手を広げる。

何やらただならぬ気配を感じた俺は、息を殺してじつとナイアガラの視線を追う。鳩時計のせいで顔は全く見えないが、多分この変だろうとあたりをつけて睨む。

そのとき、一時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

と同時に、バタンとこつ音がして弾び扉が勢いよく開き。

ぱつぱー、ぱつぱー

鳩が飛び出す。

「九時半、で「それこますね」

「俺の緊張感、返せ」

また？ 召喚

そして再び部屋。

一時間田の授業にはさすがに出ておきたいと「俺の要望は、鳩時計の問答無用の一言で却下された。何が「世界の危機と授業、どちらが大事ですか？」だ。俺にとっては授業に出ない=おかんにブツ飛ばされるほうがよっぽど危機だ。俺という一つの宇宙の。

「では、整理をしてまいりましょう」

「その前に、その鳩時計をどうかに片付ける。邪魔でせまつくるし

い」

「むう……ぎゅうぎゅうだよう」

ただでさえ狭い科学準備室は、美緒による占拠以来、超科学部の備品と称するがらくたによつてさらにその空間を圧迫されている。そこへ来て、超巨大な鳩時計の着ぐるみなんかを置いた田には、満員電車並みの人口密度になつてしまつ。いまも、すぐ隣のカナメの腕が俺の太ももに押し付けられている。しかも反対側には、「ん、確かにこれは狭いな。というわけでショータロー、この着ぐるみを実験室のほうに動かしてはくれまいか？ そうしてくれれば、肘で胸の谷間を堪能していふことについては不問に

「んなこたしてねえ！」

とは必ずしも言えないまでも、そこには決して劣情やら破廉恥やら青春の熱き血潮などは介在しない。仕方がないのだ。この狭苦しい空間で、他者と触れ合はないなどといふほうが無理なのだ。不可能なのだ。だから、この程よい弾力と柔らかさに包まれた右腕の感触を一秒でも長く、なんてことは微塵も思つていない。断じて。

それを証明するように、俺は鳩時計の着ぐるみを抱えて、泣く泣く準備室から実験室に移動させる。にしてもこれ、むちゃくちゃ重いぞ。本当に木で作るなよな。

「変態で！」ざいますね」

「ちっ、げえ！」

準備室に戻つた俺に浴びせられた第一声は、ナイアガラによるその一言だ。しかも、道端の「ごみをみるような、糞みの視線」というオプション付き。

「ひと

「ん？」

心をえぐる精神攻撃に深い傷を負つていると、カナメがすぐ隣に寄つてきて、何やら俺の腕に抱きついている。

「何をやつとるんだ？」

「だからその……み、美緒が終わつたから、つ、次はああああたしの番、かな、つて」

「すまん、よくわからぶえ！」

後頭部に凄まじい衝撃を感じ、とつさに床に手をついて体を支え。あまりに強すぎる衝撃のせいで思考はぐらぐらと揺れたまま、世界は震度二か三といった感じだ。

「つてえな！ 蹴ることねえだろ。つつか何で蹴るんだよ！」

振り向くと、案の定ナイアガラがこちらに靴の裏を差し出して、先ほどのごみを見るような視線に殺意と呪いをプラスしたような、とんでもない視線をぶつけてきていた。

「ふん、でござります。この蹴りの意味がおわかりにならなにようでしたら、わかるまで蹴り続けて差し上げますよ」

さすがにそれは勘弁だ。こんな重い蹴り、おかんでも滅多に打つてこない。この時点では、ナイアガラは超一級の危険物として認定しておぐ。同列の危険物（人物、ではない）としては、おかんと美緒のほか、ICBMやゴルゴサー・ティーンが名を連ねている。

なぜかしょんぼりと俯いているカナメを横目に、俺は美緒を促した。こういう場合、俺よりもこいつの方が的確に事態の核心を捕まえるだろうから。にしても、カナメのこの姿はたつた一晩とちょっとの間なのに、もう定番のようになってしまつてしまつて、よっぽど引つ込み思案なのだろう。神様のくせに。

「どうやらカナメ君が神様だというのは本当らしいね。しかも人の願いをかなえに来たとは、何とも奇特な」

「だからそれ、何度も言つてるのにい」

その自信なさげな態度が、信憑性をレベルダウンさせる一因なのだが。

あらためて考えてみると、普通の人間の場合、疑問はそこから始まるものだということをすっかり忘れていた。カナメが言うには、下僕化に伴つて、神の下僕としての最低限の知識は注入される仕組みらしい。噛みついたのはそういうことか？ どういう仕組みだかさっぱりだが、便利を通り越してご都合主義すぎだろ、神様。

「しかし、なぜ神などというものが現れたのだろうね？」

「そりやお前が呼び出したからだ。召喚した人間の言つこいつやねえぞ」

その無責任さにほとほと呆れさせられるが、片や美緒は真剣に悩んでいる。まさかこの期に及んで、召喚魔法が成功するなんて思つていなかつた、とは言つまいな？

「私が呼び出したのはあくまでも超科学部の部員だ。神である必要などまつたくない」

「たしかにな」

「偶然だと言わればそつなのがもしけないが、私はどうにも根拠の乏しい偶然というのを信じたくないくてね」

「何事にも因果関係はある、とおっしゃるわけでござりますね」

「神様を前にして、偶然やら奇跡を否定するよりで申しわけないが、その通りだ」

なんとも美緒らしい。へ理屈も理屈のうちというが、美緒が言うとへ理屈でも不思議とそれらしく聞こえて説得力が与えられるのだから、これもある種の才能といつてもいいのかもしれない。

「ときに、美緒様はまだその時の魔法陣をお持ちでいらっしゃいますか？」

「うん？ 設計図でよければね。あの時の魔法陣はどういうわけか

光の粒子になつて霧散してしまつたからね。大方、陣そのものが触媒となつたのだから、発動と同時に消滅したのだろうとは思つてゐるがね」

もちろん言つてゐることはむづぱり分からぬが、自信満々なのでそういうものなのだろつといつてにしておく。

「ふむ……左様でござりますか……ふんふん」

美緒の手渡したメモ用紙を見つめながら、しきりに何やら頷いてゐるナイアガラだが、唐突にそのメモを机の上に置き、ある一か所を指差した。円形の魔法陣を取り囲むようにして書かれている文字と図形の中間のような場所だ。

「ここに、何と書かれましたか？」

「『じにかい？ これは、えつと、前後が『目の前』と『引きずり出す』だから、ここには新入部員と書いたはずだね』

「誤字で『じにかい』です。これだと『神入部員』という意味になつてしまひます」

手近な黒板に、漢字で「進」と「神」の一文字を書いて説明するナイアガラ。おいおい、なんだこの初步的かつ致命的なミスは、と呆気にとられるがもちろんこの程度で美緒は動じない。いつも通りの涼しい顔で、片方の眉を少し持ち上げるだけだ。

「本当かい？ いや、それは勉強不足だつたよ。それなら納得だね、これは神を召喚する魔法陣だつたわけだ。しかし妙だな。このようないミス、気付かないものか？」

「わけだ、じゃねえよ！ やっぱ諸悪の根源はてめえじゃねえか！」

「まあまあ、実験には失敗や犠牲はつきものだよ、シユータロー。大事なのはそれをどうリカバーするかだよ。とまあ、そんなことよりだ、本題は」

自分の失態をここまで棚上げする能力の方が、ある種の魔法だと突つ込みたくなる。

「ああ、このままじや俺が授業に出られないつてこと」

「魔法陣が発動していること、かな」

やれやれといった様子で美緒が首を振る。それもそのはずで、足元に落ちてゐるルーズリーフには、見覚えのある魔法陣が描かれて、しかもぼんやりと光つてゐる。

「わあい、ほんとだ発動してるね……じゃねえよ！ 何してんだ、この一瞬の隙に！」

「いや、先ほどの誤字を修正すれば新入部員が現れないかと、ね。興味がわいた瞬間には実行に移してはいたわけだよ。ままあることだ」もう、突つ込む氣概もわいてこない。誰だよ、田の前の事態を解決するより、新しい問題を生み出すことに情熱を燃やす馬鹿に、燃料を与え続けるのは。

隣では、好奇心丸出しの田をしたカナメがおじるの缶をぎゅうと握りしめている。アルミ缶だつたら潰れてただろうつな。

とか何とかやつてゐる間にも、魔法陣は明るさを増し、昼なお薄暗い科学準備室を煌煌と照らし始めた。何もかもが昨夜の再現のようだ。

「もー、神様とか悪魔とか、変なの出でくんのやめてくれよ~」

悲痛なまでの魂の叫びだが、たぶん無理だらうなど、心のどこかではもうちゃんと諦めている。何せ魔法の行使者が美緒だ。穩便な結果など、絶対にあり得ない。

「神様、いやなの？」

好奇心むき出して光を見ていたカナメが、ふと俺を見つめて泣きそうな顔をする。

「いや、そういうわけじゃない。神様が嫌いだとか変だとか、そんな意味じゃない」

「じゃあ、その……好き？」

何でこんな時に、白の裏側は黒みたいな話になるんだ。世の中にはグレーだつたり色が付けられなかつたりするものがたくさんあるんだと、誰か教えておけよな。

「さあ、どうなのでござります？」

「なんでおめえまで絡んでんだよ

「いえ、つい出来心で『ござります』と、ナイアガラは自身的好奇心に蓋をしつつも、申し上げます。いよいよ陣の発動で『ござりますよ』発動はいいとして、何でうちの制服なんか着てるんだ？ ビックで手に入れた？」

なんて細かいところに突つ込みを入れる隙を、魔法陣の発動に奪われた。

これも、まんま昨晩の再現。急激に膨張した光が空中にはじけ、視界のすべてを光で埋め尽くす。

「うお！ まつぶつし！ 忘れてた」

そしてフラッシュバックする昨夜の記憶。もちろんそんな愚は犯さない。人間は学習するのだ。このままぼやけた視界の中をよろぼい歩けば、召喚で呼び出された何者かとぶつかってしまって、またまたあらぬ厄介事をしょい込むことになるわけだ。となれば選択肢は一つ、

「後退あるのみ！」

その場から撤退すべく、両手で目を覆つたままバックステップを華麗に決める。自分の後ろにはこまごまとしたごみしかないのは確認済みだ。

がちや

「美緒、千古君、いる？ もうき食堂の方、歩いてるの、見えたから。実は、入部どど」

鼻つ面の数ミリ先を扉が通過する。間一髪直撃を避けられたものの、現れた人物が予想外すぎて一瞬思考が蒸発する。

「いいんちょ、何でよりにもよってこんなタイミングで」

「え？」

凄まじいまでの光を反射した眼鏡のせいで目元こそ見えなかつたが、表情は驚きの色一色に塗りかためられていた。そりやそうだろう、扉を開ければ中で閃光弾が破裂したようになつてんだからな。戦場だつたら決着がついてるレベルだろ。

「なに？ え？ みお？」

部室で弾けた光は廊下にまで溢れだし、立ちつくしている吹水を問答無用で包み込む。

光の粒子が質量を持つてゐるよつこまとわりつき、吹水を覆つてしまつと、徐々にその姿は輪郭を失つてうすぼんやりとぼやけ始めた。

「おい美緒、今度も成功しちまつたのか？ 何だ？ どうなつてんだ？」

「あれ？ 私の手、消えて。足も。あれ？ あれ？」

見る間に俺の田の前で消えてゆく吹水。まるで消しゴムで消していくかのように、指先から徐々に輪郭が溶け出し、透き通つてゆく。このままじや、

「おい！ 委員長が、吹水が消えちまつぞ！ どうなつてんだ！」

返事はない。周囲を見渡してみても、ただただ真っ白な何もない空間があるだけで、先ほどまでいたはずの部室は影も形もない。霧の中にはいるような、白一色で塗られた箱の中にいるような、不思議な場所だ。どこだよこ？

そうこうしてこるすちにも吹水の姿は消え続け、今では陽炎のように揺らぐ姿がぼんやりと確認できるだけだ。完全に消えてしまつのも、時間の問題に思えた。

「くつそ！ 間に合えええ！」

何に？ 言つた自分でも意味はわからないし、間に合つたところで代わりに自分が消えるのか、仲良く一緒に消えるのかもわからぬ。とにかく俺が言いたいのは、

「きえるなあああ！」

とにかく絶叫していた。

喉の奥を雑巾のように引き絞り、バランスを取るのも忘れて吹水に向かつて手を差し出す。その手を握れば助かるとも言つよつ。俺の手の中にある、光を。

光？

おかしい。やけに世界がスローモーションだとは思つたが、それ

にしても時間がたちすぎていやしないか？ それどころかまるで時間が止まっているような。

「いや、止まつてゐな、これ」

消えゆく自分の手を見つめていた吹水の動きも、ビデオの一時停止ボタンを押したように静止している。しかも、その周囲に漂う光の粒子までもが、ピクリともせずにその場に浮かんでいる。

「シユウう？」

「お、か、力ナメか？」

そんな中で聞いた聞きなれた声って、なんて安心できるんだろうな。うつかり、へたり込んでしまってやうになる。

「シユウう。その手」

力ナメの言うとおり、俺の手は光に包まれていた。何やら温かくて、柔らかい感触のする不思議な光だが、血縁に蛍光灯や懐中電灯がいるなんて話は聞いたことがない。手が光るなんて不思議現象、自慢じやないが生まれて初めてだ。

「ああ、なんだろなこれ？ なんかいきなり光出して。って、お前は動けるんだな」

「はやく、触れてあげてよう」

何が何やらさつぱりの俺が、山もりの聞きたいことを整理できずにいる。力ナメは落ち着いた口調で吹水を指差した。

「え？ 触れるつて、なんで？ それよりこれ」

「いいから、早くしないと、せつかくの奇跡も間に合わなくなっちやうよう」

「お、おつ。さ、触れば、いいんか？ つか奇跡つて」

取り合えず力ナメの方が何か知つていそうだったので従つておくことにした。「間に合わない」という言葉にチキンな俺は抗つことができないのだ。

先ほどまでが嘘のように落ち着き払つた俺は、ゆつくりとした足取りで吹水に近づき、手を差し出そうとして一瞬ためらつてしまつ。だって女子の体だ。触れたと同時に痴漢認定か変態認定された日に

は死んでも死にきれない。そうでなくとも女体だ……いや、いかがわしいことなんか考えてないからな。断じて。

「シユウウ、早くう

「わあっとぬ！ んええい！」

やけくそ氣味に、肩と二の腕の境田あたりを掌で軽く触れる。あくまでもソフトに、ポンと肩を叩くより、口をを感じさせないめい。

すると、それまで俺の手を包んでいた光がふわりと広がり、あつといつ間に吹水を包み込み、周囲のすべてを飲み込んでいった。

その光に包まれながら、ゆっくりと意識が白濁してゆく。眠気に耐えて意識を現実につなぎとめるのに近い。どうにも抗いがたい。暖かくて、柔らかくて、まるで冬の朝の布団の中のよう

「シユウウ。駄目だよう、あんな無茶しちゃあ

ん、て言つても吹水が危ないって思つて。

「ほんとこ、ほんとに危ないんだよう

「知らねえつて。危ないって、何がだよ。

「消えて無くなつちやつたら、ど、どひつよつかと……思つたよう。だからあ

「なんだそれ？

「かぶつ」

……痛い。

うなじのあたりに、ジンジンと疼くような痛みを感じて意識が呼び起こされた。

「ん？ ねてたのか？」

寝ぼけたままつぶやいたせいで、半分ほどがむにゅむにゅと意味不明の雜音だつたはずだが、俺の隣にいるそいつは意図するところを察してくれたようで、首を縦に振った。

「バカ面で『いや』ましたよ。眠るアホの図として後世に残したくなるほどで『いや』いました。写メには残しましたが

差し出されたのは俺の携帯で、『丁寧に液晶画面には激写された俺の寝顔がでかでかと映し出されている。我ながら、賢そつには見えないのが残念だ。

後頭部に感じる柔らかい感触に再び眠りに落ちそうになりながら、何とか踏みとどまる。『』で一度寝なんかした口には句を言われるか考えるだに恐ろしい。

見覚えのある部屋だが、レイア・ウトは記憶の中のそれとは異なっている。まあ、いつ見ても常にアップデーターを続けるカオスな空間なので、細かな違いなどないに等しいが。

どうやら俺は、あの真っ白な世界から無事に科学部の部室に戻つてこられたらしい。

「ちなみに、可能な限りのお知り合いで送信しておきました

「わあい、俺のプライベート万歳

「とまあ冗談はさておき

本当に冗談なんだろうな。後で送信履歴見て死にたくなるとかやめてくれよ。

「修太郎様、何をなさいました？」

「なにして、魔法陣が発動して、光って、そしたら委員長が来て…

…委員長…」

慌てて跳ね起きた。

勢い良く起きたせいで、一矢見下していたナイアガラの顔が一気に近づいた。

「キツ

「いでえつ！」

頭突きが破裂する。絶妙な角度で頭をずらしたナイアガラは、あろつことか自らの額を俺の鼻つ面向かって振りおろしやがった。鼻が、もげる。

「失礼。貞操の危機を感じましたものですから、カウンターいたしました。あしからず。とナイアガラは、童貞に危うく触れられそうになつたのをうまく回避した喜びを押し殺してお伝えします」
すきすきと痛む鼻の頭を抑えると、異様なほどに熱を持っていた。鼻血が出ているのかとも思つたが、どうやらそれは免れたらしい。にしても痛い。鈍器で殴られたみたいだ。しかも向こつは涼しい顔をしてやがる。なんちゅう石頭だ。

「ほ、ほれよ、そう吹水！ あいつは？」

「そちらおられますよ」

体を起こしながら見ると、パイプ椅子に座る吹水の姿。足元から肩口あたりまでをざつと一瞥して、手も足も消えていないことを確認すると、ほつと溜息が洩れた。

「委員長……だいじょうぶ、なんだ、よな？」

えらく縮こまつてしまふくれた顔を俯かせている姿に、何かあつたのかと心配になる。

「い、いめんな、さい。その、ほ……僕のせいで危ない目にあわせてしまつて、

「いや、それはいいんだけど。つーか危ない目にあわせたのはこいつだし、むしろそれならこっちの方が謝らないと」

その間にも吹水は委縮して、というよりは怯えたように首を振つている。まるで、現実から逃げるよつこ、目も耳もふさいでしまつて、と言つ出せん勢いだ。

ただそれよりも、吹水が僕っこなのに驚いている俺はダメ人間なんだろうな。
「んでも、こっちの無事は確認できたとして、今回の成果がそれか」

足元にあつた何かをひょいとつまみあげる。

両手サイズの毛玉……のような生き物。特徴的なのは、体のわりに小さな頭と短い前足。それに対して、全体的なバランスで見るとかなり大きな、ヒロヒロと動く耳。

「そちらしいのだが、どうにも迫力に欠ける結果になつてしまつてね」

背中をつまんでいるせいだろうが、ウサギって意外と長いんだなと変なことを思う。

「その態度はいただけねえな。ここはもちつとびっくりしたり感動したりするところだろ？ ましてや何でも願い事を叶えてくれるこのあたし、魔神様が」

「喋るウサギか。まあ 神様よりは魔法成分たっぷりだな。しつかし、この程度で驚かなくなつてんだもんな、俺も」

「ふむ、やはり魔法陣の小ささが原因か。なかなか調整が難しいな」何を呼び出したいのか、とは聞きたくもない。どうせこいつの場合、でかければでかいほど喜ぶという悪魔的な発想なんだ。

「おい、聞けよな！ あたしの」

「か、神様だつて不思議要素いっぱいだよう。願い事だつて、か、叶えるんだからあ」

「ミスたつけどな」

「うにゅう」

勢い込んで背伸びをしたカナメが、あつといつ間にしょぼくれて唇を尖がらせている。神様がすぐにへこむなよ。

「だからあたしの話を、おい、願い事を」

「やかましゅうござりますね。肉のパイにして食卓に並べられたいのでござりますか？」

「マニアックな知識だね。マクレガーさんだね

「もーつ、何なんだよこれ！ もうやだ、さつさと願い事叶えて帰りたいいー！」

「じゃ、じゃあ、僕を魔王にして
え？」

決して大きくないその一言に、部室の中の混沌とした時間が静止する。

言つた本人ですら、自分の言葉に慌てて次の行動を起こせない静謐な空間の中では、窓から差し込む光さえ止まつて見える。息をするのもはばかられる、そんな停止。

「委員長君？」

そんな中で最初に動きを見せたのが美緒だったのは、必然に思えた。こんな空氣の中で動くなんて、俺にはできない。さすがだ。

「ぼ、僕を、ま、魔王、に」

弱々しくしりすぼみになる口調は、いかにもいつもの吹水だったが、その言葉が何とも吹水らしくない。なに？ 魔王？

「どうした吹水、故障か？」

そう声をかけたのも、無理からぬことだと思つてもらいたい。さもなくば美緒の毒電波に感染したのだろうといつのが、俺の考える第一候補だ。こっちの方がありそうだな。

しかし、そうではないらしく吹水の首がふるふると横に振られる。と、

「強く、なり、たい……」

いつも通りの眼鏡越しの瞳は、今にも泣き出しそうに潤んでいる。

なのに、きゅっと握られた拳に、引き結ばれた脣。マジですか？

「チーンっ！ オッケーだ、願い事は受理された。あんたは今から魔王だ！ ……え？」

そう言つて元気いっぱい飛び上がつたウサギは、ひくひくと鼻を動かしていたかと思うと、唐突にぴたりと鼻の動きが止める。そのまま重力に引かれて落下し、べちゃりと床に尻もちをついた。

そのままぐるっと周囲を見回したウサギは、左右の耳を器用にぱらぱらに動かしてそちら中の音を拾つ。が、残念なことに彼らしい声はその中になかったはずだ。あの美緒でさえ呆氣にとられて口を閉じていたんだからな。

活動？ 開始

「つまり君も、願い事を叶えるために召喚に応じてあらわれた、と「つたりまあだる。うちに言わせりや、呼び出しどこで何言つてんだって感じだよ」

「どうやら、召喚業界（何だその業界？）では、呼び出す=願い事を叶える、つてのが常識らしい。この部にこると、とにかく世界つてのがわからなくなるな。

「ということは、委員長君は魔王になったのかい？」

その場にいた全員が一斉に吹水に注目する。あらうじとか、当事者その一と田されるうさぎまでもが吹水に熱い視線を送っている。ただのうさぎにしか見えないが。

「なつた、の？」

「実感はどうだね？ 内から湧き上がる憎悪の念や、あふれ出る魔力を感じたりは？」

美緒の質問に、日常的には聞かれない言葉が混じっているが、わかつてしまふのはRPGのおかげだ。

「特に、そういうのは……」

「闇の住人のうさやきや、亡者の呼ぶ声が聞こえるとかは？」

「ちょっと耳鳴りがする、かな？」

「頭の中に闇の魔法の呪文が浮かぶとか、属性が闇になつたとかこの世ならざるかぐりよの住人が見えるようになつたとか」

「あ

「どうした！」

思わず駆け寄る俺だが、美緒とナイアガラは喜々とした視線を送つていやがる。ここから、完璧に楽しんでやがるな。

「乱視、治つた。眼鏡をすると、気持ち悪い。でも近眼はそのまま」

眼鏡をはずして田を細めてこちらを見ている。睨んでいるようだ

しか見えないが、本人に全くそのつもりはないらしい。つてか、眼鏡ないと別人だな。

「つまり？」

総括を求める美緒だが、その後に続く言葉は簡単に想像できだし、予想通りの言葉が吹水の口からこぼれたのは言つまでもない。

「あんまり、変わつてない」

「どういうことだね、ウサギ君」

命の危機を感じたのだろう。逃げ出そうとしたところをいつも簡単につまみ上げると、全員が注目するど真ん中にウサギを突き出した。

「うちに聞くなよな。願いが受理されたつてことは、もつとくなつてるはずだよ。あとは本人の問題だろ」

なんだその無責任は？ まるで勇者を任命した王様の発言じやないか。ヒノキの棒とはした金を渡して「お前は勇者だ魔王倒して来い」って。でもそう考えると納得できてしまつた。

「たしかに、願いを叶えた後どのようになるか、どうなさるかはご本人次第でござりますからね。この場合、委員長様がどのようなもの想定なさつて「魔王」とおっしゃつたかにもよりますね」

「ということはつまり、魔界の権力者としての魔王を想定したのか、悪意の塊としての魔王なのかで今の彼女がどうなつてているのかがわかるわけだね」

「じ)明察でござります」

少なくとも吹水が想定したのは今しがた美緒が言つたようなものじゃない、つてことか。どう見ても悪意なんかかけらも持つてなさうだし、魔界の権力を握つたにしてはおどおどしそぎだろ。

「もちろんそれは、あのうさぎ君が本当に委員長君の願いをかなえたなら、という仮定なしには成り立たないがね」

つるしあげたままのうさぎに挑発的な笑みを向ける美緒。そして、まんまとそれに乗つてバタバタと暴れ出すうさぎ。どっちが悪魔だかわかつたもんじやないな。

「叶えたにきまつてんだろ？ つちを誰だと思つてんだ。魔神だぞ魔神！ どんな願いも思いのままの、ビッグな存在なんだからな！ 魔界のエースをなめんなよ」

「じゃあ君は、今から、僕のパートナー、なの？」
ひょいとつわざをつまみあげ、吹水が合わない乱視用の眼鏡越しに見つめる。

意外なほどの行動力に、ちょっとびっくりだ。

「いや、まあそういうことにはなる……のか？ わかんねえけど」

「な、名前、は？」

「……もも」

「ミヒヤエル・モンテの作品のようだね。モモか、なかなかキュートではないか」

そういうや、そんなのもあつたな。小学校の国語で教科書に載つてたな。しかし「キュー」とは、美緒に似合わないことはなはだしい。

「違う。食いもんの方だ」

「桃？」

アクセントを逆にした発音に、つわざがこつくりとうなずく。

「昔、とーげんきょーとかいうことにしばらく住んでたら、なんか、その喰いもんに似てるとかつて名前付けられて。くそ、あんなまん丸くないつづーのに」

しぶしぶといった様子で語つているが、うさぎの表情の変化なんて読めるわけもないのに、聞き流すしかない。まあ、色々あるんだろう、つてことにするしかない。

「それにしても、魔界のエースで桃源郷にも顔が利くとは、凄いもの呼び出したようだね、我々は」

そりやそりや。なんせクラスメイトを魔王にしちまうんだからな。経験のでたらめ具合なんかも含めて、色々と胡散臭いが。

「でもそうなると、今度は気になるのは委員長の方だよな。どんな魔王なんだろうな。何か実感ないのか？」

当の本人はひたすら眼鏡をかけたり外したりしているだけだ。気になるのそこかい。

「うん。ない、かな？」

うわ、めっちゃしょんぼりしてる。これで魔王とか、もつと魔王らしいのがすぐ隣にいるだけに、信じられん。

「ではこう質問を変えよう。うさぎ君、彼女が魔王であることを証明したまえ」

「それは良い案でござりますね。（カチャ）せひニアガラも見とうございます、と物見遊山ながら申します」

ナイフ方向転換だ、美緒。俺は心中で称賛を贈りつつも、証明されたら何かヤダという一律背反に微妙な表情を浮かべるだけだ。完璧に傍観者として楽しみ始めたニアガラが憎い。そのティーセットはどこから持ってきたんだこり。

「んだとー、ほんっと疑り深いなお前ら。いいか、よつと見てろよ！」

強気の口調のわりには、視線や首の動きが明らかに拳動不審だ。見ているだけで気の毒になるノープランつぶりだが、残念なことに俺以外の二人は見逃してくれないぞ。

ん？ ふたり？ そう思つてカナメを探してみると、道理で入つてこないはずだ。教室の隅っこに横たえられてすやすやと眠つてゐる。実に愛嬌のある寝顔だが、備品と思しき段ボール箱（『天岩戸』の張り紙あり）の中に寝かせるなよな。

そういうしててこりにちにも、うさぎがとつとつ強硬手段に出る覚悟を決めたらしい。

「見つてろー！ あの眼鏡は魔王なんだから、うちぐらーの魔力で体当たりしてもびくともしないはずだ、びくともするなよ、しないよな？ しないで！」

最後がお願いになつた悲しい叫びとともに、うさぎは全力ジャンプ。

「おおー！」

弾丸のように、とまではいかないまでもなかなかの勢いで飛び出したうさぎの体が、淡い光に包まれ、赤い尾を引いて一直線に吹水に向かっている。悪魔云々を抜きにしても、当たつたら痛そうなエフェクトだ。

「赤い彗星で」「ざこますね」

「といつことは、通常のうさぎの二倍だね」

緊張感のかけらもない会話は却下して、俺はうさぎの軌跡を田で追う。

「きやつ」「パシイーン」「ざゅう」

までもなかつた。

赤い光が吹水に触れる瞬間、電極がショートしたような光が一瞬はじけたかと思うと、うさぎが全身の毛を逆立てながら墜落した。なんか、でかい埃みたいになつたうさぎが不憫だが、その役割は十分に果たしたぞ。

「これ……なに?」

「つむ。これなら確かに魔王を召喚つてもよさそうだが……色が、な」

吹水が混乱するのも無理はない。なにせ、自分の体を薄い光の膜がすっぽりと覆つてしまつているのだ。しかも、体を動かせば陽炎のようにならぐ光が、時折はじけて空気を震わせている。アニメやゲームなんかでよく見る、魔力のエフェクトそのままだ。

ただし、

「えらくかわいい魔王様でいらっしゃいますね」「だな」

これには俺も同意せざるを得ない。

ピンクとか、さすがに、な。

かくして、ここに魔王が誕生した。といつことういんだが、この魔王の誕生が、まさか超科学部とその関係者各位を巻き込んでの壮絶なまでにアホな日常の火ぶたを切つて落としたなんて、さすがの美緒ですら想像だにしなかつたはずだ。

しなかつた、よな？

「にしても、何で魔王なんかつたんだ？」

「どうやら魔王様になつてしまつたらしい吹水に、それとなく聞いてみる。委員長なんてあだ名の吹水が、魔王になりたいなんて言つたんだから、気にならないわけがない。美緒だつたら問答無用で納得なんだけどな。

「どういう意味だね？ 魔王の何が悪いというのだ？」

「悪いってわけじゃねえけど。いや、悪いのか？ どうせだけど、魔王になりたいなんてあんまし考えないだろ」

「そうかね？ 私など幼少のみぎりにはなりたいものの筆頭だつたがね」

「お前はそういうな。あと自分にみぎりつて使うな

「よく気づいたね。さすがはシユータロー」

「どうやら所々で俺は試されているらしい。なんだこの常在戦場見たいな訓練。

「えと、その、僕はすぐ気が弱くて……でもせつかく高校生になつたから、強くなりたいって、思つて」

そう言わると、クラス委員を決めるときにもなし崩しで押し付けたような感が無きにしもあらずだつたな。ノーと言えないタイプなのは間違いない。

「それで、願い事を叶えるつて聞いえて、とつせじ、強いもの強いものつて考えて」

「で、出てきたのが魔王、か」

「変、だよね？」

まあ、変か変じやないかと聞かれれば変だと思つ。普通、女子高生になりたいものを見たときに『魔王』は出でこないだろ。とはいへ、弱い自分を変えたいという思いの強さの表れだと思えど、さほどおかしな話というわけでもないだろ。ただ一点、実際に魔王になってしまったことを除いては、だけどな。

「変だな」

「おめーは黙つてろ」

「何を言ひ。魔王がこんなに弱氣でどうするのだね。魔王だというのならもつと強氣の姿勢で常に自信に満ち溢れているものだと思うがね」

たとえばお前みたいにな。

「そ、そうだよね。うん。僕も、そうだと、思うん、だけど……まだ、自信なくて」

「大丈夫だ、魔王たるもの唯我独尊でなければならん。よし、こうなつたのも何かの縁だ、超科学部を上げて委員長君を立派な魔王にする協力をしようではないか」

おいおい、なんか言い出したぞ。

「ほ、ほんとに? いいの? 僕なんかのために?」

「ただし、この超科学部への入部が条件だよ。私としても、魔王には魔王らしくしていてもらいたいからね」

「うん、入部、する」

しかも人員不足まで一気に解決とか、どんだけ敏腕部長だよ。悪徳だけどな。

「つてか、委員長までノリノリになるなよ。考えろよ、こいつはあの天王寺美緒だぞ。何かあつてからじや手遅れおんぎあつ!」

頭蓋骨が軋みを上げる。何でナイアガラが俺を驚愕みにしてんだよ。

「お黙りくださいませ。あなた様がお邪魔をなさるので、進む話も進みません」

「なん、で」

「興味本位でいざります」

「いいな」

ぱつりと口をで呑いた吹水の一言を、俺は聞き逃さなかつた。いいなつて、何? もしかして吹水が求めてる強さつてこいつの? だつたらまずい。今すぐにでも止めないと、俺の体は苦痛が快

樂に変換されてしまつ素敵ボディに改造をされてしまつ。俺にその氣はない。

「く……は……」

「しづかに声も出せませんので、あしからずで「じやこ」ます」

額関節をやられたのか、まともに声を出すことができない。まずい、このままだと誰も止める者がいないままに、この部が魔王育成部になつてしまつ。そうなれば俺が日常を取り戻すのが、どんどん繰り下げる後回しになるのは目に見えている。それはまずい。

「では、異論はないね」

「「じやこ」ませんね」

「か……は……」

「うん。いいよう」

「おいカナメ！ 神様が魔王作つてどうすんだ。世界の平和は？」

秩序は？

「では、満場一致で超科学部の活動方針を、委員長君を立派な魔王として改造することとするよ」

ちょ、待て。ここにこるぞ、反対派がここに……わかつてますよ。無駄なんですよね。

結局その日は一度も教室に顔を出すこともなく、部活動終了のチヤイムが鳴るころになつてもまだ俺たちは部室の中でダラダラと議論を戦わせていた。

とはいってもその九割以上が無駄話で、わかつたことといえば吹水が自分の意志で魔王の力を操れないことぐらいだった。

帰り道。吹水と別れた俺とカナメ、ナイアガラの三人は特に会話もなく、街灯が夕闇を切り取る田舎の道を歩いていた。さすがにナイアガラを置いて自転車で帰るのも気が引けるし、かといって三人乗りは難易度が高すぎる。ちなみに、つさぎは吹水が連れて帰ることになつたので、鞄と一緒に自転車の前かごに突っ込まれていた。とことん魔神に見えない。

すーすーと、カナメの立てる寝息だけが夜の静けさの中に規則正しく聞こえる。

「風のない静かな夜だ。こんな日の散歩も、悪くない。

「ほんとに願い事をかなえる神様や魔神なんているんだな」

「ええ。そのために人は神や魔神を呼び出すのでございましょう?」
まあそなうんだが、おどき話や作り話でしかそんなもんが語られない現代に生きてると、こうなるんだよ。

「それよりも、あなた様がなさつたこと、おわかりですか?」

唐突すぎる質問に、ボケつと月を見上げて歩いていた俺の心臓がとび跳ねた。脅かすなよ、いきなり声かけんじやねえ。

「な、なんだよ藪から棒だな。何の話だよ、俺がやつたことって?」
すると、やれやれといった風に首を振り、哀れなものを見る目を向けてきた。やめろ、その目は意外とこたえる。

「あなた様が魔神召喚の瞬間になさつたこと、本来ならあつてはならないことなのでござりますよ」

「何の話だよ? 召喚の時つて、俺なんかやつたのか?」

「やはり無自覚でいらっしゃいましたか。それはそうで『ございましたよ』、何せあなた様が引き起こしたのは、奇跡なのでござりますからね」

「奇跡を起こした？ 僕が？ なんかの間違いだろ？ まさか、召喚が成功したのが俺のせい、ってんぢやないだろ？」

「だとしたら笑えないが、どうやらそうではないらしい。首を横に振るナイアガラに、ほっと胸をなでおろす。」

「私も知らなかつたのでござりますが、どうやら魔界からの召喚というのには、代償が必要なものだつたよつでござります」

「へえ。まああありがちな話だよな。魔界の召喚には生贊が必要、つての」

魔法陣の真ん中に横たえられた動物やら、時には人間の少女。その周りを取り囲む怪しい衣装の連中に、禍々しい燐台などの器具の数々。創作物なんかでよくみられる魔界召喚のシーンが、簡単に想像できた。

「あなた様は、その際に本来なら失われるはずの、杏子様の命を救われました。あの方は、あのままでしたら召喚の代償として消滅していたはずでござりますので」

「なんだと？」

「もちろん、本来ならあり得ないのでござりますが、どうやらそのようでござります。それが証拠に、こんなにも消耗なさつて……」

一変して優しい田元で、肩口にあるカナメの顔を覗き込む。どこまでも慈愛に満ちた、本当に慈しむような瞳だが、鼻息が荒いのはやめておけ。今にも齧り付きそうで怖いぞ。

「取り乱しました。とにかく、あなた様は奇跡を起こされたのです」

「うん。すまん。全くわからん」

「愚図で肩でござりますね」

「ひでえ。泣きそうだ。」

「本来ならカナメ様の田の届かぬ今この瞬間に分子にまで木つ端微塵にしてやりたいところでござりますが、ばれたときの言い訳が面

倒でござりますので、ナイアガラは実に慈悲深い行動に出ます。

「わあい、そりやありがたいやー」

危ういところで分子レベルの分解を免れたらしい。何この死亡フ

ラグ満載の無理ゲー。

「奇跡というのは神の御業でござります。その効力に際限はなく、全ての理を凌駕し、あらゆる束縛を受けることのない、まあ言つてしまえばチートでござります」

「身も蓋もなき過ぎてわっかりやすいな。最後の一言ですづえわかつたわ。そういうや確かに、消えていく吹水の姿を見た覚えがあつたけど、あれ夢じゃなかつたんだな」

自分がどれだけ下世話な生き物なのかを痛感したよ。

「んで、それが何かまずいのか？ それに、俺が奇跡を起こしたつてのもピンとこねえんだよ。今の話だと神様にしか使えないんだろ、チート……じゃなくて、奇跡って」

「はい。仰る通りでござります。だから、伺つてるのでございますよ。何をなさったのですか、ど。どうしてなのですか、ど。ナイアガラは問つわけでござりますよ」

一拍間をおく。

その間が絶妙で、ほんの一瞬の沈黙にもかかわらず、山ほどたくさんのことが頭の中を駆け巡る。なにやらいやなこと聞かれそうになつていうのも考えるし、衝撃の新事実を突き付けられそうな気もする。しかも、こいつの場合は俺には一切の遠慮なしだ。一撃で精神を崩壊させられてもいよいよ、十重一十重のガードを構える。

「あなたはなぜ、奇跡を起させたのでござりますか？」

再び問。

この時点で、俺の頭はもう空っぽだ。一瞬前にあれほど頭の中に溢れた思考や記憶の断片は、もれなく行方不明で尻尾も掴めそうにない。何故？ 何故だろう。

「納得できかねます」

俺もだよ。

「ですが、一つだけナイアガラ的な見解がござりますので、お聞かせしましょうか？ 聞きたいですよね、では」

「喋りたいんじゃねえか」

「あなた様は、カナメ様の神氣を体に流し込まれ、人でありながら神の僕となつておられます」

「みたいだな」

「認めたくねえけどな。

「ご存じではいらっしゃらないようすで申し上げますと、あなた様の体はすでに人のそれとは異なつております。まあ、わかりやすく申しますと」

「初耳だぞ、それ。つていうか、何？ 僕、人じやくなくなつちやつたの？ 他人が魔王になつたとかで一喜一憂してた場合じやないんじやないのか？ 衝撃の事実過ぎてなにやら心臓が異常に激しくドキドキしてるんだが。そして妙に腹のあたりがスースーするつていふか痛いつていうか、

「おい！ なんで手刀が腹にめり込んでるんだ！」

「百聞は一見出ござります。ちなみにめり込んでいるのではなく、貫通してござりますよ。ほら、背中が触れます」

確かに、ナイアガラの肘が俺の腹にあるのに、背中をさする感触がある。貫通確認。

「じゃなくて！ 死ぬ、死ぬからああああ、何だよこれ、なんで、なんで」

「冷静にお聞きください、大したことではございません。肉体が少々変性し、神氣そのものに近い構成になつただけでござります。言つてみれば、肉を持つた精神生命体とでも申しますか」

「ま、待て。ちょっとタンマだ」

さすがに息が苦しい。頭の中で整理をつけようとするが、どんなパーツがどんなふうに散らばっているのかすら纏められない。パニックというのにはこういうものなのだと、変なところだけ冷静だ。

「それが証拠に、いらっしゃい。血の一滴も出でおりませんし、

あつという間にふさがります。ほら」

言つて手を引き抜くと、確かにナイアガラの手には返り血びこの

か、汚れ一つない。

「あ、ほんとだ。もうふさがり始めて……ふさがつた。つて待て！」
「待ちません。神氣というのは神の存在、力そのものの具現化でござりますので、今の修太郎様はカナメ様の力の一部といって差し支えございません。ですが」

べたべたと腹を触つてみるが、そこには今までと何ら変わらない皮膚と肉の感触があるだけだ。人体切断のマジックでも見せられた気分だが、背中に残る掌の感触だけが、妙に際立つて思い起こされる。

まだなんかあんのかよ？ と、もはや俺の魂は風前のともしびだ。いや、もう神氣とやらになつてゐから人間としては終わつてゐのかな。あははは。笑えねえ。

「それも、カナメ様の意思ありきでござります。と、聞いておいでですか？」

「ああ、音声は届いている」

処理されてねえけどな、半分以上。

「にもかかわらず、あなた様はこ自身の意志で力を使われました」「それが、なんか変なのか？」

神妙な空気なのだろうが、混乱しているせいで置かれた状況がさっぱり理解できない。

「あなた様は、スイッチも押さないのに蛍光灯がともるとどう思われます？」

「そりや、まあ……びっくりする、な」

「それほどに、あり得ない事態とこいつ」とでござります、

俺、とうとう蛍光灯扱いですか。

「それともう一つ、大事なことをお伝えしておきます」

「まだあんのか？ 俺の耐久力はとっくにゼロだぞ。次の一撃が重かつた場合」

「あのような無茶をされた場合、修太郎様を構成する神気が著しく消耗いたします。場合によつては、」自身が消滅することも念頭に置かれますよう」

なんだそれ？　自分の意志では本来神様の力は使えないけど、俺は使っちゃつた。でもそれは俺を形作る力で、使っちゃつとかつらぽになつて消えちゃうよつてこと？

「そして何よりも、あなた様が失つた力を補給したがために、カナメ様は眠りに落ちてしまわれたのだといつこと、でござります」

「なんか、乾電池みたいだな」

「言い得て妙で」ござりますね。意外と賢いんでござりますね」

「ええ。意外と賢いんですよ」

こうして俺は、びっくりするほどあつさりと衝撃の事実を告げられ、人として終わつていたことを実感させられたわけだ。意外にも冷静でいられるのは、この数日の間に発生したとんでも事件の数々が俺の心を鍛えたからだろうか。

涙が止まりませんがね。

「まあでも」

足を止めた俺は、ふと自分の掌を見ながらこぼした。まだあのときの、暖かい感触が残つてるよつな気がしたが、実際にはそんなことはない。ただの、見慣れた手の平だ。

「それでも、吹水がいなくならなかつたんなら……よかつた」

それはまぎれもなく、俺が願つた奇跡だ。わかつていなかつたくせに、俺G」。

「よくもまあそんな恥ずかしいことをぬけぬけと考えられますね。思春期というのはかくも恥知らずに黒歴史を量産するのでござりますね。きんもー、でござります」

「いーだろ別に！　このぐらいの青春したつて！」

「別にかまいませんが。せめてそのゆるみきつた顔面さえ何とかしていただければ」

うそつ、そんなに俺の顔ゆるかつたの？　まじで？

「シユウう……ほきゅうう」

寝ぼけて噛むとか、どこの猫だよ。つなじが痛い。

「戻つて来たのかね、委員長君。忘れ物かい?」

窓際に置いたパイプ椅子で本を読んでいる美緒は、視線を本に落としたまま来訪者に声をかける。一度も見ていないはずなのに誰が来たのかわかるのは、超能力でも何でもない。予想が当たつただけだ。

たぶん、戻つてくるだろうという予想。

「ん、そうじゃ、ないんだけど……いいのかな、って」

「何がだい? 質問が抽象的すぎて回答しかねるね」

嘘ばっかりだ。本当は何を聞きたいのか、何を求められているのか、おおよそで当たりは付いている。

「あの、僕……中学の時、みたいに、もう、弱いままは、いやだか

ら

太もものところでぎゅっと拳を握る姿に、決意が現れているように見える。

「美緒がいなければ、僕、ここに、いなかつた」

「たまたまだよ。バカどもの興味が私に移つた、それだけのことだよ、あれは」

「でも、そのせいで、美緒は」

「本人が気にしていないのだから、よいのでは? 恩義を感じるようなことは何もなかつたはずだし、むしろ今は私の方が助かっているよ。部の存続が約束された」

美緒と杏子は同じ中学に通つていて、三年のときには同じクラスにもなつた。

そこで美緒が見たのは、杏子に向けられる心ない感情の発露。全國どこへ行つてもこの年代の、いや、年代に関わらずこの手の悪意は存在する。

杏子は、イジメられていた。

露骨な暴力こそなかつたものの、氣の弱い杏子は格好の的だつたわけだ。クラス内にはいくつかの女子グループが存在したが、杏子に目を付けたのはとりわけ派手で発言力のある集団だつた。その中心になつてゐる女子生徒が、杏子を利用したというわけだ。自分の立場を維持するために。

誰かを貶めればそのぶん自分が浮き上がる、そんな安直で蒙昧な思考。

そして、同じクラスにいた美緒は、問答無用にその事実を突き付けた。

「他人を貶めねば自らの価値を確立できないとは、笑止だね」

昼休みに購買部へのパシリを要求されて教室を出て行こうとした杏子の、襟首をひつつかまえて美緒はそう言つた。

教室中どころか廊下に出ている人間までもが何事かと振り返るほどの、凛とした声に教室は水を打つたように静まり返つた。

いじめを見たら見て見ぬふり。それが暗黙の中学生にすれば、地雷を踏んだようにしか見えなかつた。いじめられている人間をかばうという横槍は、自身がスケープゴートになることと同義だ。案の定その直後からいじめの対象は杏子から美緒にシフトした。

もちろん、その行為そのものが愚の骨頂であることに気がつくほど賢い女子なら、そもそもいじめなどしなかつただろう。

相手があの天王寺美緒であると、ほんの少しだけ考へるべきだつた。

小賢しいまでのいじめの数々は「ことごとく美緒によつたえようとしたわされ、見るも無残なほどに体裁を失つていつた女子生徒は、ついには最後の手段に訴えた。

やめておけばよいものを、具体的な暴力につつたえようとしたわけだ。当然のように美緒は全力でバールを叩きつけ、その一瞬でいつもたやすく一連のいじめ事件は終息を迎えた。

教室中が凍りつくようなバールの一撃は、教卓を直撃しただけにとどまつた。が、真つ一つに割れた天板を見つめる怯えきつた瞳に、

それまで最大派閥だつた女子のグループは呆氣なく解散することとなつた。女子の仲良しグループの、よくある哀れな末路だ。グループの中心をなしていた女子は、昼休みには一人で弁当をつつく姿が見受けられるようになつたのだが、そこに美緒が叩きつけた「人を呪わば穴二つ、だよ」の一言は、完膚なきまでにとどめを刺した。

美緒に悪意など、あらうはずもない。

もちろん、そこに至るまでの「イジメ」の過程について、美緒は認識すらしていなかつたので、寒質いじめていた側の独り相撲だつたわけだが。

「あの、あのときのこと」

「現実を突き付けただけだよ。瑣末なことだ」

しつと言つてのける視線は、相変わらず本の上だ。もちろん、この言葉にも他意などあるはずがない。美緒にとつては実際にその程度なのだ。

「ほ、僕は、そのおかげ、で、ここにいられて……もう、弱いのは、いや、で」

強くなりたい。もう、弱いままの自分が嫌だ。その切実な願いを両手に握つた杏子は、それを美緒に告げに来た、というわけだ。

「なら」

美緒の視線が本を離れ、杏子を見に向けられる。美緒らしい、真つ直ぐで力強い視線。

杏子の求める「強さ」を持つた、視線。

「強くなりたまえよ。君はもう超科学部の部員なのだから、遠慮など必要はない。魔王でも魔神でも淫魔でも、自らの求める強さをまつすぐに求めればいい。我が超科学部にはそれが最善だと、私は判断した」

この言葉も、美緒に言わせれば「現実を突き付けただけ」なのだろうが、その言葉の持つ魔力に気づかぬは本人ばかりなり、だ。

「いい、の？ 僕なんかで。僕が、いても」

部室に一步を踏みこめないつま先が、そのまま杏子の迷いを表し

ている。

氣の弱さゆえに、自分の存在を肯定できない杏子の心境は、ひたすらに揺れていた。

認められることの少なかつた、認められている実感の持てなかつた過去が、今回の行為を自らで肯定できていないのだ。

「入部届けはもう受理されているよ。やめたいといつても、我々は君を逃がさない。地の果て、それこそ魔界の果てまででも追いかけよ。委員長君。いや」

部室を横切つて、杏子の前に立つ。窓から差し込む夕日を背負つた美緒の姿は、血の色に染まつた魔女のようだ。そこに浮かんだ不敵きわまる笑みが、何とも似合つている。

「魔王君」

眼鏡の奥の瞳が、色彩を取り戻す。

「ともに青春しようではないか」

杏子のスリッパ履きの足が、部室の敷居を超える。自らの意思で。

「超科学部だよ」

美緒の声と同時に、田の前を高速で何かが通り抜け、血の気が引くよつな「ふんっ」という重い風切り音が頬をかすめる。

「分かった。超科学部なのはわかつたから、いちいちバールを振り回すな」

どうやら標準装備らしい。お前はどこの世界の世纪末だ。

「ま、まあ、そのあれさ、超科学部に入部するなんて思いもしなかつたさ」

誰だつてそう思うだろうな。今でも脳裏にへばりついて離れないのは入部の翌日。つまり、吹水が魔王になつた翌日のお放課後。授業終了のチャイムと同時に立ちあがつた吹水が、おもむろに美緒に歩み寄つて放つた「部活、いこ」の一言に、クラス全員の時が止まつたあの光景だ。クラスメイトはあるか、教室を後にしかけた担任がわざわざ戻つてきて一時停止していたほどだ。

「そのあとの一週間で受けまくつた風評被害の方が俺には大変だつたけどどな」

曰く、弱みを握つて齧した。曰く、金で買った。曰く、呪いで操つた。エトセトラエトセトラ……。まあ、好き勝手に憶測してくれるのは構わんのだが、それを美緒に直で言つのが怖いからつて全部おれに持つてくんなりよな、クラスメイトども。

そして、興味深そうに鞄から顔をのぞかせるな、うそが。お前はあくまでも吹水のカバンのマスクコットだ。クラス委員の用事で出でた持ち主が返つてくるまで黙つてろ。

『退屈だー。鞄の中でできることなんて限られてるしさ。授業やつてる間はまだ話聞いてりや暇つぶせるけど。なー、出ていいだろー？』

そして、テレパシーが使えるからと好き勝手に話しまくるつさぎの存在。何でよりもよつてテレパシー受信できるのが俺だけなんだ。

『なー、かまつてくれよ。肉体がほほ神氣のあんたぐらいしかこうやつて話せねーんだよ。ナイアガラ怖いし』

「シュー、唐揚げ落としちやつた」

「しかし、どうすれば魔王らしくできるものかな。シユータローも一緒に考えたまえ」

「何さ？ 魔王つて、ゲームでもやつてるさ？ ギャルゲーなら大得意さ」

『なー、その唐揚げくれよ』

「ねえ、千古君に手紙を渡してくれつて、二年の人気がきやつ」

「うううおわあああああ！ いつぺんに喋んじやねえ、飯ぐらい静かに食わせろ！」

聖徳太子の偉大さに感心するとともに、絶対によくて二三人分ぐらいいしか話聞いてなかつただろ、と全力で突つ込んでおいた。歴史上の偉人にハつ当たりするしかないとは我ながら小心者だが、笑いたければ笑えばいい。

「落ち着きたまえ」ごきつ

「はつ、俺は一体。つてか、痛い」

「バールだからね。それより手紙？ シュータローにラブレターとは、奇特な人類もいるものだね」

人を静かにさせるために脳天にバールを叩きつける人類ほど、奇特じやないと想いますがね。と言いつつも、驚きのあまり腰を抜かしてしまつた女子に詫びておく。手紙を持ってきただけで突然叫ばれたりしたら、そりやひくよな。ああ、こうして俺はまた変人への階段を着実に上るわけだ。怯えきつた女子（もう恋の可能性はないだろうな）の目が辛い。今俺の頬を濡らしているのは、頭から噴き出した血液だと信じたい。

「どれどれ

『なんだよ、うちも混ぜろよなー』

「で、もつすでに俺あての手紙が開封されているのはじつこうわけ

だよ、美緒』

「なになに、超科学部員に告ぐ。科学準備室を返していただきたくそりう。ついては、本日放課後、話し合いの場を持ちたくそりう。準備室にて待たれてそりう。ぴーえす、こちらには奥の手がありそりう。何だねそりう。そりう。トネタではないか「

ビリビリっぽい。やつぱりな、そつすると思つたわ。

「トネタはお前だ。つつか、部室返せつて、どういうことだよ？あーあ、破つちまつたから差し出し人わかんねえじやねえか。くつつけんのめんじくせー」

かと言つてほつぽつておくとさらに面倒になるんだろうな。仕方ねえな。パズルにしては簡単だが一向にテンションは上がらない。床に散らばった紙切れを机の上に並べ、「そりう」「だらけの文章を再生する。最後の署名の部分に目をやるが、敢えてここだけ細かくちぎつたあたりに、悪意を感じる。

「えー、親、違うな、新、か。新科学部。なんだそりや？」

「知らないな。我々のパクリか？まあどうにせよ、取るに足りない存在だよ」

「だといいな。とりあえず飯食つちまおう。放課後になりやわかる話だ」

『なあなあなんだよ、うちも混ぜろよー』

「シュー、唐揚げ」

「わかつたから、俺のと変えてやるから。三秒ルールだほら。全然三秒じやねえけどな」

カナメの差し出す、フォークに刺さった唐揚げにかぶりつき、代わりに俺の弁当箱から一つ唐揚げを輸出してやる。ホクホク顔のカナメは、この昼休み唯一の救いだ。

何故か背筋が凍るような寒気がしたのは、あくまで氣のせいだ。そう思うことにした。

そして訪れた放課後。俺たちはそろいもそろつて食堂にいるわけだ。コーヒーが旨い。

「カナメ君は甘党だね。女子力が高いな」「いちごミルク。おいしいよ」

「僕は、抹茶ミルク」

「これうめーなあ。うちのも買ってくれよ、杏子」

傾けた紙コップに頭を突っ込んでジュースを飲むうさぎ。見た目だけなら微笑ましい光景なのに、今の俺にはそれすらもが心を荒ませる。

「一応聞いておくが、俺たちはなぜ部室じゃなくて食堂でだべってんだ？ 今日は部室で待つてろって言われなかつたか？」

「待てと言われて待つバカはいないよ。交渉事というのは自分のペースに持ち込んだものの勝ちだからね、わざわざ相手の言い通りにおとなしく待つこともない」

たしかに、一方的に手紙を押しつけて「待つてろ」で待つてやるほど暇ではない。

カナメを俺から引つペがす方法に吹水を立派な魔王にする方法。加えて、美緒の悲願である魔法の研究も同時並行でやらなきゃいけないっていうんだから、大忙しだ。

「それに、もし私の想像通りだつたとされるなら、わざわざ交渉のテーブルに着いてやる価値もない相手だよ」

「まあ、お前がそう言つんならそうしておこう。それより、こっちはどうすんだよ？」

手紙の差出入への興味なんてもともとないに等しかつたので、あつという間に興味は他所に移る。といつても、目の前でこんもりまるくなつていてうさぎに、だが。

「うちか？ 何だ？ あんたも願い事叶えてほしいのか？」

口の周りに抹茶オレがついて、緑のルージュを引いたようになつてゐる。ひげなんてジュースで濡れまくつてゐるのだが、大丈夫な

のか？

「そうしてもらえるとありがたいんだが、いかんせん先約があつてな。俺はとつとと神様の奴隸を解雇してもらつて、神様に願い事を叶えてもらわにゃならん」

「忙しいな、あんたも。で、うちのことつてどうことだ」

「言いたいことはただ一つ、実にシンプルな疑問だ。

「お前は帰らんでも大丈夫なのか？ というか、神様やら悪魔やらがうろうろしてて、この世界は大丈夫なのか？」

「いまさらと言つなかれ。この一週間、実に普通に俺んちでお手伝いをして飯を食つ神様やら、かばんから頭をのぞかせて物珍しそうにするつさぎやらを見ていると、それが非日常であることが意識から離れていくのだ。だつて、つさぎなんか人参与えたらバリバリ食うんだぞ？」

「うーん……何かまざいのかな？ カナメ、何か知つてつか？」

フルフルと首を振るカナメ。神様と魔神の会話には絶対に見えないよな。

「つてわけで、まあいいんじゃないのか？ うちも別に、願い叶えたらすぐ帰らなきやいけないつてわけでもないみたいだし」

「むしろいてくれなれば困る。委員長君がまだ魔王として未熟である以上、願いがかなつたとは言い難い。最後まで責任を持つて魔王にしてもらわねばな」

なんだその理屈は、と突つ込もうとしたのだが、隣りで何やら納得顔の吹水が首を縦に振つてるので、そういうわけにもいかなかつた。あれ？ なんか俺の常識がおかしく見えるのは気のせいいか？ 「ま、いいけどよ。うちもこつちのがなんだかんだで面白いし。そのかわりもう願いは叶えねえぞ。願いが叶うのは呼び出したとき一回きりだからな」

「そういうもんなのか？ それ以上はなんか都合でも悪いのか？」

「昔は三つとか叶えてやつたんだけど、みんなおんなじようなこと頼むからつまんないんだよ。だから一個にした。その方が緊張感あ

んだろ?」

「まあ、カナメも願いの数は増やせないとか言つてたし。魔神の定番、アラジンの魔法のランプでもキッチリ限定三つだつたしな」「ちなみにその数の話は、後付けの設定だね。原典では回数についての表記はない」

興味がなさそうにカルピスを飲みながらの回答だが、さすがは美緒。無駄に博学だ。

「へえ、うちもけつこう有名なんだな」

「有名? 何がだ?」

「だつて、ランプに入つてた頃のこと知つてんだろ? あの頃はけつこうホイホイ願い事聞いてやつたもんだよ。アラジンとか、そういうやそなのもいたな。願い事定番すぎてつまんない奴だつたけどな」

気にするのはやめよう。この世の秩序つて、意外といい加減なんだな。

「と、そろそろいい頃合いかもしれないね」

美緒に促されて、カナメ以外の全員が食堂の時計に目をやる。いい頃合いどころではない。たつぱり四時半だ。

「いい頃合いつて、さすがにこれはダメだろ。まあどうでもいいんだが。何を持つていい頃合いなんだ?」

そう聞かざるを得ない。なんせ、あの美緒がやたらと得意満面なのだから、何のたぐらみもないわけがない。と思つてみると、「行けば分かるよ」

今この瞬間、聞きたくないセリフナンバーワンの称号をやつてもいい。

某プロレスラーの詠んだ詩の一節のようなセリフを吐きだした美緒は、その歌を体現するよつて一人意氣揚々と歩きだす。どうなるものか? 危ぶむわ。

そして案の定。

「危ぶめばよかつたな」

その惨状に対しても口にできたのは、ただそれだけだった。

科学準備室、もとい、超科学部部室はいつもとはちょっと違つ DISCLAIMS
ヤンルの力オスを内包していた。何が違うかって一番大きいのは、
中に死体が転がっていること、かな。

「とうとうやつちまつたか」

床に無造作に転がされた男子生徒の遺骸が三つ。どうあれ超科学部に、といふか、天王寺美緒に関わつた己の不運を呪つてもらうしかない。俺に出来るのは誰にも知られないように死体を処理し、懇ろに弔うことだけだ。合掌。

「人死に」

「こ、殺さないで」

あ、生きてるんだ。カナメが手近な棒きれで突つつくと、ゾンビのようにもぞもぞとうごめいで、ノイズのような声でそう言つた。喋り方は死者そのものだ。

「やはり君達か。どうせこんな事だらうと思つていたよ。さあ、これに懲りて一度と」

「おいおい、事態が飲み込めない俺たちのために説明してくれないか？ 部室に来たら見ず知らずの死体が転がつてた、じゃあ怖いだろ」

誰がやつたのかは聞かなくてもわかるから省略だ。死体三人の顔に、くつきりと締め付けられた跡がある。アイアンクローラーの跡だ。「よりもよつて私めを美緒様と間違えられるとは……失礼にもほどがござります」

ブツブツ文句言つのはいいが、本人いないとこでよろしく。

「彼らは元科学部の部員。私の先輩だつた輩だよ。とはいえ、早々に退部を宣言して今では無関係のはずなのがね」

「なにがだ！ ちゃんと手紙読めよな、相変わらず人の話を聞かない奴だな」

「読む価値のない手紙だつたのでね、失敬」

先輩三人の顔色がみるみる真っ赤に染まつてゆく。科学部時代は

毎日こんな有様だったのだわ！」とが容易に想像できる。憐憫の情を禁じえない。

「くそう、だから直接言つべきだと言つたんだ」「なにを…」言つても無視されるだけだと黙つたのは甲斐屋だろ！」「違う、それは織手の案だ、俺じゃない」「ちがうつて、増鶴が言い出したんじゃないか。何でいつも僕ばつか」

見事に責任転嫁がぐるぐると回つていいのはいいが、美緒はもうとつくに興味を失つて何か別のこと始めてるぞ。できるならこういうのは決めてから話を持つてきてもらいたい。さもないと、

「本当に、お亡くなりになつてみられますか？」

いつた瞬間には既に実行に移している。まさに有言実行の見本のようで素晴らしいが、ここは止めるべきなんだよな。だつてもうチアノーゼが出始めてるんだもん。

「イラつつく気持ちはわかるがその辺にしどけよ、ナイアガラ。ほんとに死ぬぞ」

先ほどの会話で、おそらく三人のリーダーと曰われる甲斐屋なる人物が、アイアンクローのまま持ち上げられるという狂氣じみた技で今際の際をさまよつてゐる。他の二人なんか、さつきの攻撃を思い出して委縮しきつてゐる始末だ。トラウマ生成の瞬間に立ち会つたようだ。

「で、話は何だね？ 端的に言いたまえ。ちなみに部屋を明け渡すつもりはない」

「もう交渉ですらないな、それ」

ぐつたりと死体に逆戻りした甲斐屋はもう使い物にならないと判断したらしく、もう一人の増鶴なる人物が震える声で喋り出す。

「お、俺達は新しい部を立ち上げた。それに際して、この科学準備室を明け渡してもらいたい。そもそもここは、俺達科学部が使つていた」「ふん、しかし君達は部を出て行き、科学部を前身とした超科学部がここを使用するのはものの道理。ポツと出の君らにその権利はない

い

まあ、どつちもどつちだが、今回は美緒の方が正論っぽい気がするので、俺は黙つて頷くだけにどめる。にしても、美緒の方が正しいなんてことあるんだな。信じられん。

と、決着がついたかに見えた瞬間、それまで死体だつた甲斐屋がもそりと起き上がる。

「あ、ゾンビだ」

「きんもー。動きがきもい。うちああいう男キラーイ」

そして崩れ落ちて、三度死体に逆戻り。うさぎことどめ刺されるなよな。ちなみに、ちゃんと姿かくして言つてるあたり、喋るウサギの立ち位置を分かつているらしい。常識的な悪魔つて何かやだな。「えーっと、じゃ、僕が代わりに言つければ。こここの顧問は?..」

「そんなもんいらん」

即答ですか、さすがですね美緒さん。

「いや、要るとか要らないとかじゃないと思つんだけど。いるかいなかなんだよ」

そういうウイットに富んだ返しだったのかと、この織手なる人物の会話能力に少々感嘆する。伊達に美緒と同じ部に数ヶ月とはいえたわけではないようだ。実際、この三人の中で一番使えるのはこの人なんだろうな。つて先輩に失礼か。

「さあ。考えたこともないが、科学部の体制をそのまま引き継いでいるので、幕部がそのまま顧問のはずだ」

幕部といえば、冴えない理科教師だったように思うが、一年の授業を持つていないので、そして面識はない。ハゲなのを知つている程度だ。つて、お前は教師を呼び捨てか。

「その幕部先生、新科学部の顧問だよ。僕らの窮状を見かねて、こつちの顧問をやるよに言つてくれたんだ。というわけで、天王寺さんとのこは顧問なしの状態つてわけ」

あらま、一発逆転されちゃつたわけだ。

「なんだと? そんな横暴がまかり通つてたまるものか。きちんと

規則にのつとつて、公正に行われるべきだ」

美緒が言つと何かの冗談にしか聞こえない。

「といつてもどの部の顧問をするかは先生の方に一任されるわけだし。それと、こんなわけのわからない、実績も残らないところの名前だけ顧問よりも、理科の先生としては僕らを応援してくれるんだってさ」

「うん、なんて正論なんだ。

「これね。ちなみに、顧問の掛け持ちはできないから、天王寺さんがこの部を存続させるならさりやんと別の顧問探さなきやだめだよ」絶妙のタイミングで差し出されたのは『部活動申請用紙』なる一枚の紙切れ。しっかりと「新科学部」の文字に加えて、想起人の欄に三人の氏名。さらに、顧問の欄には幕部なる人物の直筆サインと印鑑まで押されている。

何の裏打ちもないような口ぶりではないとは思つたが、見事な下準備には頭が下がる思いだ。これだけの自信ということは、おそらくこちらが新しい顧問を見つけられない」とまで織り込み済みなんだろうな。

「こりや本物だわ。美緒、さすがにこれは」

「で、これがなんだというのだね?」

「や、だからここは正式な部じゃなくなつたんだから、ここの部室として使う権利は」

そりやたじろぐわな。どう見ても自分たちが圧倒的に正しいことを言つて、筋も通しているんだもんな。でも、一つ忘れてますよ、先輩方。自分が誰を相手にしてるのか。

「簡単な理屈だ。我々も顧問を確保して、もつ一度部としての申請をし直せば済む話だ。そうなれば、ここは引き続き我々のものだ」

「でも、もう顧問でくる先生なんかあまつてないし、っていうかもう僕たちは申請を出してるわけで」

「とにかく」

勢いよく立ちあがる美緒。どこから湧いてくるのかと聞きたくな

る自信を漲らせ、自慢のブロンドヘアを勢いよくなびかせる。いつ立ち居振る舞い、様になるよな。

「超科学部はこのよつなことではなくじけないよ。黙つて指をくわえて見ていたまえ」

「いや、ちょっと、もう僕たちは申請して」

「文句でもあるのかね?」

「いや、その、もう」

「待つていただきたいとお願い申し上げておりますのが、お分かりいただけないので?」

パキパキとナイアガラの指が鳴る。

「わ、わかったよ。こ、今週いつぱいは立ち上げを待つから、そ、その間に」

それだけを言つと脱兎の「」と駆け出した三人。背中が気の毒なほどに小さく見えた。

「学校は社会の縮図とはよく言つたもんだな」

勝てば官軍、力が正義。超科学部のキヤツチフレーズはこれで決まりだな。

「魔王らしく、なつてきたね」

おいおい、吹水までこんな色に染まってきたのかよ。

「では、今週の目標も決まつたところで作戦会議だ」

「おー」

何で美緒が生き生きしているのかはさておいて、ノリノリの吹水は何を期待しているのか? あと、楽しそうに身を乗り出しているカナメとモモ、お前たちは絶対に何のことかわかつてないだろ。

にしても、なんでこう次から次へ一大事に事欠かないかね、この部活は。

科学部が超科学部として本格稼働して、はや一週間。というか、まだ一週間しかたつてないのかというのが実感だ。どういう意味だつて？ あえて言わなくても、科学準備室の素晴らしい惨状を見れば、言葉は必要ない。少なくとも、部活で本気の暴力を自称神の世界から来た女に叩き込まれるような世界、日常だなんて信じたくない。

「何でお前んとこの部長様は生活指導にも風紀委員にも生徒会にも文句言わねえさ？」

「本人に聞いてくれ。そして、できれば告発してしてくれ。風紀委員でもなんでもいい」

目の前でカレーパンを食いながら携帯をいじっているのは、根隅真樹夫。席が近かつたので話すようになつた、入学以来の付き合いだ。

「滅相もねえや。縁一中の魔女に関わろうなんて、そんな命知らずの親知らず、この学校にはいねえや。一名を覗いて」

「ふるせえ。俺だつてお前みたいに中学の時からアレを知つてりやこつはならなかつただろうよ。しかしあだ名が『魔女』とは、美緒はやつぱり中学時代からああなのかと、その一言だけで想像できてしまうのがすごい。名は体を表す、だな。

「魔女？」

フォークとスプーンで俺と同じ中身の弁当箱をつづいているカナメが、きょとんとしている。俺なら三分とかからずに食いきれるほどの小さな弁当箱だが、きちんと栄養バランスがとれているのはすごいと思う。喫茶店オーナーはだてじやない、つてとこか。

「ああ、すごかつたさー。一年の時だつたかな？ 科学室の薬品パクつてものすげえ爆薬の実験したんだけどな、おかげでグラウンドが一週間使用禁止になつたぐらいや。隕石落つこちたみたいだつたさ」

「なんだそりや？ 核爆弾でも作ったのかよ？」

「テルミット反応だよ。金属アルミニウムを用いた一般的な酸化物還元法だ。その特徴である高温で膨大な熱量を利用したかったのがうまくいかなくてね」

「聞いてないのに説明に来なくてもいい。黙つて飯食つてろ。

「おお、うまそうな弁当だね、カナメ君。華美さんの手作りとはうらやましい」

「おいしいよう」

『うちも腹減ったー』

「にしても、カナメちゃんが飛び級クラスの実力つてのは、この姿からは想像もできないさねえ。なんか妹がいるみたいさ」

笑うと目がびっくりするぐらい垂れ目になるが、それがなんとな
くいやらしいという女子がいるのは、本人にだけ内緒だ。

「あんまそういうこと言わん方がいいぞ。命が惜しいならな」

こわーい保護者がいるからな、と胸の中で付け足してから俺も力
ナメを見る。

満貫寺高校の制服であるセーラー服に身を包んだカナメ。さすがに美緒のような改造こそ施してはいないが、サイズが微妙にあつてない。さすがのナイアガラでもたつたの一日でカナメサイズの制服を調達してくるのは不可能だつたらしく、既製品の最小サイズを折り込んだりして着ている。

そう、カナメはおれたちのクラスに入学してきた。転入生として。ただし、あまりにも唐突なうえに強引な転入だつたために担任はおろか、ほかのどの教師も把握していなかつた。そこに、書類だけは整つているという無茶苦茶なごり押しで高校生になつたというのだから、CIAもびっくりの手腕だ。もちろん、その書類の出所や戸籍や住民票なんかについては全てナイアガラが準備したのだが、俺は一切関与していない、するつもりもない。世の中知らない方がいいこともある。

「ロリコンシユウがカナメちゃん一人占めのためにそんなこと言つ

てるや？ 変態さ」

「冗談でもやめてくれ。俺の沾券にかかる。それ以上に、生き死ににかかる」

『あいつ怖いよなー。こないだうちもマジで殺されるかと思ったー』
ま、死なない体になつちまつたんで、生き死に縁のない俺だけだな。

「それよつびつべつしたのは委員長さ。まさかあの科学部』

といつわけで翌日。

「なんで俺は包帯でぐるぐる巻きにされてるんだ？」

部活から逃げ出そつとした俺は、例によつてげた箱で謎の攻撃を食らつて気がつけば部室、といつわけだ。しかし毎回、俺はどんな攻撃食らつてるんだ？

「部の存続のために決まつてゐるじゃないか。それとも私が個人的な趣味でこんなことをするとでも？」

あり得るのでやめてもらいたい。

「ぐるぐるー。ぐるぐるー」

「そうでござります。できれば首のあたりを重点的に力を込めて」「死ぬ、それ死ぬからー。」

嬉しそうに包帯を俺に巻くカナメに、殺人を指導するナイアガラ。

俺、殺したいぐらい嫌われてるとかどんだけだよ。死なないけど。

「それもいいね。いつそ息の根が止まつていると説得力がある」

そろそろ俺を生き物として尊重しようぜ、美緒さん。

「んで、包帯ぐるぐる巻きの俺はどこに運搬されるんだ？ このままミニマリストとしてお化け屋敷にでも売つ払おつてんじゃねえだらうな？」

「まさか。ただちょっと保健室に行つてもらうだけだよ」

「げつ！ なんつった？ 今まさか、保健室つて言わなかつたか？」

「冗談、だよな」

「本気、だよ。この学校でどこの部の顧問もしていなのは養護教

諭の浜だけだ

「うそだろ？ 保健室つてあの保健室だぞ。足を踏み入れたものは決して無傷では帰つてこられないとするいわれる、満貫寺屈指の魔窟。骨折した野球部員が患部にばんそんこうだけを貼られて帰つてきた、という伝説がまことしやかにさせやかれているが、それすら真実味があるレベルだ。

「だめだめだめだめだめだ！ 僕を殺す氣か！」

「あなた様は死にませんのでご安心を。まあ、不死ゆえに死ぬほどの苦痛を延々と受け続けるといつ素敵な体験はなさるかもしれませんが」

「ぐるぐるーう」

「イヤすぎだろ、放せ！ くそつ、動かない。カナメ、どんだけ包帯巻いてんだ！」

既に両手両足をガツチガチに固められていて、芋虫のように動くのが精いっぱいだ。しかも、ナイアガラが俺を抱え上げているので脱出はほぼ不可能。ちくしょう、なんでこんな時に絶妙の連携を發揮するんだ、この部は。

「さて、ではこの生贊をささげに」

「おい！ 生贊つてどうしたことだ、おい！ おいい！」

もちろん、抵抗なんて無駄だつてわかつてゐる。でもむ、無駄だつてわかつていても生きるためにあがくもんだろ？ それが命つてことだろ？

「あなた様は既に人間ではございませんけどね

「夢も希望もあつたもんじゃねえな」

「と騒ぐ間に到着だよ。たのもー！」

消毒液獨特のにおいが廊下にまで滲み出しているが、この匂いに戦慄を覚えるなんて世界中でもここにぐらいのもんだ。

「やかましい！ 帰れ！」

おいおい、信じられんがこれが保険教師で二十代女の発言かよ本当に病人だつたらどうすんだよ。と、口に出してはいけない。何せ

これがこの保健室を魔窟たらしめている悪の元凶。保険教師兼擁護教師、浜茜。名実ともに満貫寺最強の教師だ。

漂白したように真っ白な白衣に健康サンダル、ざつくりと後ろでくくつた髪型はポニー・テールというには少々ぶつ毛うだ。見るからに柔和そうな顔立ちのくせに、口からは罵声しか出でこない。

「病人です」

「ほつとけ、若いんだから勝手に治る」

「ぐるぐるー」

「Jの通り、包帯ぐるぐる巻きの重症患者でござります」

「あ？ もう処置済みだろそれ。だつたら廊下にでも転がしつけ。それとも壊れてんのは脳みそか？ だつたら専門外だ。脳と性病はJのじや治りん」

ひでや。Jのやり取りだけで、保健室の本質が垣間見える。

「とこいのはJに来る口実で、茜先生にお願いがあつて来たのです」

「断る。あたしは今プリン食うのに忙しいんだ」

「すげえ、美緒が問答無用で断られるところなんて初めて見た。しかも、プリンを食つて手間で断られている。何でプリンなんだ？ 似合わないな」

「プリンほどの食いもんは他にねえだろ。幸せはプリンでありプリンは幸せである、だよ。プリンのためならダークサイドに落ちてもかまわん」

心配すんな、もう落ちてる。

と、そんな浜のプリン至上主義の演説などさりと無視した美緒も負けてはいない。

「我が部の顧問になつてもらいたい」

自分の主張を貫くだけの者同士の会話なんて、こんなもんだわな。

「断るつつただろ……なに？ 顧問？」

安物の事務椅子をギシギシいわせながら振り返る姿は、どことなく先日の美緒を想起させる。傍若無人な輩というのには、仕草が似る

ものなのか。

「ええ、顧問です。我が部の顧問を担えるのは厚顔無恥にして傍若無人、唯我独尊の浜先生以外にないと結論に至ったわけです」「ほう、それで人が首を縦に振ると思ってるあたりがすごいな。天

王寺美緒

「私をご存じとは見上げたものです。まあ、この契約書にサインを」「断る」

「だろうな。そのつもりだつた人間でさえ返答を変えるレベルだ。これをマジでやつてているんだとしたら、ある意味で天才だ。

「何故ですか？」

「何故です、つてお前に聞きたいわ。

「私は忙しい。ただでさえ面倒な事務作業に無駄な職員会議、果ては怪我をしたバカの面倒まで見ねばならん。そんな中で部活動などに時間を割くなんて、面倒だろう」

たぶん本音は最後の一言なんだるつな。ここまで露骨にめんどくさそうな顔をする大人もどうかと思うが、その分ストレートでわかりやすい。曖昧に茶を濁されるより、いくらかすつきりする。

「さあ帰つた帰つた。私は忙しい」

取りつく島もない、つてのはまさにこのことだな。顔はこっちを向いているのに、話を聞く気なんてさらさらないのが丸わかりだ。にしても、ここまで邪険にされるつてのも解せない。なんて思つていると、それまで黙つていたカナメが不意に口を開いた。

「シュー、攻撃

「ええー！」

「ナイスだ、カナメ君！ それでこそ超科学部員だよ」

なんだそれ？ 何で攻撃？ そして何で勝手に動く俺の腕。これじゃあまるで握った拳を浜に叩きつけようとしてるみたいじゃないか。やめろ、俺の意志じゃない。

「いい度胸だ。要求を呑まねば実力行使とは、その意氣だけは認めてやるう。けど」

「いいいいや、ちちち、ちが、ちが」

「そうか、血が見たいか。望むところだ」

振り上げられる俺の拳、逃げたいのに逃げられない俺の体、迫りくる浜の鉄拳。おい、何で保健室にメリケンサックがあるんだああああああ。

黒幕？ もしかして

「な、見られただろ？」「

「鼻血が、止まりません」

しかも、何で俺の鼻血を俺が掃除させられてんだ？

「まあ意気込みはわかつたんだが、何故私なんだ？ 他に教員がないにしても、私には言いにこんだらう、普通」

「じ自分がことがよくわかつていらつしゃるようだが、だからと言つてメリケンサックでカウンターはひでえぞ。いくらなんでも。

「見ての通り、我々の目標は彼女を立派な魔王として育成することです」

うん。どじをどう見ても、見ての通りにこはつながらないな。

「そこで、魔王を地でいく存在ならば顧問としては申し分ないと考えたのです」

「さりと失礼だぞ、天王寺」

「とじうわけで、お願ひします」

物言いはいつものソレだが、俺達としゃべっているときにはない真摯さが垣間見える。こいつはこいつで本気なんだろうな。自分の目標つてこともあるだらうけど、吹水のことを考えてこるのも事実なんだろう。そもそもなれば、ここまではしないはずだ、こいつの性格なら。だつたら、

「俺からぼ、おでがいしばす。せひ、超科学部どじほんでい」「

鼻にポツチを詰めているせいぢぢゃんと発音できない。うわあ、情けねえ。

「しかしなあ、魔王だ魔法だと俄かには信じがたいな。何でもやつてみることは大事だらうけど、さすがに部としての体裁を保つのであればそれなりに筋の通つた活動趣旨が必要だらう」

痛いところを突かれる。たしかに、そもそも魔法という概念そのものが世界の常識にないところに、魔王ときたもんだ。お遊び仲良

しサークルの電波満載活動にしか見えない。そうなれば、部活としての認定そのものが難しいだろう。いくら科学部が前身の実験活動といつても、限度がある。

その上で少なくとも、目の前的人物だけは納得させなければならない。難易度高いな。

「なーなー、うち思うんだけどさ、魔王の魔力での科学部とかいう連中をぶっ飛ばした方が早くないか？ なんかめんじくさくなつてきたよ」

「黙れウサギ。あのな、それだと解決にならんとひきも」

「いやあ～～ん、かつわいいい～ん」

「～～え？」

誰の口からともなく漏れた音は、例外なく目の前の光景が異常事態であることを告げている。ナイアガラや美緒でさえもがそうなんだから、間違いないだろう。

「きやう～、しゃべるうさん、うさん～ん。もういい、魔法でいい魔王でもいい、うさんたんがしゃべるんなら先生何でも許しちゃう、きやる～ん」

「ちょ、放せよな。くるし、くるしい！ 抱くな！ モコモコすんな、くすぐつたい！」

「いやあん、も～も～あかねちゃんモフモフだいしゅき、しゅき～ん。魔法さいこ～ん」

誰からともなくその光景から目をそらす。やうじてやるのが優しさなんだと。

「ちょっと、助けろよな。シュー、杏子！」

がんばれうさぎ、お前の存在でこの人が魔法の存在を肯定するんだ。耐えろ。

いつもの自分に重ねながら、人身御供ならぬウサ身御供と化したモモを見つめておく。犠牲になつたやつの姿を目に焼き付けておくのが、せめてもの礼儀つてもんだろう。

「とさに、魔王というのが出来上がつてしまつのはどうなんだ？」

私の知る限りで、魔王が現れると大体世界は滅びないか？ ゲームなんかだとたいていそうだろ？」「

たっぷり十分は喋るウサギを堪能した後に、そんなキリッとした顔しててももう遅い。あなたの胸元でぐつたりと疲れ切っているモモがその証拠だからな。

しかし、あのでれでれの後とは思えない、ズバリ鋭いご質問。俺もそれは気になるところなんだが、誰か明確に応えられるんだろうか？

「だいじょーぶじやねえの？ 魔王から世界滅びろオーラが垂れ流しなわけでもないだろ？ ま、魔王になつた影響で精神的な変化が現れちゃつたら話は別だけどよ」

「うさぎ、投げやりすぎる説明だぞ。

「と、いうわけで、安全です」

「は、はい。頑張つて、いい魔王になりますから」

「なんとすれば美緒様の魔法で魔界に送つてしまえばよろしくござります。人界に危険はございません」

なんだかもう、收拾がつかなくなつてるんだが……いい魔王つて何だよ。

「ふん……半信半疑ではあるが、面白そうだな。私に立ち向かつてくる生徒なんて今まで一人もいなかつたしな、その意氣に免じてハンコを押してやろう」

「うそつけ、喋るうさぎにやられただけのくせに。

「ありがとう、魔王」

「急にハンコを押したくなくなつてきただぞ」

「美緒、余計なことを言つな」

とか何とか言いながら、部活動申請用紙の顧問の欄にきつちり署名捺印をくれるんだから、ありがたい。あとはこれを生徒会に提出すれば万事オッケーってわけだ。

いや、もつと大きな問題を据え置きにしているのはわかってるんだ。あるだろ、現実から目をそらすために、目の前の小さなことに

集中するつて。テスト前の部屋掃除みたいなもんだよ。

「でもまあ、これで一段落ついたわけだな。よかつたな、委員長」「う、うん。あ、ありが、とい。これで私も、もっともっと強く、なれる。」

必死に言葉を探しながらの、オドオドとした態度はまだ魔王には程遠いが、俺としてはこのまんまでいいんじゃないかと思ひつていうか、これ以上俺の周りに魔王的な奴が増えていくと、命にかかるわる。美緒とナイアガラだけでも十分だったのに、顧問まで魔王だ。おかんは……考えなによつてよつ。

「あ、あと、ね。さつきの、あれ」

あれつて、どれだ？ 何を言われるのか気が気がではない。まさか、数々の変態的所業に愛想を尽かされてしまったのだろうか まづい、それはまづい！

「い、いや、さつきのあれはなんていうか、その」

「ほ、僕のために、先生に飛びかかっていった、の。びっくりしたけど、嬉しかった」

やばい、上田づかいで何かドキドキしてるや。静まれ、静まれ俺のコペペー！

「ん」

「うつこつときは必要以上に喋るとぼろが出来る。こしても何だ、今のは。確かにおどおどした感じが可愛いとは思ひづが、この距離がこんなにやばいとは想定外だ。

「ん、ああ。俺もびっくりだ」

俺の意志じゃないんでほんとにびっくりだつたけどな。まだ心臓バクバク言つてる。しかもたぶん、このバクバクはその驚きだけじゃない。

「イラつとくるほど青春してるとこ申し訳ないんだが、あと一つ気になることがある」

メリケンサックをもてあそびながら話す白衣の養護教師。新手の戦闘漫畫に出てきそうな光景だが、反対側の手がずつとつさきを撫

でているせいで当初ほど恐さはない。

「魔王ということは、やっぱアレも出てくるんじゃないのか？」

「アレ、と言つと？」

「あれだよ、ほら、RPGなんかだと必ず魔王とセシトで出てくる
ああ、そう言われば考えなかつたわけじゃないけど、確かにそ
うだよな。普通ワンセシトだよな。アレ。でもな、敢えて言わなか
つたんだよ。

「勇者だね！ 私としたことがうつかりしていた。そつだ、勇者を
倒してこの魔王だ」

あ～あ、じうなるのわかつてたから黙つてたのに。火がつこちや
つたやつがいるよ。どうすんだよめんどくさいな。

もちろんこの直後に発せられた勅命が、俺を平穏な日常からさら
に遠ざけたんだが、そんなもんはもう返つてこないと思つた方がい
つてことか？ どうなんだ、神様？

「おこー！ どうこう」とだ、言われたとおりにやつたのに部室が返
つてこなかつたぞ」

「おかしいじやないか、また部室で好き勝手できる上にあの天王寺
に一泡吹かせられるつて話だつただろ？ 話が違う」

「まあ予想外だつたけど、どうするの？ 科学部の活動、部室ない
とできないよね？」

放課後の空き教室。グラウンドから聞こえる運動部の掛け声は、
どこか別の世界の音のようだ。埃っぽさと生乾きの雑巾のにおいが
鼻をつく。

一か所に集まつた新科学部三人組は、机を取り囲むようにして声
を荒らげてゐる。その声の向けられた先に、一人の男子生徒が鬱陶
しそうに眉をひそめて座つてゐる。

「おい、聞いてるのか？」

その一言に、それまで無言を貫いてきた男子生徒のこめかみがひ
きつるよに痙攣する。かれこれ十五分、下手に出るのにも限界が

あるといった風体だ。

「聞いてるからこんな顔してるんだろ？ 自分たちの役に立たないつぶりを棚に上げて俺に文句言つって、どんだけ使えないんだよ」人睨みで三人を閉口させる眼光の鋭さは、美緒やナイアガラにも引けを取らない。

さらに男は眉間のしわを深めながら続けるが、その口ぶりに遠慮会釈はない。それどころか、相手を切りつける刃物のような残虐さえうかがえる。顔立ちはどこか柔軟な雰囲気をまとっているので、そのギャップが口ぶりのえげつなさを際立たせている。

「も～、俺だつて暇じゃないんだからな、勘弁してくれよな～」

気さくな言葉の中に、露骨なほどの棘。しかも向けられた本人でなければ気づけないような巧妙さで隠されたそれは、ピンポイントで相手の心を抉る。しかも、無意識に。

「とりあえず、もういいから適当に部室探しなよ。もう俺はばいじう言わないし。ごめんね、あれこれ口出しして」

「いや、そんな」

「なに？ まだなんかある？」

実際に朗らかな笑顔。教科書や予備校のポスターあたりに採用されそうな百点満点の笑みだが、その内実を知る者には刃物を首筋に突き付けられているに等しい。

「あ、いや、そういうことじやなくってね」

「も～、織手君なら大丈夫かなて思つたのに、痛いなあ。やっぱ天王寺は難攻不落かあ」

「そんな、なんていうか、その」

「ま、仕方ないって。俺だつてビビるもん、あんな怖い人」

「でもね」そう言って男、続ける。

「そもそも言つてられないんだよねー。世界のためなんだつてさ」

ふざけた物言いのくせに、男の眼はその瞬間だけは、笑つていなかつた。

「世界つて何だよ。マジで救うのかよ、副会長～」

小馬鹿にしたよつた口調とは裏腹に、その眼光には氣弱そつた色彩がゆらゆらと揺らめいて、やらざれでいる感がたつぱりあふれ出でている。

生徒会長、桑戸仁。

誰もがある程度の尊敬と、「あそこにあるのが自分じゃなくて鬼かつた」という思いを込めて、こう呼ぶ。

副会長の犬、と。

「今、なんつった？」

「よく聞こえなかつたが、重大発表だつたように思つよ
といつわけでリクエスト。ワンモアタイムだ。

「あ、あのね。昨日からね、魔法、使えるように、なつた
「へえ」

うん。今日の卵焼きはいつになく美味だ。あの鬼のようなおかん
も伊達や醉狂で喫茶店経営をしているわけではない。若いころは手
当たりしだい料理で道場破りをやつたとかいつてたが、あの女なら
あり得る話だ。

「シユウラー、卵焼き落としたあ

「あのな、何でもかんでも落としたもんを俺に食わせるな。大丈夫
だ、三秒ルールだ」

「はい」

はいはい、結局食うのは俺ですよ。

「何故そんな大事なことを昼休みまで黙つていたのかね！ 授業な
んかに出ている場合ではない。シユータロー、我々は午後から休講
だ！」

んな訳あるか、大学じゃあるまいし。高校生の自主休講なんて、
それこそ俺の場合は命の危機に直結だからパスだ。否定の意味合い
を込めて無言の視線をくれてやる。

「み、美緒、声おつきいよ」

「カナメ君、来たまえ。部室でラムネを飲もう」

「うん」

「おらあ！ なにこするいことやつてんだてめえ！」

しかもラムネごとに釣られてのこのこついて行かないでくれよ
な、神様。何故だかこいつは人間の世界の駄菓子やらジャンクフー
ドやらが好きらしい。先日など、一銭焼きを与えたらどび跳ねて喜

んだんだから、安上がりだよな。

「何を言つてゐるんだね。私は力ナメ君を誘つただけだよ。それとも君は、彼女とひと時も離れたくないよつた心情を胸に秘めているのかね？」

「ひゅーひゅー、お熱いさー。唐揚げもーらい」

「てめえ、何どさくわでラス一食つてんだ！ だいたいなあ……うつ」

何だこの筋筋に直接ブリザードを吹き付けられたような寒氣は。体よりも、むしろ魂の方が凍りつくよつた冷たさは初めての体験だつたが、直後にその正体が判明する。

殺意。

窓ガラスの向こう、廊下を挟んだはるか彼方からこちらに向けられてゐるのは、間違ひなくナイアガラの視線。視力ではなく、体が神気になつたせいでやたらと気配の類に敏感になつた俺が感じじるようになつた、ありがたくないものの一つだ。

「！」この話題は封印しよう。精神衛生上よろしくない

「何ぞ？」シューが力ナメちゃんにぞつこんつてのはもう

「だから！ うああ、内臓を抉るこの不快な感触はあああ

「せ、千古君は、そうなの？ 力ナメちゃんみたいな子が、こ、好み？」

『うお！ 何だこの殺意のオーラ。自分に向けられてるんじゃないのに、こっちまで鳥肌立つてるぞ』

『わきのくせに鳥肌たつのかよ。

「ともかくだ！ くすぶつてゐる時間が一秒でも惜しい！ 急がな
いか！」

とんでもない量の弁当を恐るべき勢いでかつ込む姿は、テレビで見る大食いチャンピオンそのものだ。あの細い体のどこにそんだけの飯が入るのか、納得いかない。四次元胃袋を搭載しているとしか考えられない。広辞苑サイズの弁当箱つて、おかしいだろ。

「さあ、早く部室で」

「あ、ちょっと美緒。僕まだご飯が途中で」

「そんなものは部室で食いたまえ。魔法が先だよ、魔王君！」

かわいそうに。左手でギリギリランチパックを一つ捕まえられた
ようだが、残された蒸しパンとパックの牛乳が不憫だ。あとで届け
てやろう。つていうか、結局部室行かなきゃなんだよな、はあ。

「なんていうか、お前ら、毎日が全力さね」

俺の唐揚げを咀嚼する根隅のほっぺたを無意味にぐにぐにと押し
てやるが、男同士でほっぺたを触るという異常なまでのむなしい行
為にすぐに心が折れた。

「ギリギリ、とも言つけどな」

残りの弁当をかつ込みながら、ようやく訪れた束の間の平穏を噛
みしめる。美緒がいないだけで教室は春風のような穏やかな空気に
包まれ、光の粒子さえふわふわと宙を舞つていてるようだ。というか、
ん？ なんかきらきらしたものが本当に舞つてないか？

「どうしたさ？」

「どうしたって、お前。これ、見えないのか？」

「これって、何がさ？」

「何が、って……え？ めちゃキラキラして……え？」

きょとんとしている根隅。マジで見えないのか？ 蛍みたいな光
の粒が、こんなにも教室に充满してていうの。何なら理科の
教科書に出てくる天の川みたいになつてる場所まであるつていう
に。

「何言つてるや？ どうどうショウウまで脳内お花畠になつたぞ？」

確認のためにカナメを見ると、カナメはしっかりと光の粒子を目
で追つている。が、どうやら見えてるのは俺達一人だけのようで、
クラスの他のやつらはまるで見えていないらしい。それこそ会話を
している二人の間を光が横切つてもピクリとも反応しない。

しかも、よく見るとその光は人の体をすり抜けるようにして飛んで
いる。

ためしに指先でつまんでみると、ほわつとした綿毛のような感触

とともににはじけて消滅してしまつ。どうやら魔法的神的魔王的な物質だらうことが、想像された

「カナメ、聞いていいか。これ、何だかわかるか？」

面白生物を見るような眼で俺を見ている根隅はさておいて、俺はカナメに尋ねてみる。

「ん。神気みたいなものかなあ？ でも、ちょっと違う気もあるう。ねえ、知ってるう？」

『あ～？ ああ。こりや魔力だよ、魔力。うちらの力の源だけど、すげえなこの量。こんだけあればどんな魔法でも使いたい放題だな』 鞄からひょっこり顔を出したウサギは、クンクンと鼻を鳴らしているばかりか、時折口を開いてパクリと宙に舞う光の粒子を食べては舌なめずりをしている。

『食うのかよ』

『お前らだつて餌食つて体力補給するだろ？ こうやって直接食つても補給できるんだよ。にしても、こんなにも具現化した魔力がそこらじゅうに飛んでるなんて初めて見た』

『人間の世界では、つてことか？』

それにしてはあまりにもうきが物珍しそうだと思つていてると思案の定、

『うちらの世界でもこんな状態そうそつないよ。それこそ天の恵み状態だ』

魔界だか地獄だか知らんが、天の恵みつていう表現が適切だとは思えないが、まあそんなんだらう。どうにも最近、悪魔が身近で困る。

『たぶん、杏子だらうな』

『委員長が？』

「のわ、どうしたさいきなり？ お花畠のみならず脳内彼女と会話まで始めたさ？」

やべ、うつかり声に出しちまった。

「あー、いや、おう！ カナメ、食い終わつたか？ そしたらこの

パンと、おわあなんてこつたカバンまで忘れてるじゃないかー、ひどいなあ 美緒のやつもー」

『ぐく自然にリカバリー。忘れ物を哀れな吹水に届けてやる体裁を整えて、しかも鞄にこもづかぎまで回収するファインプレー。俺、グッジョブ。

めつちや憐れみの田で根隅に見られるなんて屈辱以外の何でもない。しかし、ここで話しているとこつまた口に出しちまうかもわからん。めんどくせえな、テレパシー。

「しゅうう、演技下手あ」

「うつせえ、とにかく脱出すりやなんだつていいんだよ」

『え？ アレ演技だつたのか？ てつきり氣が狂つたふりかどおキヤアアアアア』

全力で鞄をぶん回す。縦横斜めにふつとんでも無重力体験でもしゃがれ、うさ公。ああああ、どうせ俺は演技下手ですよ。中学の文化祭で全てのセリフをカットされた男だよ。

『ふあ、ふあう、ふあう、星が、ほしがまわるうるぬる』

よし。悪魔撃退。じゅなかつた。

「んで、さつきの話だけどよ、委員長とふわふわぴかぴかの魔力とどう関係があんだ？」

勢いで教室を飛び出し、あてもなく廊下を歩きながら鞄のなかのうさぎに尋ねる。

『ふうえええー。な、かんけいつて、そりやだつて杏子はまおーなんだからまつよぐぐりふりまくにあおつて、ふええええ、まわるう』

「あ、それでなんだあ。杏子のにおいだあ、これ」

匂いなんかすんのか？ くんかくんか……あ、いや、通りすがりの女子が俺をものすつ『ご』い変なもん見る田で見て、いや、違う、俺はそういう趣味ではなくああああ……

「シユウう、どうかしたのあ？」

『いや、忘れてくれ。今俺は大事な何かをたくさん失つた』

「ふぬ？」

「だらうな。お前にやわからんよ。お子様で、なおかつ神様なんて言つ純粹な心の持ち主には、穢れ始めた思春期男子のリビドーなんて。

にしても何が悲しこりて、あてもなく歩いてるはずなのに、俺の脚は吸い寄せられるように部室に向かうんだな。まあ、吹水の荷物を持って行つてやるんだから当たり前なんだが、それにしてもあまりにも自然に足が向いたのは悲しかつた。天王寺美緒政権の恐怖政治の影響なのは間違いない。

「ふわあ」「おおつー！」

扉を開けた瞬間に、田の前を何かが横切つた。あわや直撃コースのそれを震めるような紙一重で交わしたが、鼻つ面を捕らえたほのかな熱に顔をしかめる。何か、トカゲみたいな鳥みたいな生き物にも見えたが、はつきりとは分からぬ。

「で、お前らは何をやつとるんだ？」

第一声がため息とともにこぼれる。いや、ため息だけにならなかつたのは、褒めるべきところだぞ、これ。

「何つて、決まつてはいるではないか。魔法が使えるといつのだからやるべきは一つ、魔物の生成だよ」

「ナイアガラの希望としてはドラゴンが見とつぱりぞこます。架空の生物もえー、でござります」

まず、部室を開けるととんでもない量のピンク粒子が狭い室内にぎゅうぎゅう詰めになつていて。扉を開けたとたんに勢いよく噴き出すような魔力を部屋に溜めるな。

しかも、魔物を作るだと？

「あ、え、千古君は違うのが、いい？ 私、どんなのがいいのか、わからなくつて」

部屋の真ん中では、その魔力を粘土のよつこねながら何かを作つてゐる魔王の姿。興味津津にそれを覗き込んでは、邪悪なアドバイスをする悪魔の「」とき存在一人にはもう何を言つべくもないが、

手にした資料だけは奪い去つておいた。

「ああ、それがないと具体的なドラゴンのイメージが伝えられないではないか」

「伝えんでいいわ！　お前らは何だ？　世界を混沌の海に沈めたいのか？」

ゲームの攻略本の、モンスターのグラフィックが掲載されたページを閉じる。なんで本の後ろの方の、凶悪なモンスターばつかのページを開いてんだよ。

「でも、魔王はとにかく世界を征服するものだつて、美緒に言われて、そう言われれば、そう、かなつて」

「そう、かなつて……じゃないよモー。委員長ものせられるなよな。基本的にこいつらの言つことは聞き流さなきや」

「いい度胸だなシユータロー」

「じゃあお前の言つとおりにドラゴンだかキマイラだかが出来上がつた暁には何するつもりだつたんだよ？」

「決まり切つたことを。まずは一色市を混乱の渦に巻き込み、次は政府にかけしかけ」

「というわけだ。いい魔王になるんならこれはダメだろ？」

「うん……」

シュンとする吹水が、ある程度形になりかけていたピンクの光から手を離すと、ふわふわと宙に舞つて霧のように散つてしまつ。とりあえず世界の危機は去つたと思いたい。

世界の命運がこんな薄汚い小部屋にかかつてゐるなんて、正直解せない。

「にしてもすごいな、杏子。昨日の今日でこんなに濃度と純度の高い魔力が溢れるなんて、魔王の才能あつたのかも」

鞄からぴょこんと飛びだしたモモが、嬉しそうに魔力の粒に頭を押しつけたり、前足でつづいたりしてゐる。そのたびに光の粒がはじけて、キラキラと星のように散つてゆく。たしかに、純度はわからぬが濃度はすごいそうだ。目に見えるんだもんな。

「そう、かな？　でも、昨日のは失敗しかやつて、どこかに行つちやつたし」

ん？

「あとはこの調子で制御の訓練と、魔力のキャパシティを大きくしていけば魔王としては申し分なしだな」

「うん。何だか、実感があるって、嬉しい」

「でも、ちょっとここまでの才能は想定がいすぎるつーか、そのモモが何やらもごもごと口ごもつているが、結局何を言つてもなかつた。何だつたんだろうな？　聞きたいよつな、聞きたくないようだ。」

「さすがだね。我が部自慢の魔王だけはあるね、委員長君」

「あー、ちょっとよろしいか？」

おずおずと、給食費を盗んだのは僕です、ぐらぐらの申し訳なさを纏わせた右手を擧げると、実にめんどくさそうなナイアガラの視線に貫かれる。そういう田はコスプレしながらすると迫力が半減するぞ。今日はシンプルにワニのコスプレですね。ドラゴンが見たいって言つてたけど、そこにかかつてるんだらうか？

「仰つてみてください。場合によつては許可いたします」

逆だら普通。そのワニの尻尾はどうじつ理屈で動いてんだよ。お前、尻尾はえとらんかっただろ。

「さつき、昨日のは失敗してどつか行つた、とか聞こえたけど空耳だよな」

「何を言つているんだね、委員長君はちゃんとそういう言つてはいたではないか」

「で、わざは何やらモンスターのよつなものを作ろつとしてなかつたか？」

「まったくもつて節穴でござりますね（びたーんびたーん）魔物の精製以外の何にお見えになつたのでござりますか？」

ワニの口の部分から顔を出してるので、見ようによつてはワニに食われているよつに見えなくもないが、できればほんとに食われ

てくれないかな。願望を形にするべく、とりあえず口を閉じてひもで縛つておいた。

「もちろん、探し出してる、よな？」

きょろきょろして、今初めて気がつきましたみたいな視線をぐるりと巡らせている」様子だが、マジですか？ 誰に助けを求めても、この場所にまともな助けを提供できるような業者はありません。むしろ青少年の健全な育成からは程遠いやつの巣窟です。とくに、そこで楽しそうに魔力の粒をつついている金髪ロングの女なんかはもつてのほかだぞ。何だその、額に貼った紙切れは。キヨンシーごっこか？ 古いな。

「見たまえ。この魔法陣を額に貼ると魔力が見えるのだよ
そうですか。魔力になつちまえ。

「つまり、まだ野放し、と」

返事はないが、その慌てつぶりは首を縦に振られるよりわかりやすい。

「ちなみに、何を作ったのか、教えてくれるか？」

「気が進まないがやむを得ない。あー、胃が痛くなりそうだ。

「えと……」

もじもじ、もじもじ。いや、恥じらつ姿がそれらしいのはわかるし、眼鏡の奥でうるんだ瞳も女の子っぽいのだが、今は魔王様らしくしてくれ。

「ま……ま、じょ」

「へえ」

「初めてにしては上出来だつたよな。ちょいイメージと違つて物理攻撃重視だつたけど」

「へえ」

魔女つてモンスターだつたんだ。つていう以外に俺に何か期待しているとしたら大間違いだ。魔女が放し飼いになつてている町に魔王と神様がいて、神様の下僕の俺以外は例外なく非常識の極北を極めたようなやつらばかりだ。何が言える？ 強いて言うなら、

「何やつとんじゃー！」

「ひうう、『』、ごめん、なさい」

「だいたいなあ！ あぶつ」

胃がねじ切れるかと思うような衝撃が脳天まで突き抜けて、意識がそのまま頭のてっぺんから離脱する。部室を俯瞰する不思議な経験は、何だか心地よかつた。

ああ、俺、ワニにボディブロー食らつたんだ。道理で重いわけだよ。

「シユウタロー。人間だれしも失敗はつきものだ。大事なのはリカバリ」

「ぞ、それは、ぎいだ」

「ごふつ。血反吐でもはくかと思つたら、出たのはただの咳だけ。くそつ、吐血すればさすがにこの集団から抜けられ……ねえわな。『どつかで聞いたセリフだが、なら何でリカーバーに入つてないんだ』

「入つっていたではないか。今度こそ委員長君の思い描いた通りの魔王を」

「そつちじやねえよ！ リカバーの方向が直角に間違つてるよ！ 違つだろ普通！」

「まったく、何が不満だというのだね？ 君はこの超科学部の活動を加速させたいのか減速させたいのかどつちだね？」

「停止しろよ停止！」

「『ええ～』」

神様と魔王がそろつて「ええ～」つて言うな。

「力ナメ、お前は言つちゃダメだろ。特に」

「でも、そうしたら杏子は立派な魔王になれないんじやないの？」

魔王が大成するのはもはや神様公認つてことなのか？ まあそこは今更だからもう口をつぶる。というかつぶつってもはつきり見えるぐらい我らが超科学部は大魔王を作り上げる気満々だが、だからと言つてこの世をモンスターの跳梁跋扈する魔界に変えるわけには

いかんだろ。

むーむーもーじゅもー。

ワニが何か言いたそうだけど、うるさい。

「その魔女は勝手に消滅したりしないのか？」

「たぶんしねえな。きっかけこそ魔力による精製とはいえ、『えられたのは命だ。魔力を使いきりでもしない限りは消滅しないよ。今のあんたみたいにな』

うさぎの鼻がツイツと俺に向けられる。

今の俺のようこ、つてのはぐさりと来るものがあったが、今はそんなことを言つてる場合じゃないと心を奮い立たせる。ああ、俺の命……やっぱ奮い立たねえ。

「つて、てことは、今もその辺を逃げ回つてることか」

「たぶんな。突然生成されてびっくりしたんだが、慌てて飛び出して行つちまつた」

笑い話じやないんだが、まあ魔神のこいつに言つても実感なさそうだ。同類の生き物の存在そのものに疑問を持つて言つてみるより、なもんだもんな。

「しかし、まずくないか？」

「確かに一理あるな」

おお、思いもよらないところから良識たっぷりの声が上がった。美緒、お前にそんなまともな思考回路が搭載されているなんて想像もしなかつた俺を許してくれ。

「魔女を一刻も早く捕まえ、我らのしもべとするべきだったな。その点に思ひ至らなかつたとは、少々気がはやつていたということか。自重せねばな」

はい。想像どおりでした。やっぱり、搭載されてませんでした。

それでも、

「とりあえず、探した後のことば後んなつてから考えよ。そうしよう。うん」

こんなにも未来を夢見ない高校生に、俺はいつからなつたんだろ

うな。」めんな、中学生ときの俺。夢も希望もなくしたかもしけん。
最初からあつたかどうか怪しいが。

「これで、十五日、と」
体育倉庫の裏手。ほぼ朽ち果てたサッカーゴールのネットに絡まるようにして身動きが取れなくなっているそいつをつまみあげる。そいつが「何なのか」と尋ねられると、俺は即答で「何だろうね」と答える。だつてわかんねえんだもん、こんな生き物。つてか、これ本当に生き物なのか？

「これなにい？」

「なんだろうな」

はい、宣言通りの会話、つてわけだ。

にしても、カナメの疑問ももつともだ。なんせ、一足歩行するネズミに蝙蝠の羽が生えている、としか言こようがないんだからな。

「んじや、よろしくな」

「あ、うん」

その「何か」を吹水に放つてよしすと、そいつはさしたる抵抗も見せず、吹水の掌の上に着地し、そのまますうっと姿を消してしまう。あとに残るのは、指の隙間からこぼれるようにして落ちる淡いピンクの光、魔力だけだ。

俺の指先にはじわじわとしびれるような感触が残されているが、俺の体を構成する神氣と、吹水の作りだした魔力がぶつかっているからだ。魔力と神氣というのは相反するエネルギーらしく、お互いをぶつけると対消滅してしまうとのことだ。その辺はなんとなく、納得できる気がする。RPGの光と闇の属性みたいなもんだな。

「何回見ても不思議だよな。ちゃんとつまめるのにな」

言つて指先をこすり合わせるように動かしてみると、まだそこには生き物の体独特的の温度や体毛の感触がふんわりと残っている。

「あんまりおつきいのとぶつかると、シユウの存在 자체が消えちゃうんだよ」

さらりと恐ろしいことを言わないでください。

「使い魔、なんだって。ぼ、僕の、魔力に引かれて、魔力そのものが形になるって」

だから、吹水の指先一つでそいつは魔力へと還元されてしまう、ということらしい。

しかも、そいつらのイメージが妙にほわほわとかわいらしくなるのは、吹水の中にある生物のイメージが影響しているらしいというのだから、手に負えない。先ほどのやつも、ネズミというよりハムスターに近い感じだ。魔族をあんなにかわいく作られてもな。

もとが魔力なので、魔力の見える者にしか見えないのが救いだつた。こんなもんが誰かれ構わず見えたら、大騒ぎ間違いなしだろう。「こんな小物追っかけてる場合じゃない気もするけど

「でも、美緒が来るまで待つてろ、つて」

美緒は今この場所にはいない。なんて平和なんだ。これほどの平和がいまだかつてあつただろうか。まあ、あつたっちゃあつたが、最近の記憶の中にはない。

ただ、いないからといって心が平穏を保っているかといわれるとそれもまたそういうわけではない。何せ今、美緒のやつは戦闘まつただ中だろうからな。

敵の名を、生徒会会計という。

実に事務的な話だが、美緒が科学部ではなく「超科学部」なる組織を立ち上げた際に、生徒会としては新組織の発足という体裁になつたのだという。それはつまり、科学部としての実績を引き継いだ組織ではなく、全くまつさらな組織だということだ。

まあ素晴らしい。真っ白なキャンバスに七色の絵の具で夢という名の俺達だけの物語を描こう、なんて夢いっぱい希望いっぱいの甘酸っぱい話ではない。

予算。

この一文字が大きくのしかつからてくるわけである。腐つても科学部は長年の歴史を持つそれなりの部活動であり、それなりの予算

は確保されていた。しかし、超科学部は何の実績もないうえにボツと出の一年生だけの部活動だ。となれば、予算の審査は相当に厳しくなると考えるのが妥当だ。そのため、さすがの美緒も予算会議への出席を余儀なくされている、というわけだ。

「あいつ、すげえよな。金属バット持つて乗り込んで来たもんな」三十分ほど前の話である。突然部室の扉が開いたかと思うと、そこに現れたのはえらく小柄な女子生徒。それこそカナメと比べても遜色のないコンパクトボディは、やはり制服のサイズがないのか、だばだばのカーディガンを着ていたのが印象的だ。

そのちびっこがいきなり、金属バットを振りかざしながらぼそりと呟いた。

「天王寺美緒、部費横領とはいいで胸だ」

「私の部に宣戦布告とはいいで胸だね。木安春」

そして幕を開ける、第一回物騒な棒きれ王者決定トーナメント決勝戦。金属バット vs バールの火ぶたが切つて落とされたわけだが、教室に響き渡る、金属同士がぶつかる衝撃音というのを思い出しても悪寒が走る。

「すごかつた、ねえ」

「ああ」

「すごいなんてもんじゃない。怒号の合間に響く金属音。それを食らいつくすように口を開いて言いたいことを言い合つ両者。纏めればたつたの一行「科学部時代の部費を返納しろ。新たな部として部費を申請しろ」で終わる話なのに、何故か延々五分以上も互いの武器を叩きつけ合つた。たぶん、底知れない私怨があるんだろうが、首を突つ込むような馬鹿はやらない。俺だつて成長するんだ。

というわけで、魔女探しは一時中断。俺達は校内をぶらつきながら細かい魔力生命をつまみ上げては魔力に返すという、地道な作業に没頭しているわけだ。モモ曰く、たぶん大丈夫だけど念のため、だそうだ。魔王の魔力ってのはそれほど影響力があるとかなんとか。いよいよ魔界じみてきたぞ。

「ぶちょうは、大変、だね」

今なお絶賛魔力生産中の吹水が、眼鏡にピンク色の光を灯して話している。その間にもまた一匹。今度はまんまハムスターだけちよつと尻尾が長いかな、という生き物が吹水につまみ上げられて光になる。十一匹。

「もうちよつと僕が、魔力を制御できれば、あんまり生まれないらしいんだ。」めんね

申し訳なさそうに言う。

「ま、しゃーねえって。魔王になつてまだ何日もたつてねえんだし、慣れればいいさ」

「う、うん。あり、がと」

魔王になつて、か。しかし、お願ひすれば魔王に慣れてしまつ世界だつたなんてちょっと驚きだ。ナイアガラではないが、この世にチートがあるなんて複雑な気分だ。

とはいひが、こつちはこつちで一向に人間に戻る手段を探せそうにもないし、かといって神の使いとして何かができるかといえば、ただ死はないだけという消極的な能力だ。

「でも、たとえばなんだけよ、魔物の類つて委員長がやつてるみたいに魔力に還すんじゃなくつて、戦つてやつづけても魔力に戻るのか？」

「あ、え？ どう、なんだう？」

「たぶん、消滅すると思う」

意外なところからの回答だが、まあカナメが知つてもおかしくはないか。

試してみるよろに、俺は手近にふわふわと綿毛のよに浮かぶ魔力の粒を手にとつて指先で強めにつまんでみると、はじけて消えた。キラキラと光る粒子がゆつくりと薄れて消えていく様に、なんとか見とれてしまう。

「そういうこと、だよう」

「ふーん……体が魔力でできるから、やつつけると消滅、か……

そういうや、俺の体もそうだつてナイアガラが言つてたな。神氣、だけつけ？ が空っぽになると消えるんだろ」

「うん。でもシユウは大丈夫だよう。あたしがちゃんと補充するよ

う

「そりやどーも。こりや ますます人間離れだな」

「も、もし、僕の力でもいいなら、ぼ、僕が補充

「ん？」

「なな、な、なんでも、ない」

なんだろな？ 神様と魔王から心配される不死身の肉体つてのは。「ちょっとトイレ。先帰つて……はもらえないな。カナメ、ちょっと待つてくれ」

「コクンと首を振るカナメ。ふにふにと魔力の粒を指先で弄ぶのがら樂しいらしい。

「にしても、トイレ一つ行くにもカナメとの距離考えるつて、やっぱ不便だよな」

もう慣れてはきたが、ふとした瞬間に感じる不便さが自分の立場を再確認させる。

カナメと吹水を残した俺は手近な扉から校舎に入つて、最寄りのトイレを探索。昼下がりの廊下の冷氣に強まつた尿意を全力で抑え込む。なかなかのイメージョンシーだ。

「それじゃもうちょっとウロウロして、我らが部長様の帰りを部室で待つか……ん？」

「というわけにもいかなさそうだな。さて、どうするかな。

面倒な選択はしたくないんだけど……はてさて、どうしたものかね。

とはいっても、目の前に現れた『尿意とは別のイメージョンシー』は、どうやら俺の人生をからめ捕る気満々の『様子だ』。

考えながら歩くつていうのはどうにも性に合わない。だから考えずに歩く。そうすれば目の前の事態を解決する神の啓示が空から降つてくるとでも思つてゐるようだ。

なさそうだな。神様すぐそこにいるもんな。

「はあ……まあ、第一発見者が俺なのが、せめてもの救い、か」とりあえず、トイレだけ済ませよう。ちよつとぐらうい現実逃避してもいいだろ。

「ねえ副会長、マジでやんの？ いくら何でもやりすぎじゃないかな？」

「何言つてんだ！ 僕たちが満貫寺の秩序と平和を守らないでだれが守るんだよ？」

「そろはいつも俺達ただの生徒会だぜ？」

ギロリと、瞳に危ない光がともる。言つた瞬間に、自分の一言が致命的だったことに気がつくが時すでに遅しだ。

「ただのって、そんな覚悟で会長やつてるとか、信じらんねえ！ 生徒会長たるもの」

「わーかつた、わかつたから腕ひじぎ十字はといてくれ。痛い、もげる」

スカートの裾からこぼれる細い太ももは体脂肪などといつものとは縁がなさそうなほどにほつそりとしている。にもかかわらず、技の完成度は抜群だ。身長差を補つて余りある破壊力に、会長、こと桑戸仁は苦悶の表情を浮かべている。

「まあまあ、暴力はよくないですよ～……会計……さん」

「いい加減名前覚えろよな、あーちゃんも。俺の名前は木安、木安春だよ。も～、一ヶ月以上一緒に生徒会やつてるだろ？」

腕ひじぎのまま首だけを起こして声のする方を向くと、そこには等身大のビスクドールが椅子に座つていて。と、初めて見た人間ならだれでもそう思うだろうが、ところがどつこい立派に生きている。ただ、こんなところにゴシックローラー衣装が座つていれば誰だつて人形かそれに類する何かだと思つてしかるべきだ。

ただしそのゴスロリ衣装、確かにひらひらふりふりで、レースの装飾や所々花をあしらつたワンポイント、果てはエンボスの細かい刺繡なども施されてはいるがよく見ると実はこれ、制服である。原形をどぎめとはいひないが、改造制服のなれの果てだ。というか、こ

「までも来ると制服つぽさが微かにする」「スロリ衣装でしかない。

「あはは、あは～、ですねえ。どうも人の名前を覚えるのは苦手です」

「つたく、これで勇者だつてんだからな。おい、仁も何とか言えよな、おい」

「あのねえ、春ちゃんはもうちょっとこの女らしくした方がいいと思うんだよね。こんな関節技で屈服させるんじゃなくて女の色香で」

「ああん？ 関節が増える関節技かけつぞこら？」

「増えかけたけどね」

生徒会室の長机の上には各種お菓子にチョコレートが並べられているが、おもに副会長である四夜明日菜のカロリーに消える運命のものだ。仁はそもそも甘いものは好まないし、春は菓子など食うなら米を食べという、日本の農家が聞いたら泣いて喜んで米の一俵や一俵ぐらい寄付されそうな主義主張の持ち主だ。というわけで、部屋の片隅では炊飯器が絶賛水蒸気噴出中だ。

「でもね、ちゃんとやらないとこの世界が魔物でいっぱいになっちゃうですよ」

きのことタケノ「どっちにすべきかを真剣に悩みながら、明日菜が呟いた。これだけを聞けば頭が宇宙からの電波を受信して邪氣眼か中二病でも発症したのだろうと考えるのが妥当だが、そういうわけでもないらしい。

それが証拠に、空いた方の手でピンク色のふわふわした光をつまんで握りつぶすと、螢のような光はパツとはじけて消滅する。杏子の生み出した魔力を消滅させたというわけだ。はつきりとその光が見えているのは、他の二人も同じらしい。

「不つ思議だよな。ある口突然だもんな。びっくりしたわ、朝いきなり会議で「魔王を倒さないと世界が闇に包まれるです」だつけるあーちゃんぶつ壊れたと思つたわ」

炊飯器の焼きあがりまでのカウントダウンに目をキラキラさせる春の意識は、八割が米一割が会話といったところか。

「たしかに、これで例のわけわからん夢見てなきや、俺達も信じなかつたよ」

「嘘つけ、おめえは何があつても明日菜の味方のくせに」

「な、何言つてんだよ！ そ、そ、そ」

わかりやすい青春の構図だが、例にもれず仁の行動の意図するとこに明日菜は気が付いていない。味方がいるのはうれしいな、程度だ。それを底意地悪くほくそ笑みながら眺める春、というのがこの三人の定番だ。

「んだけどよ、マジで摩訶不思議だよな。三人そろつておんじ夢見るなんてよ。しかも勇者のお告げだもんな。どこの宗教だよって思つたし」

「だから、ちやんとやるです。きっと魔王ははこの学校にいるです。そう勇者の勘が告げてるです」

「おー、出たぞあーちゃんの『勇者の勘』が。これのおかげで俺たちめつちゃ 大変だつたつーの。科学部が怪しいとか何とかいうから解散させてみたら全然関係ねーし」

「あの人達には悪いことしたね。部室も天王寺さんに乗つ取られちやつて使えないみたいだし。の人、いろいろ問題起こすからついでに大人しくさせたかつたんだけどなあ

「つづーか、あいつが大魔王みたいなやつだよな。それだつたら納得できんだけどなー。マジで違うのかよ？」

炊きあがりまでの残り時間が三分を切つた炊飯器は、春の田には宝箱のように見えていることだろう。しかし、美緒の話のときだけはそれも一時中断、手近に転がしてあつた金属バットに手がのびる。所々に見られるくこみは、先日の激闘の名残だ。

「うん。あの人からは特に魔力は感じないです。邪悪ではあるですけどね」

「それ、『冗談に聞こえないから』

「ま、あいつはそのうち俺が狩る。世界の平和だの魔王だのは俺にはピンとこねえけど、あいつはのそばらせちゃおかねえ。生徒会会

計の如のもとに」

「はいはい、バットかまえない。あ、炊けてるよ」

「うひょっ！ おひにじゅつ、おひにじゅつ。何はなくとも具はなくとも～」

凄まじい手際でおにぎりの量産体制に入る春。女子高生が一升炊きの炊飯器を抱える姿というは何やら倒錯的なエロティシズムを感じないでもないが、色気はない。

糖分が胸に貯蔵されているとしか思えない明日菜に対して、春は食つた分がどこかに消えているとしか思えないシルエットだ。『次元の狭間』の一つ名はだてではない。

「で、具体的に俺達もパトロールの強化、つてわけ？」

足元に現れた謎の生物を一瞥もせずに踏み潰して、光へと変える。ネズミや小鳥のような、どこか愛嬌を感じる姿をしているだけに、見てしまつと倒すのが忍びないようだ。

「そうです。ここ数日、魔力が強まつてきてるですから、もしかしたら何があるかもと、勇者の勘が言つてゐるですよ」

「いーんなにかわいいのにな」

床に座り込み、両手ではおにぎりを作りながら、足の指で器用に別の謎生物をつまみあげる。おかげでスカートはめくれあがつて中身が御開帳されているが、本人はさほど気にしないらしい。

「でも魔物です。心を鬼にすることも、勇者には必要なのです」

「まあ、ドラクロのモンスターもかわいいつて戦えなきゃやられるもんな」

「むぐもぐもぐもぐむぐむぐぬぐぐぐぐ」

「食つてからでいいぞ」

「じつくん。

「まあな。かわいいからつてタヌキをやつつけないと野菜も食い荒らされるもんな」

喻えとしてはどうかと思いながら、大筋でははずれではないと判断して仁も同意する。ただ、この時の仁の注意のほどなどは、驚く

べき速度で消費されてゆく白米おにぎりに集中している。半端とい
か思えない。「消えた」という表現が驚くほどじつじつくる。

「というわけです。頑張るです、会長」

「え？ 僕え？ なんか今回俺ばつか活動して

「やつてくれる、ですよね？」

きのことタケノコを両方消費しきった手が、ポツキーに伸びかけたところでふと止まり、静かな視線が仁に向かられる。

どこまでも無邪氣で、まっすぐで、絵にかけば星やシャボンのエフェクトを何重にもかけなければいけないような瞳は、それだけで勇者の素養を物語っているようだ。ちょっとうつりで焦点があつてない感じは決して眠いからではない。こういう田なのだ。

「ん、あー、だな。ん~」

「素直に言えよな、俺に任せとけ、って。ビーセ断らねえもぐもぐもぐもぐ」

「つるさいな。黙つて食つてる」

「（うつくん）だから口にもの入つてる間は喋つてねーだろ」「

「だからつてもの言いたそつて、何かを伝えたそつてするなよ。さ

っぱりわからん」

「つたく、乙女心の一つも読めねえで何が会長だよ。つたく

「お前らは会長をなんだと思つてる」「

「雑用係」「実働部隊？」です

「よくわかつたよありがと」

鼻で笑いながらまんざらでもなさそつなのは、Mだからだ。本人に自覚がないのは唯一の救いだろう。

「なので、今日からはパトロールです。縦一列で、魔物退治です」

「うーー」

「じゃあとりあえず」

甘いものがぶちまけられた机の上に「が広げたのは数枚の「ペーパー

用紙。

生徒会への「意見」を要望を投書形式で受け付けるところ、Mの

学校にもありがちな企画だが、ここ満貫寺も例外ではない。ただ他と違つて、今年の生徒会のすこいところはその実行力にあつた。

投書した「意見」の要望へのレスポンスはほぼ百パーセントという驚異的な数字を叩き出してこゐるのだ。これはひとえに、副会長である明日菜の「やつてあげるです」の一言に逆らえない「おかげなわけだが、そこに青春の甘酸っぱさはない」。

それでも結果だけをみればきちんと実行する生徒会と「う」とことなるわけで、今田も今田とて生徒の個人的な恨みつらみから、部活動の積年の軋轢まで色とりどりの問題ことがぶち込まれていると、いうわけだ。その中の一枚をつまみあげて、「は言つ。

「お化け退治、てのが来てるんだけど
もちろん答えるわかりきつた疑問文に、春は田も耳もくれずの残りの飯をやつつける。

「ちゅうどいいです。やつてあげるです」

こうして歯車は回り出した。どっちに向いて回つていいに行くのか、そもそも自分の歯車が回つてこのかさえわからない人間も巻き込んで、時計は回る。

踏み出した足が何かを踏んだらしく、ぱつと床にピンク色の光がはじけて消える。と同時に何故か鳴り響く、どこかで聞いたことのあるファンファーレ。

「お、あーちゃんレベル上がったな」

「マリーマートに八時集合」

若干不服そうな顔で部室に戻ってきた美緒は、それだけを告げる
とどこからともなく引っ張り出してきた寝袋にくるまって、寝息を
立て始めてしまった。住んでるのか？

もちろん、部の主様がそんな有様なのでその日の部活はその場で
一時解散。午後八時という健全と不健全の境界線のよけいな時間に持
ち越しとなつたわけだ。

もちろん、早く帰つたからといって、自宅で俺を待つていてるのが
安息であるはずもなく、たっぷり七時半まで店の手伝いをして、よ
うやく七時四十五分。シャワーですつきりしたケツを自転車のサドル
に乗つけるにいたつたわけだ。

ちなみに、鬼母の経営する喫茶店は、カナメといつマスクのトット
おかげで密足が右肩上がりに。だからって俺がフロアに出ると
露骨にがっかりするなよな、密ども。あとおせんども、ナイアガ
ラのメイド服に期待してそわそわと長居するのやめる。

昼間は頬に受ける風が心地よい程度だったが、さすがに夏のまだ
遠いこの時期の夜は、自転車の風といえども馬鹿にはできない。薄
い長袖一枚というのは、さすがに心える。

「もう一枚必要だったな、こりゃ。あーでも」

「寒い？ 買そつかあ？」

後ろの荷台に腰かけたカナメが、心配そうにシャツの裾を引っ張
つていて。

「いや、いい。すぐそこだし」

それに、カナメのジャンパー取つたとなれば、殺される。関係者

各位に、一回ずつ。

「それより、そっちこそ寒くないか？」

「うん、ぜんぜん。華美のくれたすかじやん、暖かいよう

そりやよかつた。暖かいから？ まさか。俺がよかつたと言つたのは、そのスカジャンに書かれている文字を理解できなくて、つて意味だよ。神様に『天魔覆滅』なんて刺繡の入った服着せるなよな。

「こんびに、美緒がいるかなあ？」

「さあな。あいつの場合もしかしたら大魔王の封印ばりに寝てもおかしくねえから、次に目覚めるのは百年後かもな」

だとしたら何という幸せだろうか。俺も幸せみんな幸せ。世界が混乱に陥ることもなく、まさにハッピー・エンドだ。ま、無理なんだけどな。

「こんびに、って遠いのあ？」

「いや、そこ曲がつてすぐの、ほらあの黄色い電飾の看板だ」顎をしゃくつて示した先には、蛍光灯で裏から照らされた黄色の看板。マリーマートだ。全国展開をうたつてはいるものの、このあたりの地方に集中しているせいか品揃えは地域密着型だ。近所で採れた野菜を売つてる店もあるらしい。田舎万歳。

「一十四、だあ

「一応コンビニだからな。でも、深夜なんて買い物来るやついんのか？」

都会なら夜のコンビニというのは不良や良からぬ大人のたまり場、国道沿いならトラックの運ちゃんの憩いの場にでもなるんだろうけど、ここはそんな気配は微塵もない。幽霊が来るために開けてる、といわれても信用できるレベルだ。オリジナルブランドの格安商品？ 何それおいしいの、って感じだ。

田舎らしく無駄にだだつ広鶴駐車スペースには、一台軽トラが止まっているだけという、店の現状をリアルに物語つていた。

そんな中だったので、駐輪場にどっかりと鎮座した一台のバイクはひと際目を引いた。バイクや車にさほど詳しくない俺にはよくわからないが、何やらめちゃめちゃ速そうな奴だという印象を与える一品だ。

「すつげ。ピッカピカだな」

隣に置いた俺のチャリがいつもの三割増しでみすぼらしく見えてしまう。それほどにバイクはピカピカに磨きあげられており、エンジンやマフラーは街灯も月の明かりも漏れなく反射してキラキラと輝いていた。

「どうしたね？ 盗んだバイクで走りだしたくなつたかね、ショウね……なんだ、シユータローではないか」

折よく自動ドアの向こうから缶を片手に現れた美緒の姿に、俺は度肝を抜かれたわけだ。フルフェイスのヘルメット片手に缶コーヒー、バシッと決まったデニムのホットパンツが、ハリウッド映画のヒロインみたいなんだから悔しいよな。ファッショントレンドと言いつて切るだけはある。この寒いのに大したもんだ。

「お前のかよ。まあ似合つっちゃ似合つけど」

「いや、私のはそつちだ。私は普通一輪の免許はまだ取得していないでね」

え？ そつち？ って言われてその向こう側を見ると、確かにそこにも一台の一輪車が鎮座ましましてい。こちらもそれなりに綺麗にはされているが、磨きあげられているというわけではないし、形も速さとは縁がなさそうだ。その代わりと言つては何だが、実に実用的で親しみと愛着を覚えるスタイル。おそらく世界で一番有名な、日本を代表する一輪車。スーパーカブ。俺でも名前を知つてのレベルだ。

「お前、カブにフルフェイスで乗つてるのかよ？」

「安全第一だ」

似合わねえ言葉だな、と思つてると続きがあつた。

「これならいつ何時何に襲われても大丈夫だ」
納得。ですよね。

「んじや、あとは委員長が来れば揃うわけだな」

「もう来ているよ。中で会計を済ませて出てくるはず……ん、きた
きた」

ピロピロン、というチャイムに反応してそちらを見ると、確かに

そこには吹水の姿があつたわけだが、どうこうことだ？ できの悪い「ラージュ」を見せられている気分だ。

首から上は全くいつも通りの委員長。ちよつと眠そうなのはもう夜だからか？ 早いな。肩の出たワンピースに履き古したスニーカー、羽織るようにして着ている花柄ニットのカーディガンはうつすらとピンク色。この時点ですでにけげはぐな感じは否めないが、そんなものは微々たる誤差だ。何より際立つているのは、両手につけられたいかつい皮手袋に、肘からぶら下がるフルフェイスのヘルメット。まさか、うそだろ？

「ほ、僕のバイク……興味、あるの？」

「マジで？」

「マジ、で」

「そのかっこで乗るの？ スカートで？ つてか、吹水が？ バイクに？」

「ほ、本当はもつとおつきいやつが強そくなつて思つたんだけど、僕の体格だと、このあたりが限界みたいで。重たくつて」

「充分だろ」

バイク業界に詳しくない俺には、上がどこまであるのかは分からぬが、これよりでつかいバイクに乗つている吹水は、なんか、イヤだ。

「にしても、これで探して回るのか？ 僕、チャリだからついていけねえぞ」

「うん、さすがにこれは私も計算外だった。委員長君にこんな才能があつたとはね」

「ご、ごめんなさい。乗り物、これしかなくつて。僕、自転車に乗れないから」

「そ、うか。ならやむを得ないな。私の後ろに乗りたまえ。幸いヘルメットもあるし、フルフェイスだ。これなら顔がばれることはない」

何か色々おかしいが、もちろんスルーだ。世の中って不思議な事がいっぱいありますよねー、って阿呆のふりをするのが賢い生き方

だと知った十五の夜。

「ナイアガラはこねーのか？」

吹水の背中に背負われたウサギから「さきが顔を出した。ウサギ形のリュックつて、それであのバイクに乗つて来たのか。シユールすぎるだろ。

「うん。他に用事があるんだつてえ。放置ふれえだよう

「どこでそういう単語覚えるんだ、まったく」

「そつか。言つちゃなんだけどちよつとほつとした。あ、絶対本人には内緒な」

その気持ちはわかる。激しく同意だ。とはいっても、出がけに「何かあつた際にはおわかりで「」ざますね？」と、命も凍りつくような視線とアイアンクローフを頂戴した身としては、ある意味いつた方がよかつたのかもと思わないでもない。

「では、超科学部活動開始だよ！」

「「おお～」」

美緒の宣言に声と拳を上げて賛同した吹水とカナメ。ひらひらワンピースと天魔覆滅なスカジャンという凸凹コンビが、夜の街に繰り出した。

「まあ、見つからないんだけどな」

先を行くカブのテールランプをぼんやりと追いかけながら、答えを知つてゐる俺は誰にも聞こえないように一人こちた。

トイレから出るときに、手を拭きながら目を閉じた。いなくなつてたらいーなー。でもいるよなーたぶん。そんなこと考えながら目を開けると、やつぱりいた。

「ですよねー」

ハテナマークが頭の上に飛び出しだるのが見えそうな、見事な角度で首をかしげてゐるのは初めて見る女の子だが、そいつが人ではないことは一目見て分かつた。だつて見たことないだろ？ 三十五チぐらい宙に浮いて歩く、ふりつふりひらつひらなドレスみたい

な服着た（これはあつてもいいか）、エルフ耳の女の子なんて。髪なんかピンクだぞピンク。もちろん一次元じゃない。厚みがあつて、しつかりそこにいるわけだ。

「これで謎の喋るちつこい生物と宝石キラキラのステイックを持つてれば、日曜朝八時半つて感じだな」

「はちじ、はん？」

「いや、じつちの話だ。忘れてくれ」

とれるんじやないかつてほど首を傾げる。瞳は純粹な興味と怖れが混在した不思議な色を灯している。だらうな。なんせ自分が何者かさえわかつてないつて顔だ。

「見えるの？」

「かなりくつきりはつきり。見えぢやつて、ますね、はい」

まあ、この一言でこの少女の出自やら何やらが薄ぼんやりと想像できてしまたわけだが、気づきたくなかったなー。

「ねえ、私つてなんだろう？」

「うーん、なんだろなあ？ 見た感じだと変身魔女っ子で最近はよい子とオタクと一ートと大きなお友達のあこがれの的かな？ 俺の知識をもとに判断するなら、魔女かな？」

まあたぶん後者で確定なんですけど、さあどうしたもんかな。自覚なさそうだし。

「まじょ？」

「うん、魔女。悪い」と、する？

ふるふると首を振る。うん、どうやらザラリ悪い奴ではないらしい。自己申告だが。

「魔法、使う？」

ふるふる。うん、じゃあさらば一安心。

「えー、つと……人間滅ぼしちゃえーとかむずむず？」

「仲良く、なりたい」

うーん、魔王があれなら生まれる魔物もこれなのか。さつきまで片付けてたちつこいのも、なんか妙に人懐っこかつたもんな。

おつかなびっくりこっちの返答を待つ少女は、叱られているみたいに縮こまっている。こんなときどうすればいいのか、俺の人生経験だけでは最良の答えを導き出すのは難しそうだ。弟や妹でもいれば別なんだどうか。

ただ、一つだけ確実に言えることがあった。

「あのな、今こわいお姉ちゃんがお前のこと探してるから、それにだけは見つからないうにした方がいい」

「こわーい？」

「そう。魔王より魔王で魔女より魔女な、俺達のボス」「ぼす」「ぼす」

まあ、この表現は間違つてはいないだろつ。嘘でも大げさでも紛らわしいでもない。むしろ足りないぐらいだ。大魔女王、とかなら丁度いいぐらいか？

「とりあえずあっちには近づかないうにウロウロしてりゃいい。学校なら大丈夫だろ」「うん」

部室の方を指差した俺に魔女たぶんは、小さくうなずいて返事をした。そのぐらいしか俺には言えねえよ。すまんね、ふがいない俺で。そう言って、逃げるよつに立ち去るうとした俺の背中に、小さな声がかけられる。

「ねえ」

「んあ？」

立ち止まる。後ろ髪を引かれるのとはまたちょっと違うものが、足を鈍らせる。あとになつて思えば、たぶんあれは罪悪感とか、そういう類のものだつたんだろうな。

「また、会える？」

曖昧に笑つて、手を振つた。

反乱？行動

そんな、ばれたら獄門打ち首な隠しだ」との甲斐あつてか、魔女搜索の結果が出ないまま過ぎた一週間。俺にとっては田論見がうまくいつてほつと一息なんだが、そうではない奴もいる。言わずもがな、美緒だ。

「こうも結果が出ないと抜本的な解決策が必要になつてくるね」
「」にしばらく昼休みに開かれている定例の作戦会議で、どうどう美緒はこんなことをぶち上げた。相変わらず弁当箱がでかい。

「でも、どうしたらいいかな？」

定番のランチパックを咀嚼しながら牛乳を啜る吹水の食欲は、美緒とは天地の開きがある。吹水がどか食いする姿はどうやっても想像できないが。

「もういいんじゃないか？ 大して実害も出でないわけだしよ。な、カナメ？」

「うん。あたしもそう思つ」

「だめだ！ 超科学部の沾券にかかる問題だよ、これは」
まあこいつがそう言うんだつたらそうかも知れんが、意地になつてるだけなんじゃねえかとも思つ。どつちにせよ、俺は従うのみだ、この件に関しては。

「何探すさ？ 天王寺組の今の活動目的は探しものさ？」

「天王寺組つてなんだよ」

「いやあ、なんかそんな感じに見えてきたからさ。お前らつて何だかファミリーつていうか、組とかそういうイメージさ」

「どつしりと肩が重くなつたのがわかる。何だらう、この絶望感は。しかもカナメや吹水は妙にうれしそうだぞ。俺だけなのか？ 俺の常識がおかしいのか？」

「あ、あれさ！ 最近話題のピンクの幽霊探しをしてるさね」

「何だねそれは？」

それは俺も初耳だ。うちの学校は色んなもんが話題になる（その半分ぐらいは我らが部長様だが）が、最近は美緒に振り回されっぱなしのせいか、校内の話題なんかにはとんと疎くなつていたようだ。ガラパゴスの生き物に親近感を覚えた十五の夏。

「あれ、ちがつたさ？」

「いいから話したまえ」

そしてお前は、人にものを聞く時ぐらじ弁当箱から手を離したまえ。

「別に、普通や。最近部活で遅くなつたやつなんかが、校内をふらつく謎の幽靈を目撃するつて噂さ。なんか、ピンク色の幽靈とか、ほかにもピンクの人魂がふわふわしてるのを見たつて話もあつたりするさ」

さして珍しくもない、ビニの学校にでもありそうな怪談話だが、『ピンク』というキーワードがすべてを物語ついている。それは美緒も同じよつで、飯を咀嚼しながら眉間にしわを寄せている。まずいな、こいつの鋭さは天下一品だ。下手をすると当て推量だけで真実を導き出しかねない。こいつはそういう奴だ。

「まさか、そんな普通の心靈現象を俺達超科学部がおつかけるわけねえだろ。そういうのはオカルト部とかの仕事だつて」

ミスリードしておくにこしたことはない。

『なあなあ、いいのか？ 今の話』

『しいつ』

『ぶー』

「調査の必要、ありだね」

くそつ、あわよくばと思つたがやつぱり無理か。自分の無力さを呪うばかりだ。

「でもよ、別に実害がないつてんならほつといても」

「じゃあ、生徒会vsかが……超科学部、さね。なかなか見ものさ」

「おい、今なんつった？」

今日は牛丼弁当並盛という、およそ学生らしからぬ昼飯を皿そつ

にほおばる根隅に、俺と美緒の視線が突き刺さる。箸が止まるほどひるんだのは美緒の視線の鋭さに他ならないが、俺の睨み方も尋常ではなかつたと思う。自分でわかるほどだからよっぽどだ。

「え、べ、別にこれももうみんな知つてると思つた。今回は珍しく生徒会が乗り出した、つて……いつもならこんなへんてこな眉つば話を相手にするはずないのにて。だから俺は、お前らも噛んでると思つたさ」

最悪だ。こいつのが美緒に火をつけるつてのを、この数週間で誰よりも身に染みて分かっているだけに、これはつらい。もう、止めるすべはないかもしれん。

しかも、よりもよつて相手はあの会計のいる生徒会だと？ 何もない方がおかしい。

無言で飯をかつ込む姿がそれを雄弁に物語つている。神氣とも魔力とも違う、禍々しいパワーが美緒を包んでいた。錯覚ではないっぽい。

「やはり、やつらが勇者とこいつで間違いはないようだね」

せり、とつとつこんなことまで言い出しているぞ。つてことは俺達は生徒会様に反旗を翻した反乱分子つてことか？ うわっ、なんか似合ひすぎるな。

昼休みが残り十分を切つたところで、俺はカナメの手を引いて廊下に出た。

「な、なによ？ いきなり、な、なにい？」

飯を食いながら悩んだ結果だったが、やはりカナメには言つておかないとまずいよな。というか、俺単独では行動できなつてのが肝だ。どうしても協力が必要になる。

「ちょっと、秘密の話だ。このことは美緒には聞かれたくない」

「ひ、秘密？？」

その言葉を聞いたカナメは、意を決したように勢いよく首を縦に振つてゐる。いや、そんなに全力でやつちやうと、それもうヘッド

バンギングだから。もげるぞ。

「あ、あー、なんか壮大なもんを期待してるかもしれんから先に言っておくが、これを聞くと共犯」

「共犯で、いいよう！」

「お、おおう」

ちょっと気圧された。

グーを握って、必死に見開いた眼で見つめられると、なおさら言いくらいんだが。まあそう言つてくれるのならお言葉に甘えるとしよう。失敗すれば俺が死ぬのは必定なので、俺は覚悟はできている。

「あのな……」

そこからの俺の話を、カナメは頷くでもなくただじつと聞いていた。というか、そうするしかなかつたんだろう。俺だつたら開始早々に「なんこと俺に言つなよ」で切つて捨てるような話だ。そりやそうだろうな。誰が美緒の意図やら吹水の願望やらを知つた上で、魔女見逃す話なんかできるかつてんだよ。普通に考えれば裏切り者だ。

なのに俺は、そうせざるを得なかつた、って言つたら都合よすぎか？

そんな俺の懊惱も伝わつてか、カナメは終始無言で聞き上手に徹してくれた。そして最後に、

「シコウの、したいようにすればいいと思うよう。あ、あたしは、それでも、いいと」

なんて言われたら、こりやもう後には引けんだろう。美緒や吹水には申し訳ないが、独断専行つてことにしてもらつことにした。そしてできればこのまま穩便に、俺だけが事実を胸に秘めて……なんてことにつくると、この時は本気で思つてたし、そう難しいことでもなかつたはずなんだ。

「だよな。俺、神様の使いだもんな
浅はかだつたんだけどな。

放課後。

あてもなく歩いてみると学校というのがいかに巨大な入れものなのか実感できる。そりやそうだよな。千人からの高校生と、そいつらが持て余したほぼ無尽蔵のエネルギーを腹に収めにやならんのだから、でかくて当然か。

しかし、今の俺にはその懐の深さが悩みの種だ。

「シユウう、次どこ行くのぉ？」

「ん……どこ行くかな？ こいついうとき魔法使いもののアニメとかだと頭の中に声が聞こえたりすんだけ、ど……な」
さぞアホな顔だつただろうと自分でも思う。

たっぷり一時間は校内を徘徊して、着替えをしていた女子バスケットボール部の人間からは覗き疑惑を多分に混入させたじつとした視線を浴びせられ、精神と肉体の両方を疲弊させまくっていたとはいえ、今更気がついたなんて我ながらアホの極致だ。

が、なかつたことに対するにはもつたいなさすぎる事実。

『あー、あー……てすてす。聞こえてますか、受信してますか、いつかの魔女さん』

人類であることを諦めた結果手に入れた、数少ない能力。ごく限られた人種（？）の方々との交信に使える無料通話、テレパシーを発信してみる。そもそも携帯電話方式で相手の番号が割れていないとダメつてんならアウトだけど、テレビ電波方式であることを願つて発信。大丈夫、受信したからつて受信契約は結ばせたりしない。

『あー、あー』

「どうしたのシユウう？ 故障お？」

グサリと突き刺さる一言。周りから悪い影響受けまくつてる気がするぞ、神様。口半開きでアサッテに焦点の合わない視線を飛ばして、グラウンドの片隅に突つ立つてる姿は宇宙との交信をしている

ようになれるかもしれないけど、露骨に言ひちやだめだ。

『……は、い』

蚊の鳴くよくな電波受信。集中！ 感度アップ……できるかどうかはわからんが。

『もしもしも』

『も、一個多い』

うむ、コントクト成功。人類にとつても俺にとつても偉大な一步。『えと、魔女さん。俺、神の使い。俺、魔女、探す。魔女、ビニ？ うほうほ。文章作成つて、意外と脳みそ使うんだなと新発見。どうでもいい。

『魔女、探される？ 恐い？』

『怖い、ない。俺、平和。話、対話』

……まさかの圈外？

「魔女、ここ」

『着信アリー！ で、ビニだ？ 魔女、ビニ？』

「シユウう、何やつてるの？』

「ちょっと、静かにしてなさい。今集中してアンテナ探してる最中だから。くう、もつと早くこの能力に気がついていればな～』

「ねえ」

「待つてろ、ちゃんと俺が魔女を発見して」

「シユウう」

がつくりとその場に崩れ落ちた。初めて見たわ、景色が垂直に流れることなんて。貧血やめまいなんて生易しいもんじゃない。これは、そう、たとえるならマリオネットの糸をぶつりと切つてしまつた時、というとわかりやすいだろう。もちろん、俺が人形。

「話聞いてくれないからあ、神気遮断したよう

「……」

電池が切れたおもちゃが動けないよに、俺の体はピクリとも動かない。というよりも、自分の体であるという認識すら希薄になつてゆく。

「んもう。魔女きたよう。話ぐらい」かぶ「聞いてよ」
元気注入。という言葉通り、見る見るうちに感覚やら意識が鮮明さを取り戻してゆく。

「あんまりこれやりたくないんだあ、失敗すると消えちやうからあえ？ なに？ 今俺軽く死にかけてたとかそういうこと？」

「それよりい、魔女お」

ぐりゅつ、といついやな音がして、俺の首は本来曲がる限界をちよつとオーバーして後ろ向きにされる。ああ、生きてるつて素晴らしいけど痛い。と、

「あ、魔女。発見」

「はい。魔女」

「シユウう、ずっと後ろにいるのにバカの顔してるんだもん。もお」
そういうえば最後の方はテレパシーではなく肉声だったような気もしなくもないうが、過去は振り返らない。恥ずかしいから。

「元気だつたか？」

「あなたよりは」

「ですよねー。だつて俺、目の前で死にかけたもんな。

「どうしたの？ いきなり呼び出して」

「いや、なんていうか、ちょっと警告つて言つか避難勧告つて言つか、お前を狙つてるやつがいるから逃げろつていうか」

「私を、狙つて？ 怖いお姉さん？ 私に会いに来てくれる人がいるなんて。ねえ、もう来る？ 今日来る？」

「そこで登場、怖いお姉さん。ほう、これが魔女かね？ 思つたよりも「コンパクトだな」

「まじで？」

跳ね上がった心臓が、わしづかみにされたように痛い。

いつたいどこから現れたのか、いつの間にか俺の背後に立つていつた美緒の声が、俺の魂を瞬間冷凍する。はい、俺死んだ。

「マジだ。君が隠れてこそ何かをしているとは思つたが、まさかこんな抜け駆けとはね。まあ私にとつてこの程度の隠し事はあえ

て暴く必要もないが。ウサギ君もテレパシーの傍受で一役買つてくれたしね

くそ、そんなトラップがあったとは……ウサめ。

首筋を駆け抜けたのは、熱風に近い風。自然のものとは思えない
ので、もしかしたら声の主が巻き起こしたのかもしれない。こいつ
ならあり得るから困る。

「というわけで魔女君、遊びに来たよ」

「あ、さ、探してたん、だよ。忘れてたんじゃ、ないからね」
十字を切るべきか合掌するべきか、宗教をもたない俺は最後の瞬
間に祈る神を決めあぐねていたが、何のことはない、すぐ隣にちょ
うどいいのがいる。

「何い？」

「いやな、生まれてきたことを懺悔してだな、せめて楽な方の地獄
に行けるようにだな」

「しかしまあ、お手柄だよシユータロー。おかげで生徒会のあぶり
出しにも成功したわけだしね。泳がせた甲斐があつたというものだ」
額に例の魔力が見える魔法陣を貼つて、魔女の頭をなでなでして
いる美緒は妙に満足顔だが、俺は納得がいかない。泳がされていた
だと？

「驚いた顔をしているようだが、君はすぐに顔に出るからね。何か
を隠しているのは一目瞭然だつたよ。まあ、ここまでの大物だつた
というのは想定外だつたがね」

「じゃあ、ここしばらくやけに素直だつたのは」

「もちろん、そのためだ。こちらが気づいていることを相手に気づ
かれてはならない。諜報活動の鉄則だよ。まあ、そんなことをしな
くとも、君に設置した十三個の盗聴器がすべてを語つてくれたがね」
「普通に犯罪じゃねえか。つてか返せよ、俺のプライベート！」

「一体いつどこでつけられたんだ。もつ何も信じられなくなりそ
だ。」

「じゃなくて、そつちほじうでもいい

「いいのかい？」

「よかねえけど、でもそれはそれとしてだな、あくそつ、見つか
つちまつたあ！」

「都合が悪いのかい？」

「そりや悪いだろ。なんつても見つかつちまつたんだから」

「何故だね？」

「そりや……美緒に見つかつたんだから、そりや、そりやあ……」

「獲つて食つとでも？」

「そのぐらいは……あれ？」

「そりやえ、俺、何でこんなに躍起になつて隠そつとしてたんだ？
うへん……見せちゃいけないつていうか、子供に『えちやいけな
いおもちゃつていうか……

「君の中で我々がどのような扱いを受けているのかが、よつくわ
かるいい例だつたよ」

「千古君、そう、なの？」

「そう、なの？」

「おい！ カナメ、裏切んな！」

「ふええ～」

「おふうつ！ しまつた、久々のボディへの衝撃は間違いなく重く
後味を引く一撃。完璧な角度で入つたりバー・ブロー。こんなもんを
放つのは俺の周りに一人しかいない。一人もいるのか、道理でよく
死にそうになつていいわけだ。

「カナメ様に、なんと？」

「なんでも、『ざいば……せん』

「今日は何のコスプレ、ですか？ 白くて丸い、餅ですか？」

「白米で『ざい』ます」

「まけー。そして心を読むな。

「お米は活力のもとで『ざい』ますよ。美緒様の受け売りで『ざい』ま
すが」

「そのと「そのとーおり！ 白米は命の源だよー！」

美緒の声を打ち消してまで主張するそこに、信念を感じてしまうのは凡人故だろうが、それほどに勢いのある声だった。でも記憶のいやな部分しか刺激されない。

「貴様、何の用だ！」

「それはこっちのセリフだつづーの、天王寺美緒おー。」

「木安春うう！」

「何故フルネーム。そしてどこから出てきたバールと金属バット！」

「せえええ」

「待つです！」

ぽわーんとした声なのに、思わず耳を傾けてしまう不思議な声。それはどうやら俺の感想だけではなく、その場にいた全員がそうだつたらしい。既に攻撃モーションに入っていた金属バットもバールもぴたりと動きを止めて、声の出所に注目している。

警戒や緊張というよりも、なんとなく見ちゃったという風に視線が吸い寄せられている感じだ。で、見たのが、

「人形だ」

なんだっけ、ラブドール、って言つんだっけか？

「ビスクドール、でござりますよ。このど変態どスケベペビふいり

あ畜生虫」

おい、また何か増えたぞ。つていうか、心読むなよな。

「きしょつ、でございます」

「心が痛いです。

「しかし、あのような改造制服が美緒様以外にもいらっしゃるとは、この学校はどうかしておりますね」

「僕も、あこがれたんだ、けど、裁縫とか、駄目で……」

「今度君のも作つてあげよう。とびつきり魔王っぽいやつをね

「おいおい、クラス委員に校則違反させるとか、マジで部の存続が危ぶまれるぞ。そして喜ぶな、吹水。

「ちょっと、話聞けよな天王寺」

「やかましいな。君は小姑かね。もしくは金につるさいから副会長

君の腰きのこんちやくか

副会長……あれがそうなのか。あんなのが副会長って、いいのか?
生徒会が校則破りまくつてそうなんだが。いや、言つまい。美緒の関係者がまともなわけがない。

「てめえ、ぶつ殺す」

バットを握る春の手に青筋が浮かぶ。枯れ木と勝負できそうな細腕に、驚くほどくつきりと浮かぶ筋は健康そとは言い難い。それでも、恨み節たっぷりの視線を向け、

「まあ待つです。暴力はダメです」

またしても、おつとりした聲音にこれまでられて、急速に勢いがしほむ。

「こと」と危なげな足取りでこちらに歩み寄つて来たビスクドルは、球体関節だと言われても信じられる動作で首をかしげながら、美緒に向き直つた。

「そちらの幽靈さん、引き渡してもらえるですか？」

語尾が上がつたのでどうやら疑問文だということが判別できたが、日本語の文法は崩壊しているらしく。が、問題はそこではない。

「見えてんのか?」

「はいです。はつきりくつきりと、ですね」

どつかで聞いた言い回しだなと思いつつ、無意識のうちに俺は魔女を背中にまわしてかくまつていた。一応俺の本能は、ここからも美緒と同類とみなしているらしい。いや、特に美緒からかくまう理由がないのはわかつてはいるんだけどな。

そう思いながら、美緒の妄言に近い当て推量が脳裏をよぎる。

『やはり、やつらが勇者ということで間違いはないようだね』

『まさか』と思つのと「もしかして」と思つのが同時だった場合、どうやら俺はもしかしての方に押し負けてしまうらしい。小心者の典型だが、それでいい気もした。周りが楽観主義だけでできるるようやつらバツカだからな。

「むしろ、あなたたちが見えることに驚きです。幽靈が見えるって、

靈能力ですか？」

「はっ、あ、あの、それは」

切羽詰まつた様子で何かを言いかける吹水をさえぎつて、美緒がにやりとほくそ笑む。

「我々をなめてもらつては困る。科学の到達する高みのさらに向こう側、魔法の頂を目指す我々にとつては、幽靈なんぞを見る程度造作もないことだよ、副会長君」

「え？ という田で俺と美緒を交互に見つめる吹水だが、とりあえず俺は視線の動きだけで『まあ見てろ』と促した。

「あら、そうなんです？ それはまたすごい部活ですね。しかし私たちも生徒会として幽靈騒動の調査を任せられているですよ」

「なら解決だよ。この幽靈君は我が超科学部あずかりとなつた。今後もう問題は起きない、」これだけは断言しておひつ

「お前が問題起きないつつても信用できねーつーの」

賛成に一票を投じたいところだが、ここははぐつと我慢の子だ。耐え忍んでこそ浮かぶ瀬もあるわけだ。あれ？ 違つたか？

「身を捨ててこそ、でござります」

「ではこうじょうではないか。問題が起きればその時は生徒会あずかりにでも何でもすればいい。現実問題、生徒会としては幽靈の出没が問題なのだろう？」

「そうですね、確かに言うとおりです」

「あーちゃん！」

あーちゃん？ なんかこいつがそういうかわいい呼び方すんのつて、似合わないわけじゃないんだが、いつものイメージがな……バットだもんな。

「ん~、っと、さ、きや……会計さんもそう躍起にならず、です」そして逆向きのベクトルは名前をえ覚えられていない、と。変だろ、凸凹生徒会。

「というわけで、て……み……」

しばらぐ何かを考えるように、指先をあごに当てて空を眺めてい

たが、やがて意を決したように頷き、言葉をつづけた。

「部長さん、今日はあなたの言つ通りにするです。でも、今日だけです」

「何だ、名前思い出せなかつただけか。しつかし長い指に……でかいな。」

「また胸ばつか見てるう」

「ち、ちが！ これはだな」

「血が見とうござりますか。さようござりますか」

「だから違うと」

「てんめえ、あーちゃんの乳ばつか見てやがつたな！ あれは俺んだ、やらん！」

「シユウう」

「いでつ、いでえええええ！」

左手には噛みつかれた八重歯の感触。右腕にはフルスイングされた金属バットの感触。すごいよな人間つて、同時にくらつた大小様々な痛みをきちんと区別して整理できるんだもんな。人体の神秘万歳。俺、もう、人体じやないけど。

「そしてなぜ、俺は今顔面にアイアンクローラの感触を味わっている？ 脳が軋む音は非常に不快なんだがあだだだだだ」

「いえ、これは害虫駆除の絶好のチャンスかと、ナイアガラは着想致したしだいでございまして。他意はございません」

そりやねえだらうな。あるのは純粹まつ黒。ピュアブラックな殺意のみだ。くそ、一番いてえぞ、あの女のアイアンクローラが。

「まあせいぜい君達は踊り場の鏡に映る首なし日本兵でも追いかけていたまえ」

「え？ そんなのいるの？ 僕知らなかつた」

「吹水、お前は真に受けるなよ。

「そんなのいるですか？ これは会長に調査を依頼しないとです」

「あーちゃんも真に受けんなつづーの！ いいか、天王寺美緒！

そうそうてめえの思い通りに行くなんて思うなよ、首洗つて待つて

やがれ！」

「行くんだな、これが」

眉根一つ動かさずに中指を立てるつて、なんか美緒らしくない氣もするが、そこにあるのが底知れぬ私怨という奴なのだろうか。いちいち挑発すんな。ほら見ろ、木安のやつ顔面真っ赤にしてとび跳ねて怒つてんぞ。まあちっこいからとび跳ねても、ぴょこぴょこ跳ねる様がコミカルなだけなんだが。

とまあ、こんなやり取りもあつたわけだが、

「おおむね良好に解決しただろ？」

「う、うん」

「こひこうときのあいつの交渉力は異常だからな。ま、我が強すぎるだけなんだけどな」

とことこと危なつかしく歩くビスクドールと、真っ赤になつてとび跳ねるぶかぶか制服を見送ること数分。ようやく訪れた静けさの中、いまだ中指をぶつ立てていた美緒がようやく俺達の方に向き直る。

「いいから中指直せ。俺に向けるな」

「ふん、また連勝記録を伸ばしたわけだが」

全く、何と戦つてるんだか。答えなくていいけどな。

「次の手を打たねばいかんな、これは」

「なんのだ？ お前はまた何かろくでもないことをたくらんでるのか？」

もう召喚やらなんやらば「めん」だぞ。神が来て魔王が来て、次は何だ？ 怪獣か？

そんな想像に半ばうんざりと肩を落とした俺の背筋が、強制的に伸ばされる。見ると力いっぱいこぶしを握ったかなめが希望のまなざしで美緒の次の言動を待つていて。そう言えば俺の体、あいつの気持ち一つでリモートコントロールだったな。切ない。

「で、なにすんだよ」

体はしゃつきり顔はぐつたりとこうちぐはぐな俺の声にも、美緒

は元気いっぱい答えてくれた。一瞬だけその元気さが教育テレビの歌のお姉さんのように見えたが、一瞬だけだ。歌のお姉さんの微笑みが邪悪であつていい道理はない。

邪悪な歌のお姉さんは、たっぷりためを作つてもつたいぶつて発表する。

「秘密だ」

お願いします、永遠に秘密にしてください。と願つたのは言つまでもない。

あ、右腕も治つてる。嬉しいんだかななんんだか。

グラウンドを後にし、校舎へと向かう階段をのぼりながら、ちらりと視線だけで振り返る。グラウンドが校舎のある土地よりも低く設定されているので、明日菜のいる位置からはグラウンド全体を見下ろす格好になる。目の前の藤棚は一年で最も色鮮やかなシーズンを迎える、文字通り藤色の天蓋が視界の下半分に広がっている。

律儀なことに、まだずっと美緒の中指は神様に挑戦するように天を指している。隣に神がいることなど知る由もない一人にとつては、それが実に美緒らしく映る。

たぶん本当に神様相手にも喧嘩するんだろうな、とちょっとだけ尊敬しそうになつたのを、明日菜は呑みこむ。ばれたら隣で真つ赤になつている春に、それこそ何を言われるかわからないからだ。

二人の、全く歩調の違つ足がそろつて校舎の角を曲がり、非常扉を押しあけて校舎に入つて歩くこと数歩。無表情に廊下を照らす消火栓の赤い光の前で、フツリと明日菜の足だけが止まる。

それが意味するところを知る程度には、春は明日菜が大好きだ。それが、実はちょっと危ない方向の「好き」であることには自覚がないが、気づくのも時間の問題だらう。

だから振り返つて、一言だけ告げる。

「やつぱ悔しいんじゃねえか」

「ふん、です」

ぷつくりと頬を膨らませ、唇を尖らせる姿に先ほどまでの名残はない。ビスクドールだった外見は、今ではただの駄々っ子でしかない。ゴシックロリータ特有の静謐さが、何ともアンバランスだ。

「絶対、幽霊は生徒会が退治するですよ。勇者ですか？」

「加えてどこまでも頑固者。」

こんな、一昔前のお姫様を絵にかいたような裏表が、どうにも春の琴線に触れて仕方がない、というわけだ。直情一本で口も出る手

も出る足も出る、なんならバットも出る自分にはない起伏が面白いのだが、それだけでもどうやらなにらし。が、そこからは考えない」とこしてこる。めんどくせことは苦手な質らし。

「わーつてる。じゃなきやあーちゃんが、「今日だけ」なんて捨て台詞使うわけねえもん」

「うん、です。でも、ふう……ですか」

ますますふぐのよつこまつぺたを膨らませると、血色とつやのよい肌はきれいな桃色に染まる。消火栓の赤にも負けないほんのり桃色が、なんとも微笑ましい。

「わーつてるわーつてる。ちやーんと正義の味方やつから、安心しろつて」

「ゆーしゃですかー」

「やつだつた、ゆーしゃ ゆーしゃ セーラのゆーしゃ。行くぞ、勇者様！」

「ふう……ですか」

ピンク色の光の粒子の中を、ピンク色のまつぺたが歩く。ガラガラと、金属バットを引きずる音をひきつれて。

「なあ、あーちゃん？」

「なんですか？」

「あのピンクの幽靈とのピンクの光と、関係あんのかな？」

「あるですよ、きつと。ピンクつながりです」

「そつか、あるかー。んじや、あの幽靈やつつけたら魔王の話もわかるかもな」

「きつとそうです」

「勇者の勘だな」

「そうです、勘です。だから頑張るですよ、きは……き、会計さん。幽靈も、魔王も、私たちがちやんとやつつけ、世界の平和を守るですよ」

廊下の端っこで金属バットの音が止まり、そんな会話が交わされたのは偶然以外の何でもない。

「いつの間にか世界の平和にまで俺達の責任拡大してやがんのな放課後の廊下は、意外とよく声が響く。

「あーちゃん、魔力つて感じるの？」

「勘で、です」

「そつか、かんかー」

「うん、勘です」

歯車とこうのはじいで噛みあつかわからぬものよつだ。

不幸中の幸いは、何をおいても生徒会が魔女のことを見通り幽靈だと信じて疑わなかつたことだらう。まあ、この姿を見て日曜朝の魔女つ子以外の何かを想像するのも難しいんだけどな。よくバレなかつたもんだ。

「やつらにはこのまま幽靈だと思つておいてもらひ。彼女が魔女であることがばれると、そのままこの魔王がこる」とまで嗅ぎつけられかねないからね」

どうやら美緒の中では、生徒会が勇者であるというのはゆるぎない事実らしい。ま、経験知稼ぎつて意味では、だれが勇者でもいいんだろうけどな。

「あ、あらためまして、魔王様。えと、魔女です」

「ほ、僕は、魔王……です。だ。く、くるしゅうないよ」

仮初めにも程がある威厳だな、おい。とつてつけてもむづちよつと板につくだらう。

「うむ、これで現状我が部に必要な要素は一通りそろつてこいつだね」

「この部がどこを田指してるのが知らんがな」

最近やつと自覚してきた。俺はこの部のブレーキなんだ。この部の良心なんだ、と。え？ 逃げ出すだの辞めるだのと言つてただろつて？ できないことは夢見ない、これが賢い生き方だ。人間どこでも生きていける。人間じゃないけどね、もづ。

「とかなんとか言いながら、楽しくなつてきてこいつしゃるくせに

で「ござります」

「だからなんでお前はおれの心の声と会話すんだよ」

「ふ〜ん、でござります」

「うわっ、かっわいくねえ。いや、かわいくなくはないんだが、でかい米粒にそっぽ向かれてまじまじ向いてるのが前か後ろかわからんし。」

「一つ聞きたいのだが魔女君。君は魔法は使えるのかね？」

「おいおい、何を期待してたのか知らんが、そもそも俺達の目的はこいつの保護だろ？ 魔法はその後でもいいだろ」

「どうにも美緒は、自分の目的意識が勝ちすぎて物事が本末転倒になりがちでいかん。今に始まつた話じゃないが、修正のタイミングを逸してしまうととんでもないところまで行くからな。今回のはこの辺で舵を切つておくことにしよう。」

流石は超科学部の良心……いかん、言つて悲しくなつた。

「つむ、そうだつたね、失敬失敬。その件に関しては一応の案はあるのだよ」

「一応聞こいつ」

そして俺は、速攻で否定する準備を整えておく。

「超科学部の十八番、召喚魔法で本物の幽霊を召喚しまくつてそれを生徒会に」

「却下だ！」

備えあれば憂いなし。俺はこの言葉を会話する前から準備していた。

「何故だね？」

「何故だね？」

「敢えてのオウム返しだ。前にもあつたな、このやり取り。

「お前は何も聞いたらんかったのか？ 問題起こせば、即こいつは生徒会あずかりだぞ」

「だから、それがどうしたというのだね？」

「こいつを預かってる俺達が、自発的に問題起こしたら一緒にだろ」

「おお」

何リンゴが落つこちたのを見たニコートンのものまねみたいな顔してんだよ。そんなに新事実か？ お前の中の常識の地平がひっくり返るほどに。

「それよか、あいつらの場合何かしかけてくるぐらいの勢いだろ、とくにあの会計とか」

「あり得るね、あの人間凶器」

「一応突っ込んでおくけど、お前が言つたな。お前だけは言つたな。んでな、どっちつづーとそれを防ぐ方法を考える方がいいんじゃないのか？ 守るつづーか逃げるつづーか」

見まわさなくとも、こいつらには似合わない手なのはわかり切っている。後手や後衛といった思考そのものがなさそつだ。専守防衛の国人の人なにな。

「ふむ……やむを、えんか」

「ううわ、不本意そうだな、おい。

「とりあえず、魔女君はこの部室に居候したまえ。我々も放課後は基本的にいるし、場合によつては私は終日在席する」「終日在席すんじゃねえよ」

「まあ、私どももありますので大丈夫でございましょう。モモ様も、こちらにおられてはどうでござります？」

相変わらず米粒のコスプレをしたナイアガラだが、普通の会話をするときの物腰は恐ろしく楚々としていて、米粒のくせに様になるのが腹立たしい。

「うえ、うち？ うちーはー、えーっと」

救いをもとめるようにちらちらと吹水にアイコンタクトを送つている。それを受けた吹水も要領を得たもので、軽くうなづいて救いの手を差し伸べる。

「大丈夫。僕は、さびしくないから。一緒に、いてあげて」
あ、とどめだったな。

救われたと思い込んで目をキラキラと輝かせたモモの体が、ぼつ

てりと転がっている。ほんと、床に落ちると毛玉だよ。

「ご愁傷様だな、モモ」

「うう……なんてこつた」

「心強いね。それでは我々は通常授業をこなしながら生徒会の強襲に備えるとしよう」

ますます勇者の襲来に備えるラストダンジョンじみてきたな、俺達。

そんな俺達の、努力ともいえない努力を嘲笑つよつこ、現実の歯車は回り続ける。。

『幽靈』による『被害者』が出たのは、ほんの数日後のことだった。マジで？

「つて話を」

「ピンク？」

「いや、色は知らないさ。ただ幽霊が出て、襲われたつて聞いたさ。つて何でピンクさ？」

その話を聞いた俺はとっさに美緒の姿を探したが、珍しく昼休みの教室にその姿はなかつた。やけに静かなわけだ。

「じゃなくて、あいつ何やつとるんだ？ 委員長、何か知ってるか？」

いつも通り俺の席にやつてきてランチパックをもそもそと食している吹水が、驚いて目をぱちくりさせている。相変わらず、いつどのタイミングで声をかけてもキヨドるな。

「んと、んと、美緒は、出て行ったけど、特には何も」

「」数日の間に吹水の魔力の制御技術が上達したのか、むやみやたらとピンクの粒子をばらまかなくなつていてる。うさぎはなんだか不服そうだったが、そつそつ魔力生物なんぞを生み出されてたまるか。

「あたしも知らないよう

俺と同じ弁当のうサイズを箸で突つつくかなめも、聞いてもいいのに教えてくれる、ありがとよ。

「まあいいや。んで、襲われたつて、具体的に何されたんだよ。まさかお化け屋敷見たいに出てきて脅かして終わり、とかじゃないよな？」

それだつたら襲われた、とは言わないか。せいぜいが『出た』とか『見た』になるだろう。かといって、俺の知る「あれ」に襲われた場合、間違いなく日曜朝八時が現れた、とかなんとか噂されるはずだ。

「それが、何か要領を得ないんさ」

「なんだふおれ」

海老フライが口から生えてるのに喋つちまつた。おかんに見られたら鉄拳制裁間違いなしだ。が、根隅は幸いにそういうのは気にしない質らしく、普通に会話が続いた。

「最初は胸を揉まれたって聞いたぞ」

「女か！」

「女ぞ」

「シコウう、えろいよう」

ぐはつ、何だこの脱力感は。くそ、こんなとこひで神氣を絶つな。意識が、意識……

「おい、いきなりどうしたぞ弁当箱に顔面突っ込んで。そんなに全力で想像したさ？ いくらなんでも想像力豊かすぎさ」

「ぶあつ、死ぬかと思った」

ギリギリで復活。一の腕に感じるハ重歯の痛みはほのかに熱を帶びていて。早く人間になりたーい、って気分だ。

「もう、エロもほどほどにしないと、いじらせると死んじゃうぞ」

それ、俺は笑えないんだけどな。

「んでもあ、なんともエロい幽霊もいるもんだと思ってたら、それが別のところからはパンツを脱がされたって話も来たぞ」

「女か！」

「女ぞ」

「しゅ」

「続けてくれ！」

「危険回避。クソ、つい本能的に聞いてしまつた。思春期のリビドー恐るべし。

「で、よくよく聞いてみると人によって全然言つてることが違うわけさ。中には階段で背中を押された、なんていう本当に襲われた系のもあるぐらいさ」

「要するに、襲われたっていう表現が独り歩きしてる状態か。納得」となると、部室に仮住まいしている魔女の線は薄い考へてもよさ

そうだな。どうもやうこつことをするタイプじゃなさそうだし。

「ん？」

「どうしたさ？ まだ女の話でも聞きたいさ？ ハローミーもまだいくつかあるぞ。」

ふと何かが引っ掛かる。今の自分の思考をもう一度反芻してみる。魔女、幽霊、噂、女、エロ、襲われた、エロ、える、える、ちがう！ えーっとなんだ、余計なこと挿んだせいでわからなくなつたじやねえか、バカ根隅。

「つーかお前ら部室行かなくてもいいさ？」

「でかした根隅、それだ！ くそつ、何で気がつかなかつたんだ！」

行くぞ、カナメ」

「まだご飯？」

「んなもん五時間目に食えはいい！ あと念のため委員長は教室にいてくれるか？」

「よ、よきにはからえ！」

何だよ、変なブームきてんのか？ ともあれ、弁当箱に未練たつぶりのカナメをなんとかなだめて賺して、俺は廊下に飛び出した。海老沢あたりに見つかればねちつこい説教を食らうのを覚悟して廊下を走りぬけたが、幸いなことに誰に邪魔されることなく本館を駆け抜け、特殊教室棟に飛び込むことができた。

「は、はやいよ。待つてえ！」

無論、待つ。もしカナメをおいて突っ走るつもりなら、リードした分ワープで引き戻されると「バカを見る」という俺にも計算ができている、成長するのだ、もう人間じゃないけど。

「なんて自嘲ネタやつてる場合じゃねえな」

正面に生物実験室が見えたところで減速。セロテープが粘着力を失っているのか、『廊下を走るな』の張り紙がひらひらと手招きするように揺れる。むろん、お前の言つことを聞いて減速したわけじゃない。

「おら！ 開けろよ天王寺美緒！」

大当たりだ。声だけじゃなくて金属バットのスイング音まで聞こえてきそうな気がしたが、さすがにそれは先入観による錯覚だ。ちよつとだけ謝罪。

「せーとかいい？」

「おお、噂聞いてさつそく部室に詰め寄つてゐたいだけだ、美緒の方が先手を打つたらしい。ほんと、あいつのこういつこには脱帽だわ」

噂が立つたことを聞きつけた美緒は、もしかしたら昼休前から部室防衛に入つていたのかもしれない。そういわれれば四時間目にはいつがいた記憶がない。

「寝てたから四時間目の記憶そのものがねえんだけどな」

「シユウう、よだれ垂らしてたよう」

泥棒コントの泥棒のようになに壁にぺつたりと貼りつき、鼻から上げを覗かせると案の定、部室の前に数人の男女が詰め寄つていた。うち一人はこの間の会計と副会長だ。もう一人も直接面識はないが、知つてはいる男だ。

「生徒会総出だな」

本当ならここで「どうとう会長が」とか「ついにやつまでもが」となるのが物語などでは定番なんだろうが、ここ満貫寺ではそうはならない。生徒会長が副会長の犬であることは誰しもの知るところであり、むしろ何で今さらという感の方が強い。だから、

「何たくらんでんだ？」

見えない糸が張り巡らされてゐる気がして氣味が悪い。そんなことを思つていると、まるでここに俺が来るタイミングを分かつていたかのようにポケットの中で携帯が振動して着信を伝える。授業対策でマナーモードにしたままだったのが幸いした。

渡り廊下に飛び出し、液晶で確認することもなく通話ボタンを押して口を開く。

「何やつてんだ一人で」

『やられたよ、まさかこのタイミングで他の幽霊が出るとはね』

「他の幽霊？」

『まあ詳細はメールででも送る。とにかく今我々は濡れ衣でピンチというわけだ』

「んー、まあ何だかよくわからんが、魔女は無実なんだな」

『無論だ、あ！』

「どうした！」

じばらぐの沈黙。背後で何やら騒がしいのはおそらく会計あたりが扉越しで呼びかけているからだろうが、あんなぼろい扉がいつまでバリケードとして仕事をしてくれるかなんて、考えたくもない。そもそも本業だって引退しそうなのに。

飛び出して行つて何とかするべきかと、廊下の薄暗がりを振り返つたところでやつと、

『ふう、あせつたよ』

いつも通りのトーンで聞こえた。

『だいじょうぶか！』

『大丈夫だよ。まさかここでドローフォーが切れるとは思つてもみなかつたよ。せっかく上がりかけたというのに、八枚も引かれて』
「切るぞ」

『何を言つているんだね。私がここで結界を張つて籠城している以上、頼れるのは外にいる君たちだけだ』

だからつて中で楽しくウノやつてんじやねえよ。

「んで、具体的には」

『まかせる』

「は？」

『今回は君に一任しよつ』

「まで、ば」

『神頼みだよ、シユータロー。頑張つてくれたまえ』

ふざけやがれ。俺ひとりであんな化け物集団（特に金属バット女）とやりあえつてか？ 無理無理無理無理！ 何がなんでも、せめて美緒だけでも引きずり出してやる。

そう思つてどんな脅し文句を使つてやるかに思考を切り替えた瞬間、

『期待している。信じているよ、奇跡を』
そう言つて通話は切れた。

今、なんつた？

「シコウう、どうするの？」

どうするのか。俺が聞きたいよ。とはじえこのまま飛び出して行つても何ができるわけでもないし、へたすりや立場が悪くなる。美緒やナイアガラのような國太さを持ち合わせていない俺は、どんなぼうを出すともしれない。

「生徒会、やつけるの？」

「いや、別に悪いことしたわけじゃないんだから、やつけることねえよ。むしろ世間的には俺達の方が悪なぐらいだ」

「おお～、悪う」

何でそこでちよつと嬉しそうになるんだか。お前、神様だろ。

と、そこで手の中の携帯が先ほどとは違うパターンで振動して着信を告げる。今度のパターンはメールだ。もちろん送信者は美緒。仕事の早いことだ。

「で、何だよこれ。詳細でも何でもねえじやん」

開いた本文を見てうつかり自分の携帯を破壊してしまったうしなる。

何が『ヒントは魔王』だ。

「ヒントの前に問題ないせ問題…」

「クイズう？」

まあそうだな。ただし、恐ろしく難しくてもしかしたら答えが用意されていないかもしれない、クイズ地獄と呼んで差し支えないクイズだ。くそつ。

「とりあえず、ヒントのところを、へそつ

「ヒントのところ…」

神頼み、の前にひとつは自分で動いてみるか。いつも金んだ努

力も、青春つてことになんねえかな……ならねえわな。

五時間目も六時間目も授業なんて上の空だった。いや、いつも身が入っているかといわれるとそこは微妙なんだが、今日は格別だ。いつスピーカーが『バツツ』という音とともに起動して、超科学部総呼び出しを食らうか、気が気じやなかつた。

そんな想像に反して授業は当然のように終了し、掃除も終わった教室にはカナメと吹水、そして俺だけが居残っている。幸い、根隅は今日発売のゲームがあるとかで、だれよりも早く教室から消えていた。いたらうるさいから蹴り出さねばいかんところだつた。

「それで、い、いちだいじ、つて？」

昼休み終了直前、それだけを伝えたところで教師がフライング気味に表れたのは痛恨の極みだつた。しかもあの野郎、手伝いのために次の休み時間は吹水を呼び出しやがつて。うちの魔王に何やらせんだつつーの。

中途半端に伝わったせいで、六時間目の吹水はそわそわと落ち着きがなく、時折こちらを見ては半泣きになつていて。悪いことしたな。

「ああ。ぞつくつ言いつと、美緒のやつが部室に籠城してゐる

「ええ！」

「えええ」

「カナメ、お前は知つとるだろ」

「ここは空氣を読むべきかなあ、と」

だから、何でそんな余計なことばつか覚えんだよ、この神様は。

大丈夫か、この世界？

「ろ、籠城つて、閉じこもつてゐるの？ ビうして？」

と、カナメのボケにつきあつてゐる場合ぢやない。俺は昼休みの話題から自分なりに推理した内容と、それがあながち間違つていなかつたことを伝えた。

別の幽霊。生徒会による魔女の接收。それを防ぐために部室に結界を張つた美緒。

「他の幽霊が出てくるなんて、タイミング悪いにもほどがあるけどな」

田頃の行い、つていうなら俺や吹水に罪はないはずだ。力ナメも、たぶん神様だし除外だろう。となると間違いなく美緒だ。というか、美緒以外あり得ない。

「無茶苦茶に見えるけど、たぶんこれが最善策だつたんだろうな。でなきや今頃、魔女が生徒会に連れていかれて、美緒あたりが殴りこみかけてただろうし」

そうなれば、きっと俺達の部はその時点で活動停止処分なりを食らつていたんだろうな。流石に、公に生徒会に殴り込みをかけて処分なし、といいうのは無理だろう。

「でも、それじゃ、誤解なんだから」

「誤解を解くすべがねえんだ。そもそも一般の生徒にとっちゃ、幽霊騒動そのものが眉唾もんなのに、そこにさらに「今回の騒動はうちの幽霊じやありません」なんて説得力もへつたくれもねえしな」

「そんなん……」

うなだれる顔には、責任を感じているのが見て取れた。そりやそうだよな、突き詰めて幽霊＝魔女の存在が発端であり中心なんだと言われば、反論もできないだろうし。泣きそうな顔になつてのなんて、田も当たれない。

でも、だからって目を当てないってのも性に合わない。そういうのは、俺の青春じやない。すでに魔道に墮ちてるのにまだ青春できると思つてゐるあたり、楽観的だけだ。

確かに美緒のいない今、超科学部は決定的に戦力不足の感は否めない。いや、魔王も神様もいるからほんとは戦力はぶつちぎりのはずなんだが、いかんせん、この二人だし。というわけで、

「俺だってたまにやがんばんだよ。実力で青春しねえと、青春になんねえし」

決まらねえなあ。わかってるよ、決まつてないのは、だからそんな気の毒な目で俺を見るな、二人とも。

「でだ、さつきの話だけど、幽霊つてのが生徒会ことひちやネックになつてるはずだ」

だてに午後の授業を上の空で過いしたわけではない。その研究成果を発表する。

「どうしてえ」

ちょっととは自分で考えろ、とは言わない。このあたりはカナメにはなかなか想像がつきにくい概念だらうからな。それに、俺も別に事情通を気取りたいわけではないので、さつさと解答編に移行する。「幽霊の存在なんて言つてしまえば不確かなもんだ。いるかいないかの証明でさえ曖昧だしな。だから、生徒会は具体的手に出られないと

「ああ」

察したらしい吹水が、ポンと拍手を打つてゐる。でもとりあえず続ける。ちょっとぐらい名探偵気取りもいいだろ。意外とこういうのも悪くない。美緒の気持ちがちょっとだけわかつた気分だ。

「あの魔女さえ渡さなければ生徒会といえど決定打は打てないわけだ。あくまでもこないだの話はつちと生徒会の、暗黙の約束だからな。さすがに、幽霊騒動を理由に生徒会が一部活動を叩くとなれば、バッシングは避けられない。あとは生徒会がどの程度常識的かなんだが、こればつかは神のみぞ知る、だな」

「あたし、そんなこと知らないよ」

「ものの例えだ」

「それで、美緒は部室の守りを、固めたんだ。すごいね」

ほんとしぐえよ。頭の回転と発想力は、同世代の中じやすば抜けてるだろ。もしかしたら人類の中でも上位かもしれん。少なくとも俺なんかじや相手にならるのは間違いない。でも、隣りで見ていたおかげで、今自分が何をするべきかの参考にできる程度には、俺だつて阿呆じやないつもりだ。

悔しいけど、行き詰つたら考える。美緒ならどうする、って。そこから非常識とやりすぎと理不尽を削り落すと、答えは見えてくる。はずだ……たぶん。

「だから俺達は、その間に今回の事件の謎を解くわけだ」「おおっ」

感心したカナメの目がきらきらと輝いている。ふふん、もつと称えていいんだぞ。

「んだが……何か、もう、解決した気がするんだ、俺」得意げに腕を組んでいたのは、ほんの数秒だった。
あれ？ 疲れてんのかな？ あれ？

瞬きする。眉間に指でつまんでみる。ううん、肩こりか。バキバキ。うわっ、すっげえ関節が鳴つたけどおつかしいな、まだ疲れる。やっぱ慣れないことなんかするもんじゃねえか。知恵熱出たか？ とうとう幻覚が

「ねえ杏子う、これ、だれえ？」

「え？ ば、僕の知り合いにはいないけど……、誰だらうね？ 誰かの保護者、とか」

「やっぱこれ俺だけに見えてる幻覚とかじゃないのか。ってか、こんな保護者、見たことないだろ」

いきなり何の前兆もなく現れて教室の中をうねうねしていらっしゃるのは、背丈以外は全く保護者的要素を持たない、いや、それどころか人間要素すら希薄な方々だ。

「どー見ても、魔界的魔的などなたかに見えるんだが」

一足歩行で尻尾を揺らして教室を横切る実にたくましい殿方は、背中に翼的な何かを背負つていらつしゃる。かと思えばその隣、歩行してすらいない空飛ぶご婦人の腰から下は、毒々しいまでに色鮮やかなバラの花だ。花がくつついでいるんじゃない、バラから上半身が生えている。その向こう側なんかでんでん虫だろ、完璧に。「透けて、るね」

あんまし問題じゃなさそうだけど、確かに向こう側が透けて見え

ている。かと思つてはいるが、ある程度離れたところでは、そいつらの姿はすつと消えて見えなくなってしまう。

「何だ、今の？」

今日の前にあるのは、ちょっと夕方の橙色を帯び始めた西口に照らされる、何の変哲もない放課後の教室だ。わずかばかりの寂寥感は、放課後独特のカタルシスだ。

しばらくぼんやりと眺めているが、再びあの謎の存在が現れることはなかつた。いや、出てこられても困るんだけど、出ないのは出ないで気持ち悪い。

グラウンドで運動部の活動する喧騒が届いて、ようやくそこが日常の延長線なんだと実感できたのは、さらに少しあつた後の話だ。四時半を告げるチャイムの音を、どうしても現実のものだと認識できなかつたのは、どうやら吹水も同じだつたようだ。

と、またも囮つたようなタイミングで俺の携帯がブルブルと震えている。

「どうした？ 攻め込まれたのか？」

『笑えない冗談だが笑つてやるつ。あつははつはつは。で、要件だが』
笑い声がバカにしきつてやがる。畜生、バカにしやがつて。

「なんだ？ 魔界の住人でも見えたのか？」

『なんだね、知つていたのか』

やつぱりな。こんだけ絶妙のタイミングつてことはそれぐらいしかないと思ったが、それでも向こうでも見えたか。

「こつちでも出たんだよ。デビルマンみたいなのと、空飛ぶお花とその他もうもうが」

『こちらのは実に妖艶な美女であつたよ』

「すぐに行く、待つてろ！」

『来なくてもいいよ。というか、むしろ来られると計画が破たんするではないか』

しょんぼりだ。くそ、何でこつちにはそんなサービスカットがなかつたんだ

「シユウう？」

『 まづい、意識が朦朧とする。』

『 あ、いや、すまん。少々混乱していたようだ。それで何だ？』

『 つむ、つさき君が言うにはだね、彼らは魔界の住人だそうだよ
「なん…だと？」 にしても、何でいきなりそんなもんが出てくるよ
うになつたんだ？ お前、また何かしたんじゃねえだろうな』

『 失敬な。この件に関しては完全にノータッチだよ』

『 その言い方だと、もつと他にもつとでかい問題がありそうだ』
なんだが。

『 その辺はうちが説明するよ。ん、ここに向かって喋ればいいのか
(「こそ」) よく聞けよ、あのな、ありや魔界の住人だ』

『 そりやさつき聞いた』

『 あ、そうか。んでな、あれはまだこっち側に現れてるわけじゃな
くて、でも見えてるだけなんだ』

『 うん。全つ然わからん。』

『 なんでだよ！ わかれよな。つまり、一つの世界がシンクロし始
めて、波長が合い始めてんだよ。このままいくと、混ざつて一つの
世界になつちまうんだよ。どうやら杏子の魔王の素養は思つてたよ
りもでかかつたみたいだ。すげえな』

『 なつちまうんだよ、つて言われてもな。しかも「すげえな」で片
づけんな。』

『 わかるか？』

『 ん、ごめん。ちょっと、いまいち。僕には、難しい』

『 無言で首を振る力ナメ。つまり、前途多難つてわけだな。』

『 つてわけで、もうちょっとわかりやすい説明を求める』

『 では私がご説明いたしましょ。困った時のナイアガラ、で『じぞ
います』

『 困つたことになるナイアガラじゃないのか？ でもなんか無駄に
説得力があるな。まあいい、聞こづ。』

『 つまり、魔界と人界というのは平行して存在する別の世界。まあ、

あなた様のよつな中一秒の脳みそにはパラレルな世界軸、平衡世界と申せば想像しやすいでしょうか?』

電話の向いでは「おお、なんと想像しやすい」と美緒が感嘆の声をあげていい。まあ、あいつが一番の中一病患者だから、いいんだけどな。

『その二つの世界の境界線が今、曖昧になり始めていいので『じやこ』ます』

なんとなく、想像できなくもない。一本の平行線が溶け合つて、つつくよつなイメージが、頭の中に形成される。

『もともと相関性の強い世界同士で『じやこ』ます。境界の溶融はそれほど想像に難いことでは『じやこ』ませんが、これ現実味を帯びるとやはり問題は発生するわけで『じやこ』ます』

「とこうと?..」

『簡単に申しますと、キャパシティの問題で『じやこ』ます』

『ほほほ。そろそろ脳が軋み始めるが、がんばるぞ。熱心に聞いてはいるもののちょっと頼りない吹水と、聞く努力すら放棄した力ナメを見ていると、俺でさえやる気を出せられるを得ない。』

『いまいちわかつていらっしゃいませんね、愚鈍な修太郎様?』

「いや、だいじょうぶだ。たぶん」

『わかりやすく申しますと、キャパシティとは風船で『じやこ』ます。それぞれの世界を、水か空気とでも思ってくださいませ』

『ほほほ。思つた。続けてくれたまえ。』

『空間的、エネルギー的に世界には許容量が『じやこ』ます。しかし今、一つの世界が一つに交わろうとしているといつ』とは、世界二つ分のエネルギーが一か所に集中する、といつ』と同義なので『じやこ』ます』

えーと、風船がキャパシティで世界が水で、一個の風船の中に二個分の、水?

『破裂するんじゃねえの?..』

『とつとつとるーん。正解で『じやこ』ます。まあ何も褒美は『じやこ』ま

せんが』

わーい正解だ。くわつ、どこつもここつも廻鹿にしゃがつて。

「じゃなくて、それってつまりやばいんじゃねえのか?」

『おおやばで、『それこます。最低でもどちらか一つの世界は完全消滅するでしちゃうし、場合によつては残つた方にも致命的な影響が出るでしちゃう。最悪両方ともボッショートでござりますでれつてれつてーん』

そういう効果音は抑揚をつけた楽しさにやつてくれ。さもない必要以上におどろおどろしい。

『とうわけで頑張つてください』まし』

『とうわけらしのだが、私の推測では先日現れた幽靈とうのは、この魔界の住人のお歴々ではないかと思つのだよ。どつだね? どつにかなりそうかね?』

「ああ、俺の頭がな。なに? 何か知らないけど、この幽靈問題つて実は魔界にお住まいのAさんのことで、世界の存亡の危機だったて、そういう落ちつてことか?」

『どつどつとーん』という相変わらず抑揚の全くない声が、美緒の背後で聞こえている。どつやら正解のよつだ。つていうか、変なもん気にいるなよ、神界の人。

『まあ、どつやら』れも魔王誕生の影響のよつだが、瑣末なことだよ。むしろ委員長の魔王としての頑調な仕上がりに喜ぶべきではないか』

『これも委員長の影響?』

『つむ。どつやら彼女の魔力が魔界そのものを呼び寄せていくと推察されるようだ。まあさして驚くべきことではないだつがね』

『一応言つておくが、俺は『魔界』なるものが存在することに、まづ驚きを禁じ得ない』

『まさらなんだけどね。いや、あるかないかって言わると、何かあるっぽいのかなー、程度には思つてたんだよ。うさぎとか出てきたし。でも今までつつきり「ある」って言われなかつた氣もある

し。ま、愚痴だ。

『愚痴も聞き終わったところで、やるべきことはわかっているね。では期待しているよ』

あ、ちょ……切れたし。

「なんか、過剰な期待されてないか?」

「それだけ、美緒は、せ、千古君のこと……信じて、るんだよ」

おい、そこで赤くなるな。聞いてる方が拷問だろ。

「でもお、どうするのよ? 杏子やつづけるの?」

「ひ、ひこつ。や、やつづけないでぇ」

「こつや」「はうう」

ペチュ、とカナメの広めのおでこにパンツを入れておく。怖が
らせてどうすんだ。

「確かに抜本的な解決策つちやそうだが、それじゃダメだろ」

「ん~、やつぱりそうかあ」

「そうだあ。んなことすつと、美緒こじやされて結界の中に封印さ
れつちまつぞ」

適当なこと言つてゐるけど、あいつならいのぐりこじりとやつて
のけるだらうから、できる前提で喋つても大丈夫だらう。しかし、
吹水は吹水で相変わらず魔王としての威厳はないな。ほんとにこい
つが魔界呼び寄せてんのか? 実は美緒じやねえのか?

「ん~、じゃあ、魔界やつづけちやう?」

それこそ神も魔界も何もかもを巻き込んだアルマゲドンの勃発だ
る。

「なあ、一回その『やつづける』の発想から離れないか? まつた
く誰に似たんだよ」

心当たりがありすぎるので

「んむう……」

しかし、そうなると確かに手詰まりの勘はある。吹水が魔界を呼
び寄せるなら、呼んでる方が呼ばれてる方のどっちかを消してしま
う、つてのが根本的な解決なのは間違いないだらう。かといって

それは避けたい。

「や、やっつける、の？」

あ～あ、委縮しきつちゃってるじゃねえか。これじゃ、俺が勇者

様でも退治するのためらうレベルだぞ。

「ごめんね、なんか、僕のせいだ。僕、魔王に向いてないのかな？」

まあ、向いてるかどうかに関してはノーコメントだ。はつきりとは言わない優しさって、あるだろ？

「やつつけねえよ。俺達は魔王軍の配下なんだろ？ まあ、事実上のトップはあの魔法使い志望だけだ。それよか、なんかいい方法ないのかよ？ 委員長の祈りのパワーで魔界にお帰り願う、とか」魔界の権力者なんだつたらそのぐらいできてもいい気がしなくもない。

そんな話をしている間にも、時折視界の隅っこを半透明の魔界的生物がふわふわと横切ってゆく。今度のはほぼ蝙蝠の形をした生物だが全体的なデザインが爬虫類っぽい。

こうして見てみると、やはり吹水の力で生み出された魔法生物が、いかにメルヘンチック要素を加味されているかというのがよくわかる。

「なんだか、昨日モモに聞いたんだけど、僕の力はまだまだ不安定なんだつて。だから、こんなことになったのかも、つて……ほんと、ごめんね」

謝られると、何だかこっちも申し訳なくなる。

「不安定、ね」

「うん。魔力が漏れるのは抑えられるようにならんだけだ、魔王としての安定期に入つていないと、言られて」

安定期に入った魔王つてのがどんなもんのか想像もつかないが、それならもしかしたらと、もう一度俺は携帯に手を伸ばす。あくまでもご都合主義な「もし」に賭けて。

通話ボタンを押す。と、コールゼロで通話がつながる。

『何だね、我々は今忙しい（ジャラジャラジャラジャラ』

「おい、雀牌をかきまぜるような音が聞こえた気がしたが、『当然だ。ウノをやりつくれた我々には、もつドンジヤラしか残されていない』

「あんまふざけてつと生徒会に売るぞ。『つざくに代われ』

『ガチャーン、ガシヤガシヤ』と携帯を放り投げてジャン卓に転がしたとしか思えない不愉快な音。しばらくしてようやく電話口にウサギが出る。

『なんだよー。この形だと電話持ちにくいんだぞ。あ、ありがとな。あんたいい奴だな』

「誰のことだ？ あの面子にいい奴なんかいるのか？

「魔女か？」

『そうだよ。んで、用つて何だよ？ あ、こらー！ 美緒積み込むのやめろよなー！ 一列全部しづかちやんだつたぞ！ ツバメ返しやるつもりだろ』

『君は田ざといね。仕方がない、今日は見送ろつ』

「何言つてるかわからんから端的に聞くぞ。委員長の力が不安定なのと、魔界が寄つてきてるのとは関係があるのか？」

恐ろしいまでの当て推量。これで無関係だつたら田も当てられなが、今は何でもかんでも関連付けて考えてみてもいい時だろ？ どんな非常識が起こつてもおかしくなんだからな。言つてみれば、非常事態ならぬ非常識事態だ。

『ん~……』

しばし黙考するモモのかわいらしい唸り声と、牌を搔き混ぜるじやらじやらが耳の中を行つたり来たりする。何だこの光景。

じやらじやら

『たぶん、だけどな。杏子個人で賄いきれない部分を補うために、魔界そのものが召喚される可能性はある。やっぱ魔族や魔力つてのは魔界にあつてこそ安定するもんだしな。魚が水の中で生き生きするようなもんだ』

『珍しくわかりやすい説明をありがとう。じゃ、安定したらこの状

態は解決すんだな?』

『約束はできねえけど、たぶんな。あくまでもこんな不安定な状態になつてんのは、色んなもんのバランスが崩れてるからだから、それだけとは言えねえけどな。でも、どつか一か所がしつかり安定すれば、他も連鎖的につてのも』

「やってみる価値は

『なきにしも非ず、つて感じかな』

ホールドボタンを押し、通話を終了する。と、目の前、液晶のすぐ手前を横切るよう見たこともない鮮やかな色の魚が泳いで横切る。絶対に見慣れないデザインだな。

ゆっくりと息を吸うと目の前の魚を吸い込んでしまいそうな気がしたが、勿論そんなことはない。見えてるだけでまだこっちの世界には出てきてない、つてこいつのことか。

ゆっくり息を吐き出しながら、本来手に入れるべきだったバラ色の青春ライフの中では、決して口にしなかつただろう言葉を吐き出す。慎重に言葉を選んで。だって言い間違えたら黒歴史確定だ。いや、言い間違えなくとも黒歴史か。

通話中からずっと俺に注がれていた一人分の視線の密度が増す中、ようやく決心のついた俺は、肺に残った空気を押し出すように発声する。

「委員長、魔王に、なつちまうか」

あ～あ、言つちまつたよ。そして、輝いちまつたよ、二人の顔が。通電した豆電球のように笑顔を浮かべるが、どこか照れくさそうに頬に朱が入つた吹水。大して何かわかつていなさそうながら、隣が楽しそうだからとりあえず笑つておこうという感じのカナメは、頭の上のハテナマークが透けて見えている。と思ったら、そういう形をした、タツノオトシ「的魔界生物だつた。紛らわしいな。

まあとにかく、こうやって俺の青春は坂道を転がり落ち始めたわけだ。

もう十分落ちまくつてたとかいう意見は却下だ。俺はまだ、自分

の青春が息を吹き返すと信じている。

自転車置き場で、端から順にサドルをはめていく。高さ調整は本人に任せることにして、とつあえず今重要なのは一刻も早くサドルをはめる事だ。

俺の傍らでは、自転車のサドルを専門に扱う業者かつて程の、山盛りのサドルが自転車置き場の片隅を埋め尽くしている。

「くそ、これなんて拷問だよ……」

「せ、千古くーん。こっちの列は、終わつたよ」

ギュウッと力を込めて一台完成。さうにその隣でぽつかりと口を開けたフレームにサドルを突っ込んで、ぐりぐりと押しこむ。まだまだ先は長い。

「おお、こいつはまだまだだけど、とつあえず部活終わるまでここに合つと思つて」

「う、うん。じゃ、じゃあ僕は、向こうの列、行くね」

言しながら吹水は、サドルの山からいくつかを抱えてたたつと別の自転車の列に駆け寄っていく。なんとも頼りないフォームだ。典型的な女の子走り、つてやつだな。

トタン屋根と錆びたフレームがあるだけのやつつけな駐輪場は、下校時刻も過ぎたおかげで幾分閑散としてはいるが、それでも部活をしている人数分は自転車が残っているわけだ。ざつと見ただけでも数十台。

そのことじとくがサドルのない間抜け面を、長閑な春の日に晒している。

で、俺はそこでそいつらにサドルをはめて回るところ新手の嫌がらせを受けているわけだが、ではなぜこのくせ忙しくて切羽詰まつた時にこんなことをしているのかといふと、時計を三十分ほど巻き戻す必要がある。

場所は「委員長を魔王にする宣言」が行われた直後の、春つひらひら

な教室だ。

「というわけで」

なんだかこの常套句を乱用する知人がいたけど、今は記憶から抹消だ。

宣言した勢いをそのままに、俺は口を開いていた。あとから考えればこの『勢い任せ』つてのが敗因なのは明白なんだが、ノリつて大事だろ？

「魔王たるもの悪事に手を染めてなんぼだ」

「「おおーー」」

放課後の教室に、イマイチ勢いに欠ける一つの拳が突き上げられる。言わずもがな、カナメと吹水だ。やる気だけは満々らしく、二人ともなぜかジャージに着替えている。かく言つ俺も学校指定の臙脂色のジャージ。だつせー。

「まずは何をする？」

「あたしの神氣の力でえ、人類滅ぼしちゃ」

「却下だ！ やりすぎだろ。つてか、そんなことできちやうのかよ。やるなよ」

「はあーーい」

「うん。人類滅亡はやりすぎだよな。いくら魔王になるためとはいえ。さらっと世界の危機まで救つておいた。危ついところだ。」

「タバコ、吸う、とか？」

「ん~、何か地味だな。それに俺、タスボ持つてねえから買えないし」

それに、たばこの臭いなんかさせて帰るとおかんにブッ殺される。調理場入るのに味がわからなくなるとかなんとかで、その辺はうるさいんだよな。

「そつかあ……僕も持つてないや」

「というわけで、これも却下。」

「じゃあ、こ、これえ！」

そう言つてギュッと田を閉じたかと思つと、カナメが薄ぼんやり

とした光に包まれる。ほどなくして、俺たち三人で形作る三角形の中心の空間が薄らと輝き始め、その光が徐々に輪郭を持ち始める。何度か見ているが、神の力を使して奇跡を起こす時の光というのは、何とも神秘的だ。

「おお……」「ふわあ」

感心しきりの俺と吹水の目の前で、なおも力を使し続ける力ナメ。

何かがその場に現れ始め、光に包まれたものがはっきりと見えるようになる。

が、見えるにつれて、がっかりの色が濃厚になってゆく。

どさどさどさどさ

現れた無数の『それ』の中から一つを拾い上げる。実に見慣れた形の、しかしそれ単品で見ることにあまり慣れていらない物体。

「なんで、サドル？」

「これないとお、みんな困るんじゃないの？　この間、テレビで見たよう」

いや、困るよ。困るけど。自分のチャリんとにに戻つてこれなかつたら殺意すら覚えるよ。でも、

「なんか違う気がするんだよな。魔王とサドルって

「うう、シユウ、我が家まあ」

我が今までいいよ。世界中のサドルを集めて魔王になるつて、そんな魔王いやだろ。

「とりあえず、返すか」

「ねみゅいい……」

「おい！　力ナメ、おい！」

で、回想終了。ただいま現実。

「ま、そもそも悪事に向かない三人でした、と」

回想シーンの間に体が勝手に動いてて実はもうサドル返却作業終了、つてのをちょっとだけ期待してたんだけど、当然のように俺の隣にはサドルの山がこんもりだ。駐輪場の端っこが、今は世界の果

てに思える。

世界の終わる場所とサドル。三流B級映画にさえならぬそつな組み合わせだな。

サドル山の隣では、奇跡を起こしたせいで浪費した体力を回復させるために眠っている力ナメ。凄まじく無防備な寝顔が陽光を浴びて輝いている。こうやって見ると神様そのもので神々しさもあるんだけだな。

なんとなく悔しかったので、頬っぺたをつまんでみよーんと伸ばしてみると思いのほか伸びた。文字通り餅肌。

そんな日曜の午後のようなことをしながら、それでも俺の中では一つの策がふつふつと温度を上げ、芽吹こうとしていた。つて言うと、嘘っぽいよな。でも本当だ。しょーもないところで前向きな自分の一面を發揮する。

「前向きじゃないとやつてられん境遇に追い込まれたからなんだがな」

ただし、一か八かの側面が強いうえに、失敗すると俺の心が回復不能の大ダメージを受けることになるわけだが、

「ワン・オア・エイト……でいいのか、一か八かの英語訳つて？」

そんなどうでもいいことに脳を使いながらでなければ、この単純作業はつらすぎる。じわじわと精神力が消耗するのを実感しながら、俺は流れ作業の仕事は向いていないという事実を噛みしめる。早く、早く来てくれないと……

「！」

ガラガラと、金属の棒を引きずる音が俺の鼓膜を震わせた。次いでこだまする、アニメ声といつて差し支えのない、鼻にかかったような独特の声。

「てめえら、何してやがんだこらあー。」

「来た！」

「おっせえ！ やつと来たのか！」

ようやく現れた声に、俺は涙ながらに振りかえった。来てくれな

かつたらどうしようとかと思つたじゃないか、畜生。

「な、なんだお前、気持ち悪い奴だな」

「もつと早く来いよなー。お前にわかるのか、延々サドルを返し続ける俺の辛さが！」

「お、おつ。そりや、わ、悪かったな」

予想外すぎたのだろうか、俺からの叱責に一瞬はひるみながらも、はつと我を取り戻して、厳しい表情を再構成する。うん、さすがは生徒会。美緒とためを張るだけはある。

というわけで現れたのは、金属バットを構えただぼだぼカーディガン。木安だ。

「じゃねえ！ あつちはあつちだと思つたら、こつちもこつちで何わけわからんねえことやつてんだお前らー。どつかおつかしいんじやねえのか？」

俺もそう思つ。たぶん全体的におかしいはずだ。でも、
「やかましい！」こいつやってのこのこ現れたってことは、部屋は今
ノーガードだ！ 引つかかつたな、今頃美緒達は

「向こうは会長と副会長が張つてる。お前らなんざ俺一人で十分だ。おら、わーつたらひとつ降参するか、俺に頭かち割られろ」

「マジで？」

「まじだよ。しかもあいつら、ドンジャラに夢中だぞ。何やつてん
だあいつら、人のことバカにしやがつて、くそつ

「ほんとにすまんな。あんな部長で」

心の底からの謝罪ができる。ここまで限界突破で人をばかにした態度というのは、さすがに関係者としては胸が痛む思いだ。

「じゃなくてだな。あれだ、よくものこのこ出できやがつたな。ま
ずは会計のお前から血祭りに上げて、そのあとせことかい

ぐしゃあ

田の前で自転車がひしゃげる。まあ、もともとそんなに頑丈な乗り物じゃないし、フレームつても所詮は中空のパイプだし、そりや金属バットを全力でたたきつければ前半分が原形をとどめないほど

のぶつ壊れたつて不思議じやない、よな。

「なわけ、ないよな」

「俺を血祭り？ そういう冗談吐くのは天王寺美緒だけだと思つてたけどな。まあいいわ、フラストレー・ション溜りまくりだしどスイッチが入ったように木安の目元が鋭くなる。元来睨みつけるような目つきだけど、今は何もかもが気に食わないとでもいうよな眼だ。小型の草食動物なら、この視線だけで捕獲できるだろう。」

「あの、まだメンバー揃つてないっていうか、あの、おーい、いいんちよ」

「とりあえず、死んどけや。葬らん」

「いやあ、死なないからだなんですねけどねあはは……んぶう」

逆袈裟にふりあげられたバットの真芯が、見事に俺の体の真芯を捉える。ホームランの語源つて相手を確實に葬らん、から来てるんだぜなんていうアホなネタを思いついたが面白くない。背骨と内臓をいつしょくたに絞りあげられるような痛みが脳髄に到達するまで、時間はからなかつた。が、その短い時間さえ体を支えることはできず、気がつけば前のめりに崩れ落ちていたわけだ。道理で土の味がする。

「まだ生きてるか？ んじゃ次行くぞ」

「ま、まで……ほ、やばい、もしかしたら」

「葬らん！」

「まじ、か？」

今度こそ意識はふつつりと途切れた。

激突？ 金属バット

膝と顔面で体を支える三つん這いの体制から、何とか首だけを起こしたところへの、これまた鋭いスイングは本人の宣言通りホームランバッターの威厳と風格だ。腰の入った一撃が、再び俺のわき腹にジャストミートし、俺の意識は宇宙のかなたまで吹っ飛んだ。ちなみに後から聞いた話だが、体の方も見事に駐輪場の果てまでふつとんだらしい。

死なない体のおかげで無事なのか、死ねない体のせいで苦痛が増したのか。

考えるまい。

わずか一秒で宇宙の果てと地球の往復という、エンデバーもコロンビアも真っ青の記録を成し遂げた俺の意識なわけだが、本当に同じ地球上に帰つて来たのか？ パラレルワールドに迷い込んだんじやないのか？ 何もかもの輪郭がぐにゃぐにゃだぞ。

「それは俺の意識が朦朧としているからであつて、宇宙は今日も並べてこともなし」

「何言つてんだ？ しつかし頑丈な奴だな。俺がこんだけぶつ叩いても折れねえとか」

「いえ、折れてるんですよ。ぼっきつぼきに。ただ治りが早いだけでそうでもないよう見えてるつていうか、損な体质つて言つて、ちよ、まだぶつ叩くおつもりかよ？」

さすがにまずい。傷つかないわけではないので、きつちりとダメージは蓄積されるわけで、そうなると膝が言つことを聞いてくれないダメージを負つた今の俺は、ただの的な訳で、

「やめてー！ 俺のヒットポイントはもうゼロよーー！」

「だったらくたばりやがれ！ 葬らんー！」

そういう名前の必殺技なのか、というほどに言い切つた木安の顔には、なんとも決意に満ちた表情が浮かんでいる。快樂のためでは

ない、明確な信念のもとに行動している決意が、こちらにも伝わる。だからって暴力が正当化されるなんて、たまたまんじゃねえけどな。

「死にたくねえ！」

死なないけどな、と心の中で自分に突っ込みを入れる。むなしい。

「せ、千古くーん。あ、あの、あのね、は、はま、はませんせ」

「ぶおん、という風切り音が衝撃になつて耳孔内に荒れ狂う。びゅわんびゅわん反響して、それだけでも恐ろしい。目の前でまつ毛をかすめて静止している金属バットの先端が、鈍く輝くのも俺を恐怖に驅り立てた。

が、死ななかつた。

「せ、せえ、ふ」

玉が縮みあがつた。ちびらなかつたのは偶然でしかない。

「さすがに目撃されると言い訳できねえからな。くそつ」

何という完全犯罪思考。が、おかげで助かったのも事実なので、今だけは拾つた命のありがたみを噛みしめる。と、それはそれとして、何やら焦つた様子の吹水が駆け寄つてくる。吹水が焦つているのはさほど珍しい光景ではないが、やけに慌てるな。何だ？

「どしたんだよ？ そんな血相変えて走つて」

といつてもめちゃくちゃ足遅いから、知らないものからすれば駆け足しているかどうかも危ぶまれる。

「はう、はあ、あの、サド、サドルが」

「ああ、まだ山盛り残つてるんだけど、とりあえず今はそれは置いていいわ。本来の目的の方が出てきたし」

「目的？」

ようやく駒が揃つた。揃つままでに一回俺は虫の息なんだけどな。脇腹が死ぬほど痛い。

「そうだ。今回の真の目的、それはあいつを倒すこと！」

びしつと勢いよく人差し指を突き出す。当然指先にいるのは長さのあまりまくつたカーディガンをぶらぶら揺らす、金属バット女。

「ええ？」

「あいつぐらいの経験値があれば魔王として大幅レベルアップするのは間違いない」

と思う。俺の知る限りのRPGでは大体そうだ。

ーあ?
やんのか?」

ほら見る、めちゃくちゃ凶暴だ。経験値たっぷりのボスキヤラの
風情だろ。

「無理、だよ。ほ、僕なんかじゃ、相手になんないよ」

「ものは試しだ。攻撃魔法とか一発当ててみて」

「無理無理無理無理、そんなの使えないもん

「駄目もとでやつてみたらもしかしたらつまくいけば俺の首が何だ

が意志に反してか方向に握り田にらむ
「うー、あーこのチヤリのサヅルーー

鼻孔に突き刺さるような甘ったるさはブルーベリーガム。そして

今、俺の頭をわしづかみにしてるのは我々が顧問

「先生をつけろ、先生を

「あの、頭が割れるように痛いんですけど」

「もう一回聞くぞ。あたしの、チャリの、サドル……どうした?」

つねり。声聞いただけで全身鳥肌まみれつて、びんだけどすの利

二二四

咲水は聞いたがお前
学校中の子 いからサトリはくたけ
だつてな

あれ？ 何だこの流れ？ いや、俺じやないつていうか、俺とい

六は備なんかた

あの、ね、浜先生の自転車も、サト川がないで、古君が持つてるかも、って。そ、そっちの山に、ある? 二

そういう事情でしたかほつほつねうですか。にしてはダメージが

「あたしはな、コンビニ行ってプリンを買つてこよむと思つただけ

なんだ。それなのにチャリにサドルがない。これは犯人探し出してぶつ殺してもいいレベルでの犯罪だよな

「いや、途中がだいぶぶつ飛んできますが」

「いいよな、プリンの邪魔して生きていられるなんて思つてないよな？」

やばい、目がマジだ。覗きこめば命を食らいつぶされそつな、どす黒い光が宿つてゐる。これが狂氣といづやつか。

「ち、ちがうんです。これは部の活動の一環と/or/うか

「いつからうちの部はサドルパクリ部になつたんだよ？ 他のはいいとして、あたしのパクるつてどりつ見だよ」

駄目だ、既にこの大人の中に常識や良識はない。最初からなかつた氣もするけど。

「うなつたらやむを得ない。本来の趣旨を説明するほかない。でなければ、俺はきっと無間地獄に匹敵する苦痛をうあああ頭痛い

頭痛い！

「」これはですね、悪事を働くことによつて吹水に魔王としての経験値を稼がせて、魔王としての覚醒を促すという本来の部の活動趣旨に沿つた実験なんですうう

最後の方は絞り出すよつた声になつたが、何とか言ひきつた。と思つ。

とたんに駐輪場からは音が消え去り、風が木の葉を撫でる音だけがざわめきのように流れゆく。話し声やその他雜音もさることながら、この一瞬で場の空氣そのものが一変したような気がした。

頭を締め付ける力が弱まり、解放された俺はよろめくようにして後ずさり、周囲を見回す。が、一度では何が変わったのかは分からぬ。せいぜい吹水が近付いたぐらいか。

一度、三度と視線を巡らせてよつやく、その原因に気がついた。

「お前、今なんつたよ？」

俺を睨みつける、木安の視線が先ほどとは一変していた。なんと

いうか、それまではメンチを切つて敵視しつつも、あくまでも生徒

会や個人としての使命感のような、まっすぐな感情がその奥にはあつた。しかし今そこにあるのは、そうした悲喜こもごも全てを覆い隠してなお余りある、憎悪。嫌悪。

なんだなんだ？ 何でいきなりこんなえげつないもん向けられてるんだ？

「いや、まあ大したことないつづーか、な。聞き流して」「魔王を育成と言つたんだ。それがこいつらの部活の趣旨だからな。お前ら生徒会なのに、聞いてなかつたのか？ ちなみにこいつが魔王な」

「ひやう」「ひやう

吹水の首根っこを捕まえた浜は、鉄壁の能面のまま木安にじに對面させる。片手で人間一人持ちあがる腕力つてのもすごいが、襟首つかまれて猫のようにおとなしくぶら下がる吹水もどうかと思つ。

「ほんと、なのか？」

「あー、まあなんて言つか、そういうのもやつてるつていつか、サイドビジネス的に」

「ぼ、僕、魔王だよ」

チーン。どこかで電子レンジでもなつたのかと思つたら、どうやら俺の脳内再生だつたらしい。しかも電子音ではなく、仏壇に置いていあるアレ。（あれの正式名称は鈴と書いて「リン」と読むらしいとは後日談だ。美緒らしからぬ雑学だ）を鳴らした音だ。

「なんでわざわざ名乗るー！」

「え？ でもでも、この間美緒も言つてたけど、こちにやするなんて、ま、魔王らしく、ない、つて。ぼ、僕もそう、思つじ

「にしても今このタイミングはないだろ。ほりー、あいつやる気になつちやつてる」

バキバキ拳を鳴らして、首も鳴らして。わかりやすいやる気の発露だし、なんか携帯で誰かと喋つてるっぽいんだがこれもいやな予感しかしない。あれ？ もしかして今、俺の周りで死亡フラグがたちまくつてる？

「バツキバキにな」

「あんたのせいでしょ！ つてかサドルだつたらその中から好きな持つて行つていいかから、どつか行つてくれださこよもー」

そそくさと手近なサドルを一個ひつつかむと、トレーデマークの白衣を翻して颯爽と去つてゆく保険教師、浜西。じたくさで一番きれいに新しいサドルを持つていつたのには目をつぶつておひづ。今はそれどじるじやないから。

これで「対一」。ちなみに、浜は敵力ウントだつたので、先ほどまで俺の認識では「対一」だつた。有利になつたわけだ。なんつう顧問だ。

「もうすぐ二対一になる。あーちゃんんどバカも来るからな」「誰だよそれ？」

「副会長と会長だよ。わかれや、ボケ」

そう言えばこの間、副会長を「あーちゃん」と呼んでたな。つてことは会長が「バカ」に相当するわけだ。なんだらうか、ほとんど面識がないのに親近感がわくな。

「んでも、来るこりにはもう終わつてるけどな

「あ、何か物騒なこと考へてる顔だ。そして、めつちや嫌われてるな、俺達」

「そりやわつだろ。誰が魔王とその手下を好きに何かなるかよ。なんせこちには勇者がいるんだからな、覚悟しやがれよな」

あー、やっぱいたのか勇者。しかも美緒の推察（願望？）どおりに生徒会が勇者様（一行とか、ますます俺たち詰んでるだろ。学園生活的にも。

「つてことは、やっぱ会長が勇者だつたりすんのか？」

「んな訳ねえだろ。あのバカはあーちゃんについた悪い虫だ。いつか駆除してやる」

「じゃ、お前が」

「相手見てもの言えよな。俺みたいな素行不良が勇者だなんて世も末だる」

「自分のことをよくわかつていらつしゃる。となると……へえ、

あのおつとりした副会長が勇者な訳か。なんかタイプが違つて言うか、俺の知つてゐる勇者とはジャンルそのものが違いそうだな。

「甘つたること考えてると、ミンチにすんぞ」

「や、それはちょっとじ遠慮願いたいというか、不死身でも今はまづいつていうか」

ちらりと木安の背後に鎮座してゐるサドルの山に目を向ける。そのふもとには、器用にサドルを枕にして眠るカナメの、穏やかな寝顔がある。確認、まだ睡眠中。つまり、

（やべえ、これ以上やられるとさすがに俺の存在も危ういかもしけん）

ダメージのせいで俺を構成する神気が幾分か消滅してしまったのだろう。

この時点では俺の意識は半分眠つてゐるようピンボケで、体の感覚もいまいちはつきりしない。立つてゐるのもふわふわと雲の上にいるようにおぼつかない。多分最後の一発で完全に気を失わなかつたのは、この感覚の鈍化のせいだ。いいのか悪いのか。

「つてわけだから」

俺と木安の声が見事にハモる。向こうは完ぺきにそのつもりだ。こつちもこつちでそのつもりだが、どの「そのつもり」なのかは、次の言葉ではつきりと明暗を分けた。

「往生せいや！ 葬らん」「にげるつ！」

俺は力強く宣言し、力の限り地面をけり、力いっぱい腕を振つた。

「あ、てめ

「脱出！」

見事なまでの奇襲作戦。完璧に相手の機先を制することに成功する。背後に、行き場を失つた金属バットの処理に困つて唾然とする木安の顔を確認する。おそらく瞬きほどの間に追撃態勢を整えて全力で追つてくるだろうが、その一瞬があだになる。

「伊達に美緒から逃げまくつてねえよ」

ちなみにこの逃げ足については美緒以前はおかんから逃げるために鍛えていたのだが、惜しむらくはその両者から逃げおおせたことはないということか。ただ、それは化け物相手の戦績だ。相手が人間なら確実に逃げきる自信がある。

情けないとか言つな、生きるためなんだよ。

背後からの「待ちやがれ」の声がドップラー効果を引き起こす勢いで駐輪場を駆け抜け、校舎の角を曲がる。目指すはグラウンド、さらにはその奥の焼却炉。校舎裏に不法に投棄されたゴミ袋を飛び越え、放置されて半ば化石と化した野球のボールをけり飛ばし、第一次産業部の飼育する鶏に罵声を浴びせられながら、とにかく全力で駆け抜けた。既にこの時点で勝負は決しているといつてもいいが、とにかく今の俺がやるべきことは今のうちに一秒でも差を広げて引き離すことだ。なぜなら俺が逃げて、行きつく先には、

「お、おかげり」

「ただいま」

カナメが待つてゐるんだからな。

うまく角を曲がったあたりで消えたので、たぶん俺が消えたことすら木安にはばれていないはずだ。だとすれば奴は今頃、見当違いの方向に向かつて全力疾走してゐるはずだ。追つてくれるとどうかはギャンブルだつたが、どうやら推測した性格通りだつたようだ。俺、グッジョブ。

さすがにこの時期だと、全力疾走すれば滝のように汗が流れるが、贅沢は言つていられない。あごを伝つて落ちる汗のしづくを手の甲で拭い、ゆつくりと息を整える。

心臓が耳元にあるみたいにバクバクうるさい。耳鳴りがずっと付き纏うのも鬱陶しい。

「これでうちのボスを引っ張り出せるわけだが、ちょっと田を離した隙にこれは……」

「う、うん。ごめんね……何か、色々起こって、ちょっと混乱して、

そしたら

「まあ、謝りたい気持ちもわからなくもないんだが、もう今さらだ
しな」

「う、うん」

ワープで帰ってきてびっくり。なんせ、先ほどの教室とは比べ物
にならない濃さで、魔界の方々がうろついていらっしゃる上に、周
囲の景色も何だかどんよりと淀んでいる気がしないでもない。時折、
悪魔的な紳士に優しく微笑みかけられたり、直立二足歩行するナマ
ズみたいなのと目があつたりするのは愛嬌だ。

どうやらこの魔界現象は、吹水の精神状態に大きく影響されるら
しいことが判明したわけだが、

「いよいよ、色んなもんが佳境っぽいな」

こんな風に目に見えるクライマックスって、何かいやだな。

カナメを背負つた俺は、魔界の方々に愛想笑いをふりまきながら
一路部室を目指す。

「でもたぶん、あの場所で色んなもんが決着するんだろうなー。美
緒いるもんなー」

何の根拠もないが、俺の本能がそう告げていた。

「さつすが俺、神様の下僕だぜ」

神様の体温は、背中にほんのり暖かい。

「汗臭いよう」

「だつたらてめえで歩け」

「かれーしゅー」

「断じて違う」

「かづつ

「痛い」

燃料補給完了。はあ、ガス欠になるまで働かせてもりこますよ、
神様。

怪獣？ 大決戦

生物実験室の角を曲がるあたりで、何やら言に争つ声が聞こえてきた。

「なんだ？ もう何か始まつてんのか？」

角を曲がつて、薄暗い廊下の奥に目を凝らすと、数名のシエルエットが目に入る。この距離だと顔ははつきり見えないが、それぞれの特徴的な輪郭でおおよその想像がついた。

腰まであるポーテールが美緒、ビスクドールのようなフリルひらひらが副会長、その隣の男子生徒がおそらくは会長だらう。なぜだか会長に気安く手を振つてしまいそうになるのは、先ほどやり取りのせいだらう。

ただそつもいかないのは、廊下を所狭しと歩き回る魔界の方々のせいだ。

まだこの世界では実体化していないとはいって、その密度はこちらの世界にある物体とそう変わらないほどにはつきりと見えてくる。それが壁をすり抜けたりして普通に歩きまわつてているのだから、下手なホーラーハウスなんかよりよっぽど恐ろしい。

そんな中を、美緒の元気いっぴいの声が突き抜ける。

「だから言つたではないか、我々の幽霊君は今回の一件とは全く関係ないと。見たまえ、この光景を。先日の事件、原因はこれだよ」「だから来てるんだるー。もう幽霊どつのこいつのじやなくつて、魔王いるつて聞いたぞ。も一変なのいっぴい呼んじやつて」

「君は黙つていたまえ、会長君。私はここの、自称勇者君と話しているのだよ」

「自称じゃないです、ちゃんと勇者なのです。天使からの任命を受けたのです」

そう言つて紙切れを美緒に向かつて突き出してるけど、なんだ？

「雇用、契約、しょ？」

「そうです。私はきちんと勇者として、神の使いと契約したのです。おかげでこうして魔力見ることもできるですし、経験値をためるレベルも上がるのですよ」

「にしてはレベルが一十とは。そのレベルでクリアできるRPGなどあるのかい？」

「仕方ないだろ、二十になつた時点で急に魔物が出てこなくなつたんだから。ちなみに俺は一十三ね」

何のことかわからないので、とりあえず近づくことにした。にしても、ぶつからないとはいえ魔界の人、邪魔だな。すり抜けりやいいんだけど、なんかイヤだし。

「お、来たねシユータロー。いよいよ最終決戦だよ」

「何が最終決戦だよ、だ。それよか先に片付けることあんだろー」

「そうだね、先にこの自称勇者たちを葬り去らなければだね。流石はシユータローだ」

もう溜息も出ねえよ。

「れ？ 春ちゃんはどうしたの？ 君らのとこに行かなかつた？ まさか、春ちゃん倒せたの？」

「なんで俺の周りには『倒す』とか『やつづける』つていう発想が普通に出てくる輩ばつかなんだよ。どこの世紀末だよ、この学校は『『』めん』めん、ついついこの人たちとこるとそういう発想が普通になつちやつて」

なつちやつて、じゃねえよ。好青年な笑顔を振りまいてはいるが、やつぱりこの会長も一癖も二癖もありそうな匂いがふんふんする。

「で、倒したのかね？」

「お前も何を気にしてんだよ。倒してねーし倒せるわきやねえだろ、あんなん」

「ちなみに春ちゃんはレベル九十九だからね」

「なんであいつだけカNSTしてんだよー！」

道理で一発でチャリが粉碎されるわけだ。まともに戦わなくて良かった。

「さや、さ……会計ちゃんは、すつごい気合い気入つてたですからね。一人でもずっと校内で狩りまくつてたですし」

「そういえばさつさも経験値がどうこうとか言つてたな。世迷言にしては、木安のレベル九十九が妙に現実味を帯びているし、気に入るな。」

「つてか、レベルとか経験知つて何なんだよ？ あんたらほんとに勇者なのか？」

美緒が確認してるだろうけど、とりあえず美緒フィルターを通りない情報を確認しておぐべきだと判断する。背中では何やらカナメが「ごそごそ」と動いてくすぐつたい。

「私たちは正真正銘勇者です。これがその（「」）証明の契約書です。」

そう言つて、さつき美緒に見せつけたらしい紙切れをポケットから引っ張り出して、俺の鼻つ面に突き付ける。

「なになに？」『勇者雇用契約書』だと？ うわ、字こまかっ！ A4用紙一枚にびっしりと書き込まれた内容は、文字が細かすぎて一行目で読むのを放棄したくなるが、契約書というのはそもそも読む気を起させない目的でこんな細かいという話を聞いたこともある。しかも、悪徳な契約であればあるほどに。

「んで、えーと雇い主が「神の使い」で、業務内容が「魔物退治」と。うつさんくせえな。そもそもこの神の使いつて……」

「ん？ 何かがひつかる。が、目の前の契約書の内容に目を奪われた俺は、迂闊にもその引っかかりを重要視することはなかつた。それより目を引いたのは、契約書の備考欄に書かれた「魔物」の欄についてだつた。

「何だこの「魔物の定義については魔王、大魔王を含むものとする」つて」

しかも「十一寧に、黄色のラインマーカーで線まで引いてある。

「そこが重要なのだと、神の使いが言つたです……夢の中で」「夢？」

訝しがる俺を制するよつに、会長が割つて入る。用意していったセリフを言つようなめらかさがちよつと鼻につくな、こいつ。親近感、撤回。

「そ。俺たちみんな、夢ん中で契約してたわけ。俺のもあるんだけど、俺のは勇者のサポートつて名田だし、春ちゃんに至つては職業欄を自分で書き換えちゃつたらしよ。狂戦士に」

まあお似合いな職業ですこと。

「それにほら、レベルも上がつたのです」

そう言いながら会長は前髪を書きあげ、ずいとおでこを差し出してくる。そして何を思ったか、口を開じて「ん」と力み始める。と、見る見るうちに顔が真つ赤になる。頬つぺたや田の周りが赤く染まるのはなんだかほほえましい光景だ。

「あ、ほんとだ。パラーメーター出てるな」

しばらくすると、会長の額にはうつすらと文字が浮かび始め、それが次第にはつきりと読める濃さになつたところで、ゲームなんかで見慣れた構成であることが判明する。

名前と、その下には「ト寧にヒットポイントやレベル、ステータス異常まで表示されている始末だ。ほんと、まんま RPGな奴らだな、こいつら。

「しかも、『天然』つて……これ、ステータス異常だつたんだな」

「それには俺も驚いた」

じゃあ、これで行くと吹水は『混乱』で、美緒は『暴走』あたりが出そうだな。って、そんなことはどうでもいいな。とりあえず問題のは、本当に勇者が現れて立ち塞がつた、つてことだからな。ますますこの世界が信じられなくなつてきたよ、俺。

「で、ここしばらく学校のあちこちに湧いて出た魔物を倒して経験値をためていた、つてわけだよ。ちなみに、レベルが上がるとちゃんとファンファーレも鳴るんだよな」

その言葉が、どうにも俺には座りが悪い。喉に魚の骨が引っ掛けようかな不快感とでも言えばいいんだろうか。それに何だろうなこ

の、胃のあたりがムカムカすんのは。

隣にいる吹水も同じらしく、ギコシと下唇を噛んで、つま先に視線を落としている。表情こそわからないけど、グーを握った手が痛々しい。

「で、その勇者様」一行は、我々に何か用でもあるとこりのかね？「だから、言つたですよ。て、てん……部長さん、即刻魔王を引き渡すです。先ほど、うちの会計から連絡があつたですよ。委員長さんが魔王だと」

やつぱりさつときの電話はそつだつたか。そつ来るか。そつなるよな。勇者だもんな。

「だが断る

見事な即答。そしてやつぱり、じつはまつなるよな。天王寺美緒だもんな。

まあ、これには俺も賛同だ。何だか知らんけど、この勇者たちに味方してやる気には、どうしてもなれない。

美緒が副会長と吹水の間に立ちふさがるよつこ仁王立ちしたので、俺もその隣にそそくさと移動する。一応これでも男の子だからな。「あのセー、こんな変なもんがうじゅうじゅう出てきてんのに、そんなこと言つてどうすんの？ 普通の生徒とかに見えるよつになつたらパニッシュクビ」ひじや済まないよー」

言つとおりだ。恐ろしく正論だ。ここつのはまつとは徹頭徹尾聞違つちやいない。

腹がたつほどにな。

「というわけです。さあ、魔王を」

「断ると言つたはずだよ。我々の目的は彼女を魔王たらしめることだ。たとえどんな困難が付き纏おうとね。ひこてはそれが超科学部の到達点、魔法への最短距離だからね」

そしてこつちは徹頭徹尾、間違つていて。普通の頭で考えれば、どつちを応援するかなど考へるまでもない。幼児にもわかるレベルだ。

「そんな無茶苦茶なー。君らの理屈で学校中に迷惑かけていいはずなんて」

「ば、僕は」

それまで蚊帳の外のように、ポッシンと輪のはずれでつま先ばかりを見つめていた吹水が、唐突に口を開いたかと思つと、なんともらしくない勢いで身を乗り出した。美緒さえもが一歩引くほどの勢いに、生徒会ズもたらを踏んでいる。

「強くなりたくて、魔王になることを選んで、でもまだまだ弱くて、でも、でも」

言葉の一つ一つがきちんと選別されていないせいでの意味をなしていないが、その必死さにはさしもの会長も口を挟みあぐねている。

その間にも、魔界の住人はうろうろと周りをうろついているが、不思議なことにその誰もが吹水のことを一瞥するように視線を向けて歩き去つてゆく。たぶん、俺達に向こう側が見えているように、向こうからもこちらが見えるようになつてゐるんだろうな。その手始めに、やっぱり魔王から見えるようになる、ってことなんだろうか。『ピンポン正解だ。多分もうちょっとしたらお前らのことも見えるようになつて、たがい意志の疎通とかできるようになり始めるぞ。そしたら、魔力が見えない奴らにも見えるようになるだろうな』『相変わらずいきなりだな。んで、大体どれぐらいの時間がかかるもんなんだ?』

『わかんねえよ、そんなもん。だって、こんなことなんつたの初めてだからな。ただ』

『ただ?』

『うわ、ここで一番聞きたくない一言だな。

『時間よりも、なんかでつかいきつかけでもあれば一発だらうな』なんともあてにならない話だが、とりあえず大ピンチなのは確認できたわけだ。が、

「僕は、立派な魔王になる! 魔王になつて……」、高校生活を、楽しみたい!」

「」の宣言に、胸を撃たれたように思考がはつきりする。それまでのやもやとした考えが、霧があはれるようにクリアになつたのがわかった。

理屈や道理じゃない、けれど人の心を掴む力のある言葉というのは、いつでも唐突なくせ、有無を言わせない。これがまさに、俺にとつてのそれだった。

（なんだ、単純なことだったんじゃねえか。悩んだのがあほりしくなる）

青春したくて、何かが起きそうな気がしてずるずると美緒につきあつた自分と、積極的に自分から楽しむために、美緒のところに飛び込んで頑張った吹水。一緒になんていふには俺は何もしてなさすぎる。でも、わかる気がした。

思わず口元がゆるんでしまうのを引き締められない。

「何を勝手なこと言つてんの。そもそも君が魔王になんかなつたら、いろんな問題が起きてるわけで、とつとと魔王をやめてもらつか俺達に退治されちゃつてや」

「よく言つた、委員長君！　君のその覚悟に私のハートは震えまくつたよ」

「うん」

何やらやり切つた感のある吹水は、紅潮する頬に満面の笑みをたたえている。ただの近眼用になつたセルフレームの眼鏡が斜めに歪んでいるが、いい笑顔だと思った。

「はあ～？」

対して会長は、まあ、そりやそつなるよなつていうリアクションだ。どう考えたって自分が正しいのに勢いだけで押し切られた時、人間つてアホの顔になるんだな。知つてたけど、目の当たりにするのは初めてだ。俺つていつもこんな顔してたのか。

「というわけで会長君。我々は忙しいのだよ。彼女を大魔王として覚醒させ、なおかつこの世界をも救う。どちらもやらなきゃいけないのが、我が超科学部の選択だよ」

「そんなこと、できるはずが

「できるかできないではない、やるのだよ！」

何だこの自信。どつから湧いてくるんだよ。とはいつものことだが、今日の美緒は一味違った。どこが、と言われても困るんだが、何やらいつもの無茶なノリだけではない何かを感じさせる。そう、まるでまだ切り札を隠し持つているような……まさか、

「おい美緒！」

「というわけで出でよモンスター！ 勇者どもを駆逐するのだ！」
「やつぱりかーい！」

スカートのポケットから引っ張り出される、見慣れた魔法陣。何と書いてあるのかは俺には判別不能だが、知りたくもない。派手に閃くスカート、開くスリット、生々しい太ももの向こう側にちらりと見えるかもしれないもののために俺は少しだけかがんで

「シユウう」

意識がもうひとつし、その場に崩れ落ちる。

「今、美緒のパンツ見たでしょう」

「い、ちが……」

思考が混濁し、脈拍が弱まつていいくのがわかる。視界が暗くなる。ああ……。

「何をやつているのだねシユータロー。パンツならあとでいくらでも見せてやる、今は」

「マジでか！」

「ふわあ、シユウがあたしの束縛を振り切つたあ

思春期のリビドーをなめるな、ということだ。しかし何故だろう、涙が止まらない。

と、こんなアホなことをやつてている間にも、美緒の展開した魔法陣はどことも知れない世界につながったようで、溢れだす光の中からたくましい人型のシルエットが現れ始めている。まだ輪郭だけで細部は全くわからないが、それでも筋骨隆々っぽい上半身や、天井に頭がつきそうなほどの大体は、なんとも頼りがいがありそうな

がつしゃああん

「あーちゃんに何すんだ、やけんなよ。じゅっせえええい！」

「あ」

砕け散るガラス片をものともせずに、廊下に飛び込むもう一つの影。ぶかぶかカー“ティガン”が見えたときには、既に金属バットの一撃が魔法陣の光の中に叩き込まれていた。

ただそれだけ。その一撃で、すべては終息した。こゝ、一階なんだけどな。

霧が晴れるように光は霧散し、断末魔の声どころか姿を見せることすら叶わずに、魔物は消滅したわけだ。いつたいどんな奴だったのか興味は尽きないが、それはまたの機会に。と、

ぱらぱらぱらぱらぱらん

「あ、レベルが上がったです」

「おおー、一気に三三十。かなり上級なモンスターだったってことか。見えなかつたけど」

鳴り響くファンファーレの中で、会長と副会長の額の数字が書き変わる。

「やれやれだ」

「やれやれじやねえ、レベル上がつちやつただろ、あいつらー。」

「なんとも困つたものだね。といつか何をやつているのだね君は。早く手を打ちたまえ」

「手を打つって、どうじろつて」

「おらあ！ やつと見つけたぞ魔王の手下あ。やつと往生しやがれ！」

さすがにもう時間稼ぎは終了か。レベル九十九の情報を聞いたせいか、さつきよりも恐ろしそ三倍増し、金属バットもエクスカリバーに見えてしまう。

ともあれ、

「なんか、いつの間にかクライマックスの氣がするんだが」

「奇遇だね、私もそんな気がしなくもないよ。うん？ どうしたね、

いい顔をして「

「どうもしねえよ。てめえこそ楽しそうだな」

「そりやそうだ。楽しくないわけがない」

そんな状況だといふのに俺と美緒の顔には焦りや不安といつもの
はけらも見えない。むしろ、ちょっと危ない笑みが浮かんでいる
ほどだ。自分の顔はわからないが、頬がひきつっている気がする
で、かなり変な顔で笑っているはずだ。

「かくなるうえは！」

「うえは？」

美緒が勢い込んで床を踏み鳴らし、歌舞伎俳優もかくやといつ勢
いで髪をなびかせる。

「実力行使だ。来たまえ、木安春！」

「じょおおおおとあだあ、天王寺い。」ここで俺の経験値にしてやん
よお！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035x/>

かみ・つき

2011年10月20日18時53分発行